

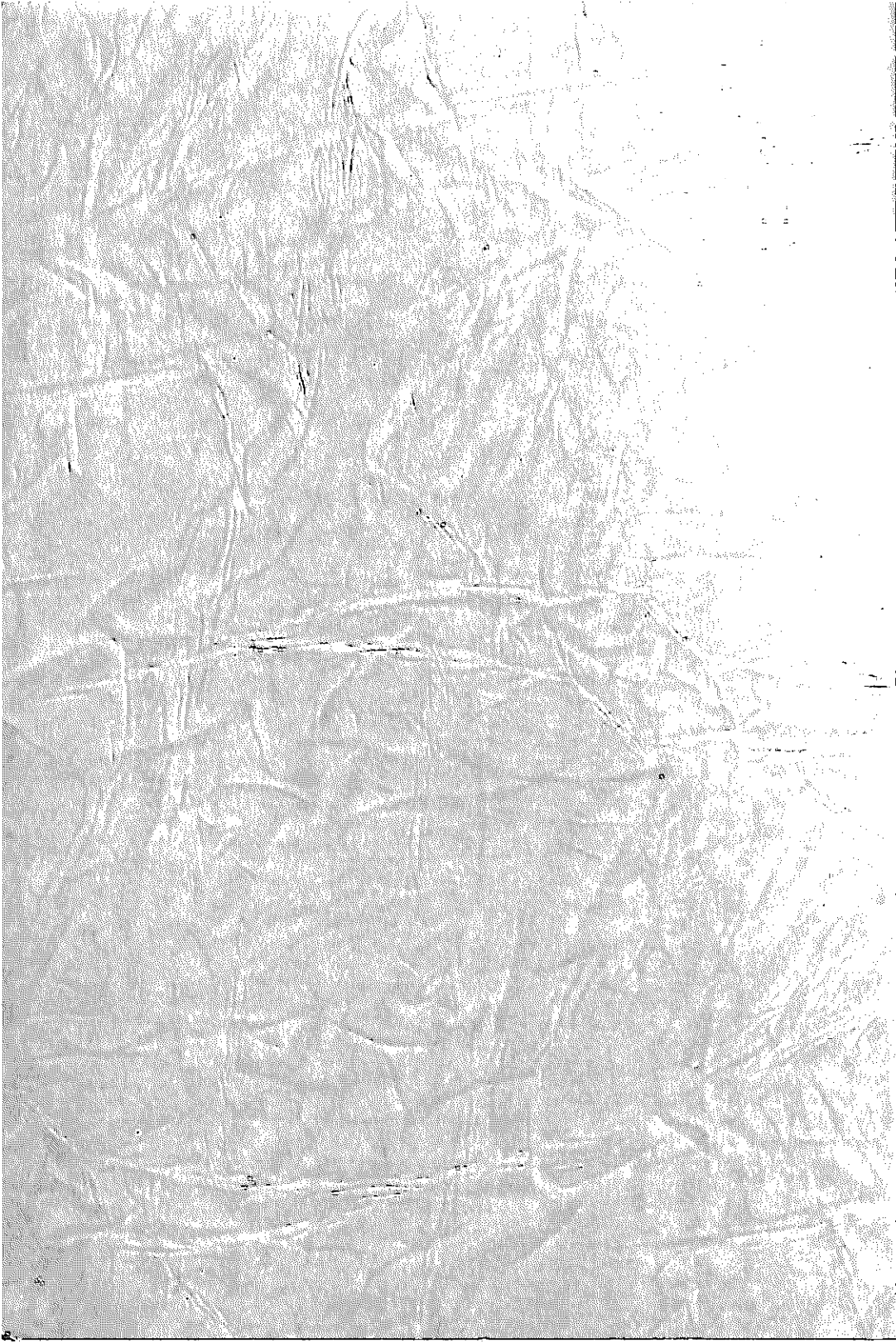
昭和52年度

都 倫 研 紀 要

——教材内容をどうしぼり深めていくか——

第 16 集

東京都高等学校「倫理・社会」研究会



は し が き

会長 岡本武男

都倫紀要第16集一教材内容をどうしぼり、深めていくか、が多くの先生方のご努力で発刊されることになった。忙しい教育指導の合間をぬって、先生方が相集うてその研究成果を問われるわけである。そのご熱意とご努力に深く敬意を表する次第である。「倫理・社会」が廃止になって、「社会」が復活しようとする。20年に近い「倫理・社会」の研究と実践の成果が消えないことを祈ること切である。それだけにこうした日常の教育実践に深く結びついた研究はまことに貴重と言わねばならない。

さてこの冬休みに全国の「倫理・社会」の先生たちと四大仏跡巡りを中心に駆け足でインドとネパールの歴史遺跡を廻ってきた。仏陀が悟りを開かれたブタ・ガヤの大塔を最初に訪れた。仏跡の聖地としてはまことに閑散としていたように思われる。菩提樹の下にあった金剛座は仏陀が座禅をされたところであり、ここで悟りを開かれたということを知り、無量の感慨に襲われた。仏陀の説法の地とされる靈鷲山、竹林精舎を訪れ、さらに5-12世紀にかけて古代インドの仏教の中心地として栄え、最盛期には一万人の学僧が学んだといわれる仏教大学があったナーランダを廻る。有名な玄奘や義浄もここに学んだといわれる。広大な僧院の跡の一部が発掘され、赤煉瓦の大塔の遺跡、東西2列に並んでいる広大な煉瓦造りの建築群が、隆々と栄えていたであろう往時の仏教を十分偲ばせてくれる。ゴラクプールに近い仏陀終焉の地クシナガラを訪れる。ここは終焉の地にふさわしく静寂さが漂っていた。しかし一部発掘された煉瓦造りの遺跡は、往時の僧院の壮大さを偲ばせるに十分であるとともに、そこには仏陀の徳を慕ったであろう多くの人々の息吹きがなお残っているように思われた。インド政府によって建立されたといわれる大理石造り寺院の中に6メートルの巨大な石の涅槃仏が安置されていた。

再びネパールに入り、仏陀降誕の地ルンビニーを訪れる。現在のルンビニーは淋しい村で、広漠とした野原にヒンズー教の小堂、沙羅の樹、アショカ王石柱の下部等が夕日の中に静かに並んでいた。発掘されていた煉瓦の僧院の遺構は、仏陀の降誕をたたえ、これを記念したに違いないことがよくうかがわれる。

最後に、仏陀が初めて5人の弟子と会い教えを説いたといわれる、いわゆる初転法輪の地サルナート、仏典でいう鹿野苑を訪れる。ここはベナレス近郊10キロの地でマンゴーの大樹が多くの堂塔や僧院の遺跡の上に涼しい蔭を作っている。アショカ王時代に中心部が造られ、5-6世紀のグプタ朝時代に拡大されたダメークの大塔、基部がそのままの位置に残っているアショカ王詔勅が刻み込まれているアショカ王石柱もここにある。

インドはヒンズー教の国である。ゴラクプールに一泊した時はヒンズー教のお祭りで、ホテルの近くにある小さなヒンズー教の寺では終夜鐘鳴物入りで呪文を唱え、喧騒を極めて眠るどころではなかった。有名なヒンズー教の聖地ベナレスでは、聖なる河ガンジスで熱心な信者が沐浴して神に祈っていた。ブダ・ガヤの聖地を除いて仏教の聖地は、堂塔、僧院等の赤煉瓦の遺跡のみが唯往時を偲ばせているだけであった。そこを訪れて拝する人の影はまばらであった。仏教の人口はインドでは2%に過ぎないといわれる。

インドでは仏教は過去のものになってしまっていた。あれ程栄えた仏教がなぜ今日インドから影をひそめ、中国、日本に伝わってそこに生きているのだろうかということについては、最も大きな関心呼んだ。後でタージ・マハールの華麗な巨大さをみて、巨大な回教の力の為に積滅的打撃を受け、仏弟子も滅され、そのまま立ち上ることができなかつたに違いないと思った。しかしナーランダに学んだ優れた中国の学僧たちには、回教の勢力は及ばなかつた。インドに学んだ優れた中国の学僧はよく人々を教化したに違いない。それが仏教を中国に栄えさせたのであろう。このことは

日本においても同様である。ナールダの巨大な大学の遺跡をみながら、優れた文化を継承し、これを発展させるものは優れた弟子ではないかという思いを深くした。

そして教育とは、やはりよき人を育てることではないかと考えた。

目 次

は し が き	1
I 研究主題と研究体制	8
研究分科会参加者名簿	6
II 研究会の全般的活動の概要	10
III 特別分科会「必須社会・選択倫理の内容を考える」…	12
— 教育課程審議会の答申をふまえて	
IV 本年度研究例会における講師の講演集	16
V 研究報告	27

第1分科会「高校生と倫社」

研究経過報告

個人分担研究報告

① 「高校生と倫社」 王子工 大木 洋

② 「平明さと深さの結びつきを求めて」

高島高 葦名次夫

③ 「高校生に考えさせるには」 青山高 小川一郎

④ 「今年の倫社ノートから」 戸山高 沼田俊一

第2分科会「現代と人間」

研究経過報告

① 「核家族化と教育問題」 東高校 井川哲夫

② 「現代社会の病理」 志村高 木村正雄

③ 「現代社会をどうとらえるか」

横須賀学院 松永 豊

④ 「現代と人間」の学習において、生徒とかみあう授業	79
・教材をいかにつくるか	府立工 関根荒正	
⑤ セミ「甘えの構造」	育英工専 木戸能史 83
⑥ 「視点設定の試み」	駒大高校 市川仏乗 88

第3分科会「先哲の教え」

研究経過報告	92
個人分担研究報告	104
① 「高校生と論語」	十文字高 岡田春生 104
② 「花伝書をどう教えるか」	” ” 108
③ 「風姿花伝に学ぶ」	葛飾商 浅香育弘 109
④ 「風姿花伝の花について」	京橋高 飯岡祐保 113
⑤ 「東洋思想の源流—あなたの意見集」	” 117
⑥ 「風姿花伝を読んで」	本所高 勝田泰次 121
⑦ 「親鸞—絶望故の歎喜」	池袋高 池上 裕 123
⑧ 「人は努力する限り迷う—倫理社会—私の反省と意見」	駒場高 細谷 斉 127
⑨ 「ギリシャ悲劇における倫理思想」		
—オイデプス王を中心として—		
	江戸川高 泉谷まさ 133

VI 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約	137
事務局だより	141
あ と が き	142

研究分科会参加者名簿〔五十音順〕

※印は分科会世話人

◎印は特別分科会世話人

〔第1分科会〕（高校生と倫社）

葦名次夫（高島）	鮎沢真澄（戸山）	石森勇（竹早）
泉谷まさ（江戸川）	市野武男（向島工）	大木洋（王子工）
小川一郎（青山）	小川輝之（清瀬）	※小河信国（板橋）
川名まゆみ（藤村女子）	※木戸能史（育英工専）	斉藤修（光丘）
佐々木誠明（鷺宮）	渋谷等（東京家政学院）	寺島甲祐（大森）
沼田俊一（戸山）	宮崎宏一（江北）	※山口通（立川・定）
山本真理（藤村女子）		

〔第2分科会〕（現代と人間）

秋元正明（学芸大附）	※井川哲夫（東）	市川仏乗（駒大附）
井原茂幸（鷺宮）	海老原一男（江東工業）	木村正雄（志村）
小林祐一郎（本所）	関根荒正（府中工）	津田信一郎（羽田）
徳光克哉（東電学園）	※野村誠（本所工）	花輪紅一郎（城北）
松永豊（横須賀学院）	※矢島賢二（北）	山下順吉（小山台・定）
吉沢輝久（杉並）	渡辺道子（目黒・定）	

〔第3分科会〕(先哲の教え)

浅香育弘(葛飾商)	飯岡祐保(京橋)	※池上 裕(池袋商)
※内田君夫(攻玉社)	海野省治(三田)	※岡田春生(十文字)
勝田泰次(本所)	河野速男(野津田)	菊地 堯(国分寺)
古賀進一(南)	五味 誠(保谷)	坂本清次(白鷺)
佐藤哲男(大山)	佐藤 勲(桜町)	渋谷紀雄(墨田川)
成瀬 功(葛飾野)	田中正彦(小石川)	館入慧子(共立女子)
深野良寛(秋川)	細谷 育(駒場)	三宅宜幸(開成)
吉沢正晶(大森)		

〔註〕当初、日本・東洋・西洋の思想に分れる予定であったが、他の分科会に比し分散することを恐れ、話合いの結果一つの分科会に結束して研究活動をすることになった。

〔特別分科会〕

秋元正明	浅香育弘	葦名次夫	飯岡祐保	市川仏乗
市野武男	内田君夫	岡田春生	小川一郎	小川輝之
小河信国	◎菊地 堯	木戸能史	木村正雄	斉藤 修
坂本清治	佐々木誠明	佐藤 勲	佐藤哲男	杉原 安
鷺見美雄	津田信一郎	寺島甲祐	永上肆朗	野村 誠
館入慧子	沼田俊一	◎細谷 育	三厨良一(三田)	
宮崎宏一	村松悌二郎(府中西)		矢島賢二	山口 通
吉沢輝久	◎吉沢正晶			

I 研究主題と研究体制および紀要の編集方針

研究部長 浅 香 育 弘

研究副部長 内 田 君 夫 小 河 信 国

〔本年度の研究主題〕

教材内容をどうしぼり深めていくか

〔研究主題設定の趣旨〕

(1) 都倫研も創設以来16年目を迎えたわけであるが、57年度からの大巾改訂をひかえ、大きな転期に立たされている。この際われわれは脚下を見直し、日々の教育実践や研究会活動の実績を踏まえつつ、将来の倫社教育のあるべきすがたを模索していかなければならない。

過去研究会は、「倫社とはなにか、どうあるべきか」を軸とし、「指導内容の研究」と「指導方法の研究」を車の両輪として研究を推進してきた。つまり教師自身の研修を基礎とし、生徒に何を、どう教えるかを求めてきた。最近はその重点が移っている感じだが、まだ十分とはいえない。

(2) ここ2年程研究主題としてきた生徒の実態に対応した内容の平明化なり、わかりやすい授業を企図することは転期に立つ倫社のあり方を考える際に避けえない今日的課題である。しかし多様化した生徒の学習意欲を高めるためにも、更に考えねばならぬことがある。

一つは現代の高校生に即応した最低限教えるべき基本的事項(ミニマム・エッセンシャルのようなもの)はどのようなものであるべきか、教材内容を精選し、しぼっていくことであり、いま一つは現代において緊要であり、生徒に深い感動を与えるようなすぐれた思想家の教えの核心・真意はなにか、理解を深め精選していくことである。両者は表裏の関係をなす。

〔研究体制〕

そこで本年度は、三つの分科会を構成し、現代青年の課題・現代社会の課題・或いは先哲の教えの中から、最低限教えるべき基本的事項はなにかを検討することと、各分科会ごとに1つのテーマ或いは1人の思想家を選定し、調査・話し合いや読書会・勉強会の形で、年間を通し研究を掘下げていくことにした。このことは個人の自由研究をさまたげるものではない。今年の分科会組織は次のようになった。

第1分科会「高校生と倫社」

(高校生のかかえている諸問題に倫社はどう応えるべきか)

第2分科会「現代と人間」(現代の諸問題に倫社はどう迫るべきか)

第3分科会「先哲の教え」(現代の緊要な課題にどう応えているか)

特別分科会「新科目の内容を考える」～教育課程審議会の答申

をふまえて

〔紀要の執筆要項〕

<執筆のねらい>

本年度の研究主題「教材内容をどうしぼり、深めていくか」について、各分科会における共同研究、また個人分担研究の結果を具体的に紙上に報告する。どららも、あまり型にこだわらず、自由に研究成果を発表する。

<各分科会の研究経過報告>

各分科会の世話人は、従来通り、各会の研究活動の経過をまとめる。その際、文献の読み合せ、研究交換・討論の重要な部分については、わかりやすく筆録報告をし、会の雰囲気や伝えられるよう心掛ける。

<個人分担研究報告>

テーマ (主要事項・サブタイトルなど)

1. このテーマをとりあげる理由、又はこのテーマの学習のねらい(0.5P)
2. 小項目をいくつか立てて、それについて平易な文献資料の抜萃を典拠を示して、出す(3.0P)
3. 指導上の工夫・留意点・問題点などをもってまとめとする(0.5P)

Ⅱ 研究会の全般的活動の概要

〔第1回〕 5月31日(火)総会・研究発表大会 於東京都教育会館

1) 総会

挨拶 会長 岡本武男氏

会務、決算の報告および承認 都立保谷高 杉原 安氏

事業計画・予算・新役員の選出 同

研究事業計画・研究主題の提案承認 都立葛飾商 浅香育弘氏

2) 研究発表ならびに研究協議

「昭和51年度の研究活動の総括」 都立江北高 宮崎宏一氏

「話術に自信の持てない教師の苦肉の試み」 都立小石川高 田中正彦氏

3) 講演

「学問と教育のあいだ — 社会思想と文学・私の場合」

東京大学教授 山下 鑿氏

〔第2回〕 6月14日(火)第1回例会 於都立清瀬高校

1) 公開授業・研究協議

「現代家族の問題点」 同校 小川輝之氏

2) 分科会

分科会の結成・世話人選出・分科会の活動計画について協議・決定

3) 講演

「青年とアイデンティティの問題」慶応大学医学部助教授小此木啓吾氏

〔第3回〕 10月20日(木)第2回研究例会 於都立江戸川高校

1) 公開授業・研究授業

「ギリシヤ悲劇について」 同校 泉谷まさ氏

2) 研究発表

「ヘブライズムの人間観について」 共立女子高 縮入慧子氏

3) 特別分科会報告

「必修社会・選択倫理の動向」 都立大森高 吉沢正晶氏

4) 講演

「ギリシャ悲劇の倫理思想について」 東京大学教授 小倉志祥氏

〔第4回〕11月22日(火)・23日(水) 全倫研秋季大会と共催
第3回研究例会 於川崎サレジオ高校

1) 公開授業

「世界観の類型のまとめと比較」 同校長 ガエタノ・コンプリ氏

「基本的価値と人生～美・芸術と人間」 同校 高野啓一郎氏

2) 公開授業についての研究協議、および

「本校の宗教・倫社の方針について」 同校 大橋義弘氏

3) 全体協議

「指導要領の改訂の動向と倫社」 都立国分寺高 菊地 堯氏

— 現行「倫理・社会」をいかに生かすべきか

4) 記念講演

「高校生の心の健康」 浜松医科大学教授 大原健士郎氏

5) 臨地見学 円覚寺—東慶寺—松ガ岡文庫 (貸切バスで見学)

〔第5回〕2月10日(金) 第4回研究例会 於都立忠生高校

1) 公開授業・研究協議

同校 蛭田政弘氏

「高史明著『生きることの意味』を読んで—特に暴力について」

2) 講演

「日本近代百年の哲学と思想」 東京外国語大学教授 宮川 透氏

3) 研究報告(スライド利用)

「インドの仏跡を訪ねて」 都立三田高 中村佑二氏

Ⅲ 特別分科会「必修社会、選択倫理 の内容を考える」

研究経過報告

文部省教課審の動きに平行して、昭和50年度に発足した本分科会は、本年度で第3年目の研究活動となった。指導要領作成協力者会議よりの報告をほとんどその都度受けながら研究協議を重ね、会の意見を協力者会議に反映するための努力を共に続けてきたものであった。

1. 第1回分科会 52. 6. 21. 於日大二高

御厨三田高校教頭より「必修の社会」単元構成私案の提示があり、これについて研究協議、特に内容全体を貫く原理をどう考えるかが懸案となる。この時の構成案の大綱は次のようなものであった。

I. 現代社会と人間 1. 現代社会と青年 2. 環境と資源

3. 産業社会と国民福祉 4. 現代社会と青年

II 現代に生きる文化と思想 1. 人間と文化 2. 青年と思想

(小単元 略)

2. 第2回分科会 52. 7. 21. 於都教育会館

長時間に亘り、懸案の必修社会内容全体を貫く原理的なものを探る討議、及び前回残されていた政・経領域の内容構成案について、小川輝之教諭(清瀬高)、中村祐二教諭(三田高)よりの提案をもとに討議、この段階のまとめが、夏の全倫研大会における関係分科会に提案された。すなわち、単元構成の視点として、(1) 人間は仮に縦に時間的なもの、横に空間的なものとの中心に存在するものであること、そして縦・時間的な視点は歴史・倫理・宗教などが提供する。また横・空間的な視点として、地理・政・経・哲学などによって与えられる。(2) 人間は社会・環境から規制される面と同時に、社会環境を創造していく自由と主体性をもつものであることに気づかせる。という二点から、

- I 現代社会と人間 1. 現代社会と青年 <現代に生きる><現代社会の特質><未来社会の展望と問題点> 2. 環境と資源 <地球と生態系><環境の保全> 3. 産業社会と国民 (略) 4. 現代の政治と国際社会 (略)

- II 現代に生きる文化と思想 1. 文化と人間 <風土と文化><日本文化の伝統と風土><文化の創造と人間> 2. 現代と思想 <人間の尊厳><個人と社会><愛と幸福> 3. 未来に生きる青年と生きがい <自由と責任><生きがいの探求><人類愛・民主主義の倫理> (以上、当時の提案内容から)

3. 第3回分科会 52. 9. 30. 於三田高校

必修の社会について最近の協力者会議よりの報告を受けて、(1) 指導要領は大綱を示すだけのものになること。(2) シナリオは示さない、(3) 二本の柱でまとめる、などにつきうかがい知る。

基本方針

1. 広い視野に立って、現代社会の認識に基づく人間主体の生き方が自覚できるようにする。
2. 中学校「社会」を土台に、基本的な問題について、現実から意味を大きくとらえて理解できるようにする。
3. 主題に基づく主体的な学習活動ができるようにするとともに、指導計画の様々な工夫ができやすいような内容とする。

内容

I 現代社会の基本的内容

1. 環境と生活 2. 現代の日本と国際社会 (内容例 略)

II 現代に生きる人間の倫理

1. 人間と文化 2. 現代社会に生きる人間 (内容例 略)

選択の倫理の基本構想については、

○前半で系統学習、後半で課題学習のようなもの

○原典学習なども

○多様な扱いの工夫

○日本人の思想形成にも力点を置く、など。内容の一例として、

1. 人間と思想 (1) 思想の源流と自己探究 (2) 思想の歴史的形成
2. 日本人の思想
3. 現代社会の倫理と思想 (1) 現代の思想 (2) 現代の倫理と課題
4. 第4回分科会 52. 10. 24. 於青山高校

前回提案された内容の II、2.につき、前回の討議をふまえて、修正案が提案され、これについての話し合いをまとめると、次のようになる。

II、2. 現代社会に生きる人間

現代に生きる人間として、自己とは何かを探究させるとともに、倫理・哲学の基本的問題について理解させる。また、自己の人間形成の課題について、先哲の考えなどもとりいれながら考えさせる。内容としては次のようなものが考えられる。

青年と自己探求

現代社会の問題状況について理解させ、その中で人間としてよりよく生きるためには何を学び、どのように実践するかを考えさせながら、青年期において伸ばすべき能力・個性について自覚させる。

人間の生き方に関する基本問題

真理と学問 高校で学ぶことの意義などと関連させながら、真理に至る道にはどのような考え方があるか、科学的な考え方と哲学的な考え方との違いは何か、などについて理解させる。

善と幸福 人間尊重の立場にたって、善とは何か、幸福とは何かなどについて基本的な考え方を理解させながら、自分自身の生き方について考えさせる。

人生と宗教 信仰に生きた人びとの例をとりあげながら、信仰と愛、生と死などの問題について理解させ、人生における宗教の意味につい

て考えさせる。

生きがいと豊かな人生 職業の選択・職業的良心・余暇の利用について、さらに芸術や美について、さまざまな考え方や立場のあることを理解させ、社会において果さなければならない使命を自覚させるとともに、生きがいについて考えさせる。

民主主義と平和

民主主義の原理については、さまざまな考え方のあることを理解させ集団や組織の中において民主的主体的に生きるとともに、人類の平和に貢献する生き方を考えさせる。

5. 都倫研10月例会 52. 10. 20. 於江戸川高校

特別分科会中間経過報告「必修社会，選択倫理の動向をさぐる」

6. 全倫研秋季大会 52. 11. 22. 於サレジオ高校

全体協議「指導要領改定の動向と倫理・社会 — 現行「倫理・社会」をいかに生かすべきか」として、本特別分科会の経過をふまえ、また今後の展望を明確に総括して、問題提起が菊地教諭（国分寺高）によってなされた。

以上が52年末までの本分科会の研究活動経過である。

（吉沢 記）

Ⅳ 本年度研究例会における講師の講演集

(1) 都倫研総会講演・要旨

「学問と教育のはざま」

東京大学教授 山下 啓

「学問と教育のはざま」という題で、(1)現代における眞の教養とは何か
(2)新しい学問の方向と、その現代的意義の二つに焦ってお話をしていきたい。

私は、先日の新聞に「青年よ、宇宙の森羅万象に多情多恨たれ」と書き現代の学生における新しい教養の創造と模索の課題について触れた。すなわち、かつての旧制高校の教養主義でもなく、また60年代以降の「アマチュア的一般教養」でもなく、変容する現代の課題に正面から対決していく精神こそが現代の教養であるからである。つまり、現在の大学では、旧制の理念で営まれてきた大学教育が矛盾を露呈し、一般教育の名のもとに小市民的な教養主義—アマチュア的でゆるま湯的な前期段階としての浅く広い教養概念が普及している。

しかし「正しい教養は存在しない。自覚的な努力と継続的な関心によって獲得されるもの、その意味で教養にとって真に必要なものは愛である」という言葉にみられるように、時間をかけて育成し、そのために自己を捧げることが、教養の原型であらう。

現代の日本社会の現状は、エネルギーのみが無方向に、そしてメチャクチャに発揮され、混沌とした雑然さの中で統合的全体としての個性と統一が見失われている。ここにおいて、時間と関心と努力をかけていく上記の教養は成立し難たい。しかし、この変容しつつある時代であるからこそ、この時代の課題と対決しうる教養こそが、今、求められているのでなかろ

うか。

そしてまた、現代の新しい学問も、そのような変容する社会と人間の根源的なあり方をさぐる動向と業績が並出している。いわば、人間と社会とを根底から全体的に把握する新しい人文精神と科学の動きがみられるので、第二のテーマとしてその点について考察したい。

まず、新しい学問の動きとして、人文精神や人文科学の復興と再評価の動きがあげられる。ストロースの構造主義や最近の神話学は、人間の原初的な祖型の中に人間と社会を模索している。また細分化した専門的諸科学への反省から人間を総体としてとらえる学問—自然科学、歴史、文学等の統合—の試みも生まれている。いわば、現代の神曲やファウストによって現代の人間を総合的に把握しようとしている。特に文献学にみられる人文精神、すなわち、言葉の生命をつかみ、ものごとの本質をとらえる人間の知恵の伝統としての人文精神の重要性をあらためて指摘したい。そして、原爆とアウシュビッツと公害を生みだしたパラドックスに富む現代の社会と人間を探究するには、その基盤において統一している根源的なもの（アイデンティティー）の探究が課題とされるであろう。

このような時代にあたって、我々は教育と専門を分化させるのではなく、学問の深さと教育現場における教養の育成を総合的にとらえていくあり方を、めざしたいと思う。

（文責 葦名）

(2) 第一回都倫研例会 講演要旨

「青年とアイデンティティーの問題」

慶応義塾大学医学部助教授 小此木 啓 吾

このタイトルには、3つの問題点がある。第1には、アイデンティティーという概念は、精神医や精神分析学でどうとらえていくかということ。第2には、青年期というものを精神医学や心理学でどうとらえるかということ。第3には、青年期とアイデンティティー論がどう結びつくかということ。以上の3つの関係を軸にし、この順番に話をしていきたい。

まず identity の概念について簡単に説明すると、identity について古来より、いろんな面で研究されているが、ここでは1950年代ぐらいから研究された精神医学者や精神分析学者、あるいは社会心理学者がつかっているような意味での概念にかぎって説明していく。

この identity ということばをわれわれの領域にもちこんだ学者は、アメリカの精神分析学者 Erikson である。この語は決定的な意味・訳語がみつからず、同一性と訳す人もいるし、主体性とか、自分の自己の存在証明とか、本当の自分とか訳す人もいようである。決定的ないゝ訳語が見当たらないので、今日はアイデンティティーという言葉をつかって話をしていきたい。

アイデンティティーということばの意味には、哲学でつかっているように、自分は自分であるという、あるいは自分は自分であるという意識、そういう意味での自己統一性というような意識を意味している。一部の人は、西田哲学を連想されるでしょうが、そういう意味での自分は自分であるという意識が、まず identity という概念の一つである。

またここで論議される自己というのは、常に他者とのかかわりにおいて意識される自己であるということである。たとえば①家族の一員とか、②医者としての自分とか、③国民の一員としての自分とか……社会的な方向

として成立するような自分に関する概念である。社会学でいう役割論と結びついて発展してきた概念であるから、たとえば社会の中のある特定の集団、あるいは人間関係というもののかかわりの中での～としての自分という意味で理解していると思う。

更に Erikson は、今いったようなアイデンティティとは別に、ego identity (自我同一性) について説明している。つまり日本人としての自分と、家庭における父親ないし、夫としての自分と、精神科医としての自分というような自分があるが、それらの自分を統合するような自分のことを ego identity という。コンフリクト(葛藤)というのは、いろいろな自分がうまく調和しない場合をいうのであり、国際結婚した婦人が中年以後、アメリカ人と日系人としての自分の内面の葛藤から、ホームシックにかかる例や、青年期の自分と今の自分に矛盾を感じ、中年期にうつ病にかかる例などがあげられる。これらは対人関係が円滑・うまくいかないと緊張・混乱からおこりがちになる。

次に現代の青年期を心理学ではどうとらえているか。普通には前期(中学)・中期(高校)・後期(大学)と区分され、前期に既に身体的変化(ふとるやせる・性的成熟への適応)・父母との関係・対人恐怖への悩みがあらわれ、心理的に親離れし、秘密の部分がふえ、人前を気にし、男性・女性としての自分を意識したりするようになる。青年期の後半までに、自我同一性(統合・統一)がなされれば大人に近づいていく。

最後に、青年期とアイデンティティ論がどう結びつくかということであるが、最近では青年期が早期化し、長期化してきている。男女共身体的変化が早いし、遂に30才位まで青年期の状態がつづく。そして最終的職業決定をのばしたがる。大学入試での上位合格者に、このような問題傾向がみられるのは考えさせられる。またこのような精神的なモラトリアム(moratorium・猶予期間)の時期が長びく背景として、産業社会化をあげることができよう。

(文責 江北高・宮崎宏一)

(3) 講演要旨

「ギリシャ悲劇の倫理思想」

東京大学教授 小倉志祥

先程の公開授業で、ソホクレスの「オイディプス王」について取上げておられたようでしたので、なるべくからあわぬようにして、古代ギリシャ悲劇の倫理思想を中心に、概要お話ししたいと思います。

ギリシャ悲劇の三大詩人として、アイスキュロス・ソフォクレス・エウリピデスの名はみなさんご存じのことと存じます。今日は前半3人の悲劇詩人についてふれ、後半「ディオニュソス讃歌」についてふれたい。

まず悲劇詩人の祖として有名なのがアイスキュロス(525～456B・O)です。彼はペルシャ戦争に参加した勇士であり、アテネ民主政治の確立期に活躍した作家です。自らの経験を下にして書いた「ペルシャ人」という作品の中で、ペルシャが彼れたのは人間の有限性を忘れ、傲慢に陥ったからであると云っています。

また「オレスティア」3部作の中の「アガメムノン」ではトロイアから故国に帰ってきたアガメムノン王が妃に殺害され、王妃に復讐して殺した王子オレスティスが、今度は救いを求める女たちの怨讐に苦しめられるが、やがてアテナイの法廷において無罪を宣告され許される顛末を画いている。彼の作品ではコーラス(合唱隊)が母体をなし、主人公は2人位の場合が多く1人の場合もある。いずれにせよ彼の作品はおごりたかぶる者はやがて天罰をうけ、みじめに滅びるといふ神の正義を訴えようとしたものであり、宗教的・哲学的色彩を帯びているといえよう。

次にソホクレス(496～406B・O)ですが、彼は少年時代サラミスの海戦の勝利の祝いで、少年鼓笛隊の一員として加わったことがあり、古典時代の黄金期に生きた人です。ペリクレスの下で外務官を務めたこともある。彼の作品は「オイディプス」にせよ「アンチゴネ」にせよ、運命にさいな

まれる壮烈な美しさを画いた所に特色があるといえましょう。彼こそ古典悲劇の完成者といえましょう。

3番目のエウリピデス(485~406B・C)ですが、彼はサラミスの海戦の年に生まれたといわれ、彼も前2人と同じくアテナイの市民に生まれたことを誇りとしたが、古典ギリシャの没落期、ペロポネソス戦争時代に生きたので、作品にも時代が反映しています。B・C438年、彼の作品「メディア」が上演されたが、その2週間前にスペルタとの戦いが始まっています。

「バックス(ディオニソスの別名)の信女」において、彼は仮面の背後にかくれている人間の心理的葛藤を重視し、良心の呵責に苦しめられる問題を悲劇のテーマにしています。

ところで「ディオニソス」については、ニーチェも「悲劇の誕生」で取扱っているが、3大悲劇詩人が活躍する前、B・C535年「ディオニソスの春祭り」として上演されたといわれています。

トラゴイディア(山羊の歌)とは、人々が農作物狩にぶどうの収穫にあたって、ディオニソス神の前に山羊をいけにえとしてさしげ、ディオニソスをほめたたえる歌を歌いつつ乱舞したといわれるが、これはもう即興的なものではなく、演劇の起源になったといえましょう。

ディオニソス讃歌をデイチュランボスといい、これには、2度出入口をもつことの意から、更に2度生まれることの意味をもつとされる(生物として母から生まれることと、社会の一員として社会から生まれる。)

そしてディオニソス讃歌は、農村における春祭りの歌と、成人式に歌われる歌として二重の意味をもっていた。

一つは冬の間大地に眠っていたいのちをよびもどす儀式であり、山羊の面をつけ、円陣をつくって、踊り歌ったのであり、いま一つは生と死の争いの表徴として、自然にあるところのものを本質的に直感し、模倣し、本質的なものを再現しようとしたのである。つまり冬の死に対して、春の生

をよびもどす儀式となったのである。

更にこの春祭りは古代ギリシヤで、しばしばブーホニア (bouphonia) の祭り (牛殺しの祭り) としても行われた。強さとゆたかさのシンボルとしての牛が、ディオニュソスの神にいけにえとして供えられ、殺されたのである。サグリフェイス 神聖にすると、牛の肉が分ち与えられ、儀式に参加した者は肉を食べることによって、共同に参加し、神の恩恵をうけるとしたのである。このことは更にはポリス全体への参加を意味し、いのちの復活をも意味した。

かくしてディチュランボスの歌は、社会の一員として迎え入れられる成人式の儀式ともなり、盆踊り的なものからホメロスの詩のような内容がつけ加わって、芸術性をおびるに至るのである。

そして円型広場 (オルケストラ——コロスの踊り場) の中心にディオニュソスの神の祭殿が設けられ、更に広場の周囲半円に見物席 (Theatre-のちのティアタ・劇場) ができ、観客は theoria (テオリア・静かに見る、観想する) することが要求されたのです。

ギリシヤ悲劇からコロス (合唱隊) を抜いたものが対話であり、プラトンの対話篇となったといえましょう。

悲劇の英雄と信仰の騎士、キエルケゴールに即して悲劇の思想史的位階づけなど、まだ引き続いて語るべきことは多いのですが、大分時間を超過したようですので、今日はこの辺で終りにします。

(文責・浅香)

第4回研究例会

講演 日本近代百年の哲学と思想

東京外語大教授 官川 透

近代日本における哲学の諸形態、つまりアカデミーの哲学、人生論としての哲学、社会主義の哲学を三つの角度から総合的に分析を試みる。

西洋のフィロソフィがはじめて本格的に日本に紹介されたのは、1960年代審判調書の教授方であった西周を通じてであった。西周がオランダで学んだミルやコントの実証主義的経験論が日本に最初に受容された哲学であったのである。西周はこの洋学より前に、朱子学から経世済民の学としての徂徠学をすでに学んでいたため、実学としての哲学としてミルやコントの思想を受容したのである。実学的な卓越性を西洋の哲学に見ようという意識は、新井白石から西周まで貫いている線なのである。

「和魂に接ぐに洋才をもってする」ように、和魂にプラスするのが西洋の実学であるという方向で西洋の哲学を受けとめたのである。

所が実は洋才を研究しているうちに洋才を生み出した洋魂がだんだんと問題になってくる。そこではじめてヨーロッパ精神に日本の知識人が触れるのである。ローレンスの言うように、後進国の知識人が先進国の異質の文化に触れたときに呈する苦悶の表情は、丁度劇薬を生物が飲んだときに呈する表情に似ている。北村透谷とか西田幾多郎とか漱石の苦悶はまぎれもなく洋魂と和魂が触れ合ったときに呈するような表情であった。

その時期つまり明治20年以降日本のアカデミーの哲学が確立したのだ。

自由民権運動の理論的な基礎をなした英仏思想に対抗して、明治政府は意識的にドイツの哲学を受容したのである。英仏哲学は革命思想の温床だとしてしりぞけ、儒教の復活とドイツ哲学の導入を国策とする方向で、日本のアカデミーの哲学が成立した。旧制の帝国大学を中心とした「講壇」哲学が確立してくる。その官学においてカント、ヘーゲルの哲学が幅をき

かせたのである。「国家の主要に应ずる」上からの要請の中で日本に近代哲学が受容された所に、アカデミーの哲学の基本的な性格があった。

ヨーロッパ啓蒙主義の成果を受けとめたヨーロッパの大学においては、学問の営みは近代市民一般の「知ることの権利」であったのである。

日本の場合は、そういう「知ることの権利」に支えられたデモクラシーの基盤がなかったから、専ら「依らしむべし知らしむべからず」という伝統の中で上から知的育成が行われたのである。

社会的底辺における市民権の確立というよりも参政権の獲得に熱中したこと、つまり反体制運動の構造そのものが立身出世の構造を物語っている。体制側だけでなく反体制側にも「左翼天皇制」という言葉が生まれるゆえんがある。辯證哲学の体質改善は1945年の敗戦以後も依然として手をつけられずにむしろ今日では大学ごとの系列が強まってきている。

第二の領域である人生論の哲学の分析を試みる。

日本では「哲学」というと大体「人生論の哲学」例えば西田幾多郎の「善の研究」、阿部次郎の「三太郎日記」、倉田百三の「愛と認識との出発」などが物語る世界を意味している。これら日本人の人生論を色どるベシミズムとは一体何なのか。ベシミズムの由来を分析してみる。

日本の近代的な要求を掲げた自由民権運動がその要求を貫徹することなく敗北し、あるいは挫折したことにその基本的な理由が求められる。

時代閉塞の状況がやがて到来する。明治30年代に自己内観的な精神主義が色濃く出てくる。自己内観的な精神主義とは、現実の国家や社会を外なる世界ととらえて、それに背を向けた内なる私的な世界において自我形成と拠り所を求める発想なのである。自己内観的な私的な体験の世界に拠り所を求める所謂一般の知識人の動向、「私」、日本的自我の構造、他方幸徳から大杉に至るアナルコ・サンディカリズムつまり体制へ絶望的な形で激突する、二つの知識人の形成の型が生まれてくる。

何故、自我の内面世界が「私」という形でしかとらえられなかったのか、

丸山真男氏は天皇制国家の特質を超国家主義ととらえた（『超国家主義の論理と心理』）日本の近代国家権力が世俗的な権力だけでなく精神的な権力、超世俗的な権威としても君臨した。国家によって管理された世界が「公」である。それに背を向けた、それからドロップ・アウトした世界はまさに「私」的世界でしかない。哲学や文学の担い手が多くアウト・サイダーとして、しかも文学をやるのは不良のやることであるとして、不良の私事という形で文学青年や哲学青年が規定された。

植木枝盛のどす黒い自我の観念的絶対観、北村透谷の内部生命論、西田幾多郎の純粹経験等々は、政治から文学へ実世界から想世界へ外から内へととらえると、近代日本の人生論の基本的骨格ができるように思われる。

近代日本において公衆が果して形成されたかどうかは、戦後民主主義が定着するかしないかという問題と共に私達は問われている。

内面的な私的な世界にからうじて自由を見出したという問題は、結局日本の近代思想史の中で内村鑑三の明治24年の「不敬事件」が提起した問題の意味が深いものであることに今あらためて驚く。

明治30年代に高山樗牛によってニーチェが紹介され、姉崎嘲風によってショーペンハウエルが紹介された。大正期には和辻哲郎によるニーチェ研究、キルケゴール研究が出され、大正末期から昭和初期にかけてドイツのデルタイの全集が出た。西欧の哲学や実存の哲学が圧倒的に日本で受けたい基盤は、自己内観的な人生態度による人間形成にあったのである。

昭和10年の小林秀雄の小説論から、戦後の26年の中村光夫の風俗小説論は、いずれも日本の自我の社会性の欠如を指摘しているが、むしろ権力に対して背を向けた私的な世界においてからうじて日本の自我は自由を享受したのである。

第三の社会主義、マルクス主義の哲学の分析をしてみる。

マルクス主義が一個の哲学的世界観としてとりあげられるようになったのは昭和に入ってからである。

福本和夫の福本イズム以来、はじめてマルクス主義が一個の哲学的世界観として取りあげられた。マルクス主義が一個の哲学的世界観として定着する前に、どうしても幸徳秋水から大杉栄に到る日本のアナルコ・サンディカリズムのもった意味に触れる。

最近新左翼、ニュー・レフトの先駆者としてしばしば大杉があげられる。

大杉がもっていた問題は吉田松蔭まで伸びていく。例えば松蔭とその弟子達が自らに「狂」という意識を課した。大杉が「正気の狂人的ストライキ」ということを提唱している。近代日本の価値が国家によって独占され固定された段階の中で「狂」という意識を自覚的にもつという意味は深い。

大杉は社会的機構の変革と同時に人間自身の変革を呼びかけている。継続革命論の萌芽的な形態が出ている。吉田松蔭も徹頭徹尾説得するという中に、人間変革なくして時代の変革はあり得ないという継続革命論の芽が見られる。

社会変革と同時に人間変革を絶えずやらなくてはならないということは、社会主義にとってもデモクラシーにとっても必要なのである。それを少なくとも大杉は主張している。

吉田松蔭は、徳川二百数年続いた体制、縦の秩序の意識に対して、横に知的横断現象の「脱審」を行う。その「脱」と「狂」は、近代日本思想史における大杉の「正気の狂人的ストライキ」の意味になる。

福本和夫の世界変革の役割を哲学は担うべきだという主張は、西田幾多郎の門下生・三木清に受けとめられ、「人間学のマルクスの形態」が発表された。その方向は、最近さかんなフランクフルト学派のマルクス主義解釈と対応するものである。物質一般ではなく社会的物質、歴史的物質としてとらえる以上、人間の歴史あるいは社会的規定を離れてマルクス主義は有り得ないという形で人間思想、自然思想の根底における深いかみ合いを理論的に掘り下げた所に問題がある。

(記録・都立桜町高 佐藤 勲)

V 研究報告

第1分科会報告 「高校生と倫社」

経過報告（その1）

- 6月14日
(第1日) 都倫研例会が清瀬高校で行われ、記念講演の後、第1分科会として第1回の会合をもった。十数名の先生方により自己紹介、及び各自の学校における倫社教育の状況についてコメントを頂いた。研究部の小河先生より、今年の分科会の方向について説明があった。
- 6月28日
(第2回) 新宿戸山高校において第2回目の例会をもつ、沼田先生を始め、若い先生方も集い、現代高校生のおかれている状況についてそれぞれの見解を述べ、さらにそのような高校生を対象として一体何を教えなければならないかという点に論議が集中した。
- 7月15日
(第3回) 前回に続いて戸山高校において、高校生にこれだけは教えたいというものを深めつつ、沼田、小川(一)両ベテランの先生、一方若手の山口、市野、他先生によりそれぞれの立場から意見の交換を活発に行った。
- 7月23日
(第4回) この回は臨時に吉祥寺某喫茶店の一角において研究部の小河先生を始め、草名、山口、木戸それに女子高校(私立)の先生もお二人参加して頂き、倫社教師としての生き方みたいな問題を中心に議論を深め、互いの考え方、おかれた立場を理解し、さらに今日の高校生像を把握することの困難さについて改めて確認した。これ以後夏休みに入り、7月29日～30日日大二高において全国大会が開催され、筆者も高校生の諸問題に関する分科会に出席した。都倫研会報にも述べた通

り、現代高校生の把握の困難さ、また東京と地方、普通科と職業科、全日制と定時制、進学一流校とそれ以外というように学校の状況によって高校生の平均像も著しく異なるようにも思われ、その中で高校生というものを一元的あるいは統一的に捉えることの困難さを認識する結果となった。

9月13日
(第5回) この回は出席者少数につき、流会となった。これ以降世話人の都合と手際により、しばらく分科を開くことが出来ずこの紙上を借りてお詫び申し上げる次第である。

11月4日
(第6回) 部下立川高校で開催、この日は沼田先生にレポートをお願いしたこともあり、大森の寺島先生を始め多数の出席者を得た。沼田先生は日頃の学習指導の事例として3分間スピーチについて発表され、生徒のレポート例などをまじり得て報告された。それによると現代の高校生に必ずしも俗に云われる三無主義とばかりは思えず、アプローチの仕方によっては非常によいものを彼らから引出すことに成功していると述べられた。一方寺島先生からは工業高校の実態（それは悲劇的とも云える）や各種の資料を基に現代高校生の一方の側面について発表され、参加者一同考えさせられるものであった。

この後11月22日には川崎サレジオ高校において秋季大会が行われた。

12月1日
(第7回) この日は都教育会館において小河先生のレポート「アイデンティティーと高校生」というテーマにより話が展開された。小河先生の「内的必然性とアイデンティティー」という概念について論議が集中した、今日の高校生像を捉えるキー概念として「アイデンティティー」が重要な役割を果たしているであろうことは6

月の滑瀬における小比木先生の講演からも察せられ、参加者一同の関心が集中した。しかし結論を得るには至らなかった。

1月20日
(第8回)

目白の「うづら荘」にて大木・小河・木戸・山口の参加で立川高(定)の山口が「女の子はつくられる」というテーマで話を進め、多くの意見が出され、女性の経済的自立、男性の生活面の自立の問題、幼児期からの親のしつけ等で話し合った。

その2 分科会の1年を顧みて

現在、すべての国民が教育に目を向けていると言っても過言ではないほど、父母たちは、教育に関心を持ち、また期待もしている。父母たちの「こんな子供になってほしい、こんな青年になってほしい」という願いと教師の目ざす子供像・青年像といったものは、まったく違ったものではないように思うのである。まずもって基礎学力をつけてもらいたい、つけたい、科学的なものの見方、とらえ方、考え方を身につけてもらいたい、つけたい、主権者としての自覚を持たせてもらいたい、持たせたい、女性であれ、男性であれ、積極的で、発芽つとして、誠実な人間に育ててほしい、育てたい、どんな困難にも立ち向う、忍耐強い人間に成長してほしい、させたい、等。ほとんどの教師・ほとんどの親たちは、このような願いを持ち続けて生きている。この点において、われわれは、この共通の願いを共に実現するためにも、広範な父母・国民と連帯していかなければならないと思う。非行・自殺などの問題も当然、親や地域の人々とのつながりなくしては根本的に解決することはできないと思う。

さて、倫・社がこれからの父母や教師の共通の願いに対し、どうかかわっていかねばならないかという重要な問題が横たわっている。「高校生と倫・社」というテーマで行ってきたわれわれの分科会の中で、6月28日(第2回)の分科会で、この問題が若干ではあるが出された。すなわち、高校生がこれからどう生きていくのかという生きかたの問題である。小学校・中学校・高校と勉強を進めてきて、数学・英語・国語その他の多くの科目を学んできてこの学んできたもの(宝物と言ってもいいかもしれない)を一体何に活用するのか、ということである。ほとんどの生徒が、ここで初めて「何に活用するのか」と問われることになるのである。我田引水でなく、いつかは人間は、このような問いに答えるか、あるいは、それに答えるためにその努力をしないわけにはいかないであろう。倫・社は、

この問題をこそ、力点を置かなければならないのではないだろうか。この問いは、子供たちのこれからの生き方自身を問うことになるのである。

「自分が勉強してきたのは、自分のためであり、なにも他人のために勉強なんかはしてこない」「そりゃあ2流3流の大学より1流のほうがいいのにきまってる」「会社もそうだ」「家を建てるのが一生の仕事になってもしかたがない」等々。確かに、いま家を建てるには多くの困難、たとえば、20年ローンとか、土地をどうするとかの問題があり、決して簡単ではない。しかし、それが、人間の一生の仕事にしては、あまりにもうすべらなものだということが、わからないのである。また、大学の名前や高校の名前で、その人の人生が決まってしまうかのような判断力、自分が学んだことが結局は、自分だけの財産だと思ってしまう、いま学んでいることが、国民の財産となり、世界の人々の財産へと広がりを見せていくことを知らない。これは、私たちが、これらの重要な点を教えきっていないという反省の材料になると思う。

倫・社は、先哲の生き方を学び、それを現実の社会や自分の成長・発展のための血や肉にしていくものであろう。また、高校生にとって、これから自分はどう生きぬくのかを深く考えさせる絶好のチャンスでもある。反対に自分の学んできたものを何に活用するかを自分自身に問うことなしに、この先、多くの青年が生きていくことを想像すると恐ろしくなってくる。その意味では、現在ほど、高校生にとって倫・社の必要性が大きくなっていく時はないと思う。「必修社会・選択倫・社」の目指す方向も、結局は、受験勉強に都合のよい、そして、自分たちが今まで学んできたものを、これから何に活用して生きていくかという重要な問題を生徒が十二分な時間をかけて考えることをせよめることにはならないだろうか。

次に、現在、都倫研に求められているものは何かを少し考えていきたいと思えます。一般的なとらえ方としては、高校生にとって倫・社は、むずかしい科目のようである。しかし、これもわれわれの反省の材料にならな

いだろうか。むずかしいものを、わかりやすく、具体例を豊かに使って生きいきと教える。これは、学ぶ意欲を、子供たちにわきたたせるという教師の本来の重要な任務なのではないでしょうか。確かに多くの困難は、つきまとうでしょうが、不可能ではありません。都倫研が、そのような多くの教育実践を積み上げていくことによって、多くの教師や父母から厚い信頼を得ることが可能になるのではないのでしょうか。高校生の生活を知り、こまかい心のひだも握みうる教師、人類の多くの遺産を継承・発展する道すじを教える教師、常に新たな感動に心をふくらませている教師、そんな人間でありたい。

この1年で私たちは、「これだけは必ず教えたい」「生徒が考えていること」「アイデンティティー」「心に響く授業」「女の子はつくられる」等を行ってきましたが、一貫性の点から言えば、少し弱点があったように思いますが、それは、レポーターを少なくとも1ヶ月前から決めてから、準備するという当然のことが、世話人の未熟さから、なされていなかった。この点での発展は、是非、来年度、実現したいと思います。そして、一年間のスケジュールをつくることによって、一層、一貫性のある内容にしていきたいと思っています。

(世話人・立川・定・山口通)

こうして年が改り、世話人の方よりお願いした紀要依頼の手配も終り、この分科会も終りに近づいた。今年は特に世話人の不慣れから諸先生各位に御迷惑をお掛けし、十分な研究活動が出来なかったことをお詫び申し上げる次第である――

(山口・木戸記)

高校生と倫社

都立王子工業高校 大木 洋

1

必修「社会」の新設に伴い、旧来の倫理・社会は20年弱の使命を實質終ろうとしている。多くの教師がその教科内容にとまどい途方にくれながらも役立つ魅力ある教科に改編せんと日夜悪戦苦闘を続けてきた。その実践を積み重ねる中でようやく倫社の特質が理解され教育効果もあがり、一般国民の中に定着市民権を得るようになった昨今、今後数年を経ずして倫社が實質消滅していく事に複雑な心境をかくしえない。フランスのリセーの「哲学」科は150年にも亘り連続として続いているというのに。必修社会も朝令暮改式のかかる倫社の轍を踏まないよう切に要望したい。

さて、倫社がようやく定着し教育効果も上がってきたという事は、教科内容の中に高校生の成長発達過程にマッチした必須有益なものを含んでいる事の表れでもあろう。人生観・世界観の確立等もその一つであったと思われるが、以下これらに関して倫社の指導目標と高校生の成長発達をテーマに、少し考えてみたい。

2

小中の特設「道徳」に対応する形で倫社が新設されたのは1960年10月である。当初は教科内容の様々な欠陥、問題点にかかわらず、科学的体系・法則を教える教育だけでは網羅できない価値の問題、価値認識を取り扱う新しい教科だという点に新鮮な魅力があったと思われる。1960年前後は日教組の教研活動等とおして社会科は社会科学を教える教科であるという考えが丁度確立された頃である。しかしここでも社会科は社会科学の体系や法則だけを教えていけばよいかという問題は未解決なものとして相変らず残っていた。戦後社会認識を旨とする社会科が新設されたのは戦前の注入的な修身・公民科の反省の上にある。しかし、正しい社会

認識は社会科学の法則をぬきにしては成り立ちえないという当然のコンセンサスが成立するのに大分時間がかかった。前述の如くようやく1960年頃それがなされた。社会科は科学である事は、日本の社会科の原点は戦前教育の反省の上に立つ点からより強調される。例えば哲学者の古在氏は昭和21年に「教育におけるこのあらたな理念、民主主義的な人間形成の理念は、また科学的精神といわれてもいい。なぜならば、ほんとうの人道的精神(ヒューマニズム)、すなわち社会的人間の回復は、同時にまた一切の観念的圧制とたたかう科学的精神でなければならないからだ。これまでの日本の教育では、道徳と科学とはたんに別個のものとされただけではなく、いわゆる知育偏重の排斥と徳育尊重の言理によって科学は道徳のもとに影をひそめていた。すでにみたように、道徳が神秘的・非合理的な国体観念にささえられていた限り、そのことは当然の帰結だった。いま我々のいう科学的精神とは、あらゆる非合理主義・権威主義・排外主義をしりぞけて合理的・批判的・国際的な態度をやしなう精神であり、したがってあの「日本精神」に対立する。それは、ひとくちにいえば、いかなる神秘や因習や権威にも屈することなく、あくまで大胆に一切の事物の真相に徹しなければやまない精神のことだ」(1) と記している。さて1960年に倫社が登場してきたが、社会科は科学の体系・法則だけを教えればよいのかという疑問もあり、この点で倫社の登場は積極的な意味があったと思う。

3

価値認識を領域に含んで登場した倫社の基本的柱は「青年と社会」「人生観・世界観の確立」等であった。しかし、これら柱の具体的教科内容は、概して生身の高校生の課題要求に応えるようなものでなく、現状とズレているものであった。青年の倫理的生き方に関していえば、教条を注入することなく、授業、クラブ活動、学校行事等を通じて生徒の日常的生活の諸要求を出させる。そしてそれらを自主的集団的に解決する実践をとおして、生徒自身の道徳的確信を主体的に身につかせる。そうした観点か

らの把握の仕方に欠けていた。人生観・世界観の確立についても、多々指摘されてきたとおり思想の平板的羅列に終始しており、眞の人生観、世界観の確立には遠い。この点に關し前出の古在氏は「人格をみがくというのは、ひたすらちいさな自己と修身書のなかにたてこもって「道德の専門家」をころざすことではなく、自然および社会の諸現実との実践的な対決によって自発的・批判的に眞實を追求することだ。ここにいう眞實とはそれゆえたんに主観的な信念ではなく、またひさしい習慣と惰性によって自明とおもわれているものでもない。科学的精神のめざす眞實とは我々の意識からは独立した客観的實在の把握にほかならないのだ。このような客観的眞理をたっとばずに、ただ民族的な直覚とか感懐とか伝統とかいわれるものにうったえ、ひたすら神話や古典や経典や勅語などの文句を最後のよりどころとしたところに、過去における日本主義教育、国体教育、修身教育のあらゆる虚偽と作為との源泉がある。そしてここから、およそ現実性をかいた独断と思弁が生まれ、生徒たちはみずから眞理を発見するかわりに權威をおしつけられ、觀念をつめこまれ、文句をおぼえこまれたのだ」(2)と事物による教育を強調している。ひからびた思想のパーゲンセールはとうてい人生観・世界観の確立につながると思えない。最近の生徒の自殺増にみられる如く社会が子供を教育する力を失っている一面もある。倫社こそ生徒の生活をふまえた、眞に生徒の人格を育成する教科にならねばならない。そのように教材化されるべきである。

このような問題点を含んでいるとはいえ、世界観をその領域内に有した倫社はその意図した方向はどちらであれ、現代の高校生にいかにか生きるべきか、何に価値をおくべきか、何をなすべきか等大きな問題を提起してきたといえる。倫社が浸透してきた、教育効果をあげてきたのは、正にここに関わる教科であったためではないか。必須有益なものの一つは、この世界観であったと思う。この世界観を大切に、これを軸にして倫社を再編していく必要があると思う。

では真の世界観確立へ向けていかなる努力をすべきか。その達成を防げる隘路となっているものは何か。これに関して我々は、倫社が科学（認識）に対して価値（認識）を眼目として打ち出されて来た点を想起せざるをえない。実践的・客観的であるよりは、観想的・主観的という倫社の特質はこの辺にもあると思われるが、倫社は真・善・美を扱う教科である以上、価値に関わるのは当然ともいえるが、価値と科学はいかなる関係にあるか。

哲学上では19世紀後半の新カント派が始めて価値を取り上げている。彼等は哲学を認識批判と実証科学の方法の吟味に限定する一方、世界全体の把握という世界観的立場からは離れる。この傾向の中で価値の問題を取り上げている。世界観は認識論も含んでおり、真の科学的な立場であるとするならば、新カント派に於ては科学をすてる、その一方で価値が問題とされているともいえる。科学的でない。すなわち実践から離れた観想的、主観的、遊戯的生き方が何故価値につながるかはさておき、倫社の教科内容を科学の上にする事が正しい世界観確立につながるのではないか。

成長期の高校生にとっては枝葉末節よりは大まかな人生の眺望としての正しい世界観を学べばそれで充分ではないかと思われる。

（註）

- (1) 古在由重著作集 第二巻 139頁
- (2) 同上巻 140頁

平明さと深さの結びつきを求めて

— 具体的事例によるかけあい問答と

課題を活用した授業 —

高島高校 葦 名 次 夫

〔はじめに〕

よい授業案と語りだけで、生徒が真剣にいきいきと聞きほれる夢を追ってきたが、今年は若干方向転換をして、いわゆる授業形態の工夫に正面から取り組んでみた。平均的高校生の多いわが高島高校ではそのみでは不十分と昨年度痛感したからである。そこで、(1)できるだけ豊富な具体的事例をもとに、(2)予習課題プリントを活用し、(3)かけあい問答を柱にした授業展開を試みてみた。また、(4)討論会やスピーチ、合評会などの活動を適宜組みこみ、参加への動機づけとリズムのある年間計画をめざした。

以下、今年度の試みの報告である。

〔 1 予習課題プリントの活用 〕

授業の時間のみでは限られる。そこで、事前に生徒自身が身近かな生活に即して考えていけるような予習プリントを作成し、20回近く宿題とし、授業参加の動機づけとした。この種のプリントは、具体的な問いかけで興味と関心が刺激されるように構成工夫しないと授業に活用できない。問いかけ具体例を参考に掲げてみましたが、ち密でふくよかな構成をめざしたい。

〔 2 かけあい問答法の工夫 〕

一方的講義式でもよき授業には無言のかけあいが含まれている。要は形でなく、生徒が思考を刺激されてのりだしてくるよき発問とかけあいの秘術こそが授業の精髓と思う。このかけあい問答は、あて方、問いかけ方からみ方、間やリズムのとり方など、教師の話し方や演技力の全てが問われ

る芸術ともいえようか。予習課題プリントも、生徒の書いてあることをタネにして切りこんでいく素材として活用していくことが最大の目的であった。例えば、「おっ、A君こんないい例書いてるぞ〜」と皆の前で即座にほめて読みあげたり、「君、本当にそうか」とからむことによって、ひきつけつつ刺激するために、予習課題を最大限活用した。しかし、うまくいくとこの上なく楽しいが、リズムが狂うと一挙にしらける等、好不調の波が激しい。授業を私自身が楽しむためにも、講義や説明ともかみあう安定したかけあい問答への願い切なるものがある。

〔 3 チーム別討論大会 〕

日本の文化風土の6時間の授業のあと「日本人のここがいい、ここが悪い」チーム別大討論会を2時間開催した。7〜8人で1チームとし6チームを作り、2チーム3組の対戦とする。2チームの対戦の時は、他の4チームは陪審として論戦をメモし判定の根拠を用紙に書く。1ゲーム20分とし、発言は交互に1人1分間以内とし、相手の発言がない場合は、同チームが続いて発言権をもつ。形式は、自分の立場や論点を極力押し出す。（「いい組」は良い点のみ述べる）私が審判ならびに司会をし、交互に論点がかみあうよう導く一等の点に留意した。発言のキャッチボール形式は、時間に追われじっくり考える暇がないという大きな弱点をもつが、討論を促進する上では効果的で、きびきびした討論（ディベート）のおもしろさ、楽しさが味わえたように思う。チーム討論会は、テーマの選び方、事前の発言内容の指導、裁判所形式の机の配置、判定メモの作成などに心配りした。

〔 4 3分間スピーチ 〕

3分間スピーチは、とかく言い放しで散漫になりがちなので、今年度は次の点を工夫してみた。

- (i) テーマを絞る。青年期と関わらして「私が感動した青春像」とし、素材は文学、映画、漫画、身近かな人など全てよしとした。テーマは成否のカギであり、私の心に残った一言や、私の心に焼きついた一シーンな

どの類がいいように思う。(2) 事前に原稿を書かせ提出(夏休みの課題)
(3) 一人3分間以内絶対厳守し、これ以上のびるとダメ)。時期を集中
(1限につき11人で4回連続) (4) 聞く側にメモやコメントを義務
づける(これはふんいきをひきしめる意味で、最重要である。)そのメモ
やコメントを編集し回覧。発表の時間を設ける。(友人の批判が最強の
動機づけとなり、また他の批判にさらされる経験をもつこともねらいと
した)

〔5 写真課題合評会〕 訴えたいことを映像で表現する「写真課
題」は、今年は、ワラ判紙1/4の大きさに1テーマ1枚のみに限った。
(ねらいがすっきりする)私が紹介しつつ問いかける1時間と、生徒が一
言つけたす1時間を用いて、テーマを浮きぼりにし、ふくらみをもたすこ
とに努めた。

なお、討論会もスピーチも合評会も、全てテープに録音する形をとった
が、堅くなるマイナス面より、ひきしまるプラス面の方が多いように思っ
た。(自分の声をテープで聞くことは大変勉強になるようだ)

〔6 年間授業計画〕

生徒の興味と関心を考慮して思いきって自由に組んでみた。1. 日本の
文化風土(6), 2. 討論会(2) 3. ココロと意味の世界(6), 4. 感動した青春
像をもとに3分間スピーチ大会(4), 5. 情報と人間, シンボルとイメー
ジ, ことばと人間関係(5), 6. 文明と人間(生態学, 自然・科学と人間な
ど)(5), 7. 近代の意義(近代の原理, 社会科学的思考法)(5), 8. 現代
社会と人間(労働と人間, 組織と人間)(5), 9. 写真課題合評会(2)。

三学期は、思想の源流をテーマ中心にとりあげ、まとめとして、自分な
りに誠実に生きると題し実存主義に触れる予定である。

なお、一・二学期の内容でも、できるだけなまの思想(家)に関連させ
て触れるよう留意した。(文明ではルソーと老荘, 労働ではマルクス, 近
代の原理ではウェーバーなど。「さりげなく補足的に思想(家)を紹介す

る形」も、案外効果的ではないかとの感触をもったが、実証の限りではない。))

以上が形としての今年の試みである。抽象的思惟にはなじみにくいですが、授業参加への意欲がある程度みられる平均的高校生には適した授業形態であるかなと思ひ、来年度もこの形をより充実させたいと思っています。

最後に、予習課題プリントとかけあい問答の具体例を紙幅のゆるす限りのせてしめくりとします。ここではココロと意味の世界の一部しかのせられません、他の参考プリントの準備がありますので御希望の方にはお送り致します。御意見をいただければ、幸いです。

参考 / 具体的な問いかけ事例

— 「ココロの世界・意味の世界」より

〔 1. 身体と感情・心 〕 <ねらい> 姿勢と感情、心と身体の関係や結びつきを考える。<問> そっくり返って折れるか？ あぐらをかいてつましい気持ちになれるか。 <発展> 同じような例は？ (ため息、うつくまる一挫折、直立の姿勢—キリッ。ふて寝、口びるをまげる、顔がゆがむ……) 服装と心の関係は？ (Tシャツ、ステテコ、はおずえついた裁判官を信用できるか) 形整いて心しまる—修業の意味は？ (道元の座禅の紹介など) <関連> デカルトの身心二元論、身体の現象学、精神医学の考察

〔 2. 認知的不協和 〕 <ねらい> 人間誰か夢なき—客観的認識の難しさの自覚と課題 <問> 自分の嫌いでイヤな写真ばかり残してながめるか？ あえてきれいな雑誌や異なる考え方の本や新聞の論説を読むか？ 同様な例は？ <展開> ありのまま客観的にものをみるには？ 異質で多角的な視野を自らの内にとりこむ訓練の必要 (反対がなりたつかすぐ考える。イヤなものにあえてぶつかろうとする強い精神、自分の思考や感情の

偏りを自分で克服) <関連> ソクラテスの問答法, デカルトの方法叙説。

[3. 人間 この非合理的なもの] <ねらい> 人間の非合理的な世界(欲望や影, 不安, 無意識)の考察 <問> バカバカしいと思いつつ, そうせざるをえないこと。わかっちゃいるけどやめられぬもの。どうにもとまらないこと具体例は?(縁起をかつぐ。神経症。原始的な集団反応)

<展開> なぜそうなのか?→不安や強い願望のため。タブーや儀式によってそれをしずめようとする(おはらい, お消めなど)。このドロドロした影の世界にどう対処したらよいか。 <関連> 精神分析や無意識の心理学

[4. 自己を問い探究することの意味] <ねらい> 自己を対象化し, 自己統御しうる人間の深さと強さの意味 <問> 私の手をみつめる私。手と私は異なるか? それでは私の心(あるいは欲望, 願い, 生き方)をみつめ考える私の心とは何者か? 切り離せるか, <展開> 自分自身を相対化して客観的にみることのできる人間は深さ大きさを感じさせる。人間の成熟の意味。自己を突き離して笑いとばせる→ユーモアの意味。 <関連> サルトルの対自存在, ウェーバーの主体性論の紹介

[5. 人間におけるまなざしの意味] <ねらい> まなざしを例に人間存在の支えを考察 <問> ①ウィンクとゴミが入って片眼をつぶるのとでは意味あいが違う。さまざまなまなざしの例とその意味は?(仏像の救いのまなざし, 愛する故人のまなざしのはげまし) ②天は我を見捨てたか, 神よ御照覧あれーというおのれを見守り, みつめるまなざしを意識したことがあるか? ③他のまなざしが拒まれることは? それはなぜ辛いのか? <展開> まなざしは人格の本質の表現・コミュニケーションの根本人は何らかのまなざしを意識しつつ生きる。それが宗教的なものであれ, 虚栄や演技であれ, 他者のまなざしの存在が自己を規定していく一面がある。

<関連> イエスの愛のまなざしの意味, 孔子の「天」の考え方, サルトルのまなざし論の紹介

[6. 意味を生じさせるもの] <ねらい> 目にみえない大切なものと

しての意味のありかをさぐる <問> 無期囚と死刑囚はどちらが個性的で「生き」ているか？ 自殺を決意した青年が、死にたがっている少女を懸命に説得しているうちに生きる勇気が→彼の心に何が生じたのか。長い闘病生活の末、健康となるが退院直前に自殺→なぜなのか <展開> 絶対的なもの（死）による切迫感と充実感。他人との関りと交りの中に生きるきずながある。自己を超えた何ものに問われている存在、あるいは、課題と責任を負っている存在としての人間の考察。 <関連> フランクルの実存分析、多くの文学作品からの引用。

高校生に、考えさせるには

東京都立青山高校 小川 一郎

「倫理・社会」の科目の性格を問うと、「倫理的・哲学的思索を深める科目である」という回答が最も多い。ついで多いのは「人間や社会を科学的に理解させる科目である」で、その他「先哲の感化を期待する科目」とか、「道徳行為の基準を教える」などがある。（全倫研調査）

思索させる、考えさせる、ことの重要性は今さら指摘するまでもない。詰め込み教育、テスト教育で追われてきた高校生には二年生で学ぶ「倫社」は千天の慈雨である。

それでは「倫社」が本当に考えさせる科目になっているのだろうか。必ずしもそうは言えない。最も考えない時間になっていることもありうる。

今日の高校生は、核家族化の中で育ち、情報の氾濫の中におかれ、都市化にさらされている。これらの現象は、人間関係の稀薄化をもたらし、それがひいては青年の思考を退化させている。

例えば、テレビがよく問題にされるが、共働きで、保育園に預けられている子が典型であろうが、親と子の一対一の問いかけや応答は極度に少なくなっている。保育園では集団の中に埋没してしまったり、家に帰っても、両親は家事に忙がしく中々かまってもらえない。テレビの前で過ごすことが多くなる。テレビは問いかけてはくれるが答えを必要としないし、答えても反応はない。子どもは受身の姿勢を続けるに過ぎない。思考は頭の中の対話である。問いかけがあって答えがある。問いかけや刺激がなければ思考は生じない。無感動の子が多くなっているといわれる。自閉症が増えているといわれる。孤独な子が増えている。

私は「倫理・社会」の授業は、生徒が動く授業でなくてはならない。と考える。動き方は生徒の能力が多様なだけに、多様な方法があろう、受け

身の授業からは思索は生れてこない。動く授業をつくりだしたい。

私たちは、よくこんな経験をもつ。死んだような授業でも、生徒の突飛な質問があったため、一変して生きた授業となることである。生徒の動きが授業を変えたのである。生徒の動きを次に上げてみよう。

1. 作文を書く
2. 質問をする
3. 発表授業をする
4. 作文を読む
5. グループで話し合う
6. 本を読む

などである。

「倫理・社会」の授業は、これらのいくつかを、生徒の実態を知り、教材に応じて組み合わせ、生徒を動かすことが大切である。

生徒はよく騒口をたたいたり、ふざけ合い、笑いこけるが、意外に本心は友達に言わない。教室で、「現在の私」という作文を読んでもらう。他の生徒に感想を聞くと、「友達の考えが聞けてよかった。みんながよく人生や社会について考えているのだなあ、と思い、びっくりした」ということをよく聞く。生徒は、孤独なんだな、さびしいんだなあ、とつくづく思う。ある学校のあるクラスで、なぜ非行に走るのか、無記名で書かせたところ、結果は、男子38名中の18名が「さびしいからだ」と書いたという。

物は豊富になり、生徒の持ち物調査をすると、結構高価なものをもっていている。ステレオ、テープレコーダー、楽器、オートバイなどが上位を占める。生活程度が上っているだけにそれを稼ぎ出す大人は忙がしい。家にはブラブラしている人はいない。生徒自身も忙がしい。宿題に追われ、マンガを読み、テレビを見、楽器をならす。家人とゆっくり話をするひまもない。自己を表現し、それがどう受けとられ、どうはねかえって、どう受け

とめるという心のつながりが無い。これがさびしいということではないか。一人で考えこむ、誰も私を理解してくれるものはない、と思ひこむ。彼の心を慰めてくれるのは電波にのった深夜放送のデスクジョッキーの声しかない。この生活は逃避でしかない。

「倫理・社会」の授業は、生徒の心を開かせなければならない。教科書の叙述や教師の講義は知識や思想の上ずみであることが多い。教科書や教師の講義で、生徒の動きをつくり出すのはむずかしい。生徒の心の中に疲んだどろどろしたものが流露されるとき、生徒の心を動かす。教師の発問はどう工夫してみても、なかなか生徒の心を動かすことはむずかしい。不思議なことである。生徒の次元で、しかもどろどろしたものが吐露されたとき、急に教室は活気づいてくる。これをどのように授業に取り入れたらよいか考えなければならない。

私は発表の授業を取り入れているが、その授業形態・方法を述べると、

1. 発表者は必ず一冊の本または本の一節を読んで自分で解ったところを発表するようにする。(つながりのある考えをもたせたい。)
2. 質問者をあらかじめきめておく。前時の発表者と次の発表者に質問の口火を切らせる。
3. 記録ノートを次の次の発表者にとらせ、感想を書かせ、また、発表者の感想も書かせる。
4. 質疑応答の時間を、必ず15分はとるようにする。

このようにして授業を進めたところ、割合に面白い授業ができるようになった。紋切型の質問もあるが黙って聞いていると、答える方がへましたりすると、そこから急に活気づいてきたりする。思わず心憎を吐露したりして、教師が交通整理しようとしても困難な場合がある。次々に発表がとびかい、二人同時の発言すらあるのである。

釈迦の授業の時、仏教以前の考え方で、業と輪廻が発表項目になった。比較的関心が深かった。従っていろいろな質問が出された。前世の行為に

より現世のあり方がきまり、現世の行為により来世のあり方がきまるとい
う。そうすると梵我一如で天の昇る人、動物や生物まで落ちる人などで、
人間の数が減ってしまうのではないか、という疑問が出された。生徒は、
数の上での厳密さを求めて、けんけんがくがくやりあっている。結局、次
のような話を私がしてようやく落着いたことがある。当時の人びとは貧乏
で、中には悪事をはたらかざるを得ないような悲惨な境遇にあるものが多
く、どうすればこの現世の苦境から脱出できるかが最大の関心事であった。
現世の苦境を説明したのが「業」という考え方であり、この循環を抜け出
すための方法としていろいろな修行がなされた。この輪廻解決の一つの方
法として仏陀の悟り、釈迦の宗教が起ったのである。だから業と輪廻を考
える場合も、当時の人びとの生活状況や考え方を捨象して考えると生きた
思想がつかめないで、技業末節にとらわれることになる。以上のような
話をしたら、おとなしくなった。はたして、よい教育効果を生んだのかど
うか解らない。だまらせることになったのだから。

このような授業で、もう一つ嬉しいことは、発表者が本を読んで、ある
思想について理解が進んでくると、表現意欲が非常に高まることである。
発表せずにはおれないような状況になってくる。人は誰でも思想をもつと、
表現したくなるのが常なのである。授業ではそこまで高めるような工夫が
大切である。

考えることは前述のごとく、問いと答えの連続である。自分の中に問い
と答えが連続して進めば思考は深まりつつあるといえる。自己自身に問い
かけがなければ、他の人による問いの刺激が与えられることによって思考
は進む。この問いと答えを、あまり短絡的に結びつけないところに思考の訓
練があるのではないだろうか。

現代の高校生は、一般的に孤独で、自分一人の世界に閉じこもり、やや
もすると、自己に対する問いかけが少なく、自分の問いに対して安易に答
え、それに甘え感傷にひたる傾向がある。多くの人が青年に多くの問いか
けを与え、その答えの出るまでの過程を大事に見守ってやることが大切な
ことだと思う。

「倫理・社会」は思索する時間になければならない。人間や社会のあ
り方について、じっくり考えさせるところにその役割がある。生徒の心を
開かせ、心と心のつながりの中で、問いと答えがくり返され、思索は進む。

今年の倫社ノートから

1. 理想と現実の間
2. 帰属感から連帯感へ
3. 未知の世界への誘い

都立戸山高校 沼田 俊一

倫社の授業は創造的でありたい。私の小さな発言に触発されて、思いがけぬ思考の発展が生徒の心に芽生えることを期待したい。生徒の小さな発言にも細心の注意を払い、単なる受け答えで終ることのないようにしたい。生徒相互も友人の言葉に耳を傾けさせ、一つ一つの小さな思索を尊重する態度を養わせたい。なるほど、生徒の今の人間関係は自らのぞんだ出会いではなく、学校群のふり分けや偶然の組換えによって、たまたま居合せ先にすぎない関係であるには違いない。しかし、その偶然を大事にしていきたい。この時代に、この場所に生をうけたこと自体が偶然であり現実なのだから、そこから逃げ出すことがないようにしよう。

互いの意見のフィードバックに心がけ、クラスでなければできない授業形態を願って、3分間スピーチや倫社ノートを試みて数年になる。倫社ノートは、①授業の感想と、②近頃考えることの二つを順番にレポート用紙に書き加えて次に回すだけのものであるが、だんだん部厚くなるにつれ、内容も熱を帯びてくる。時には生徒の心の奥底をかいま見る思いがすることもある。しかしなかなか本音はでてこない。

ここでは最近の倫社ノートから生徒が当面している問題のいくつかをとりあげ倫社指導の参考に供したい。

1. 理想と現実の間

〔最近考えること 10月22日 A.A 男子〕から要約

中学1、2年頃は徹底した理想主義者だったが、最近はかなり現実主義者になってきた。中学時代、僕の目指していたのは「学校の理想化」だった。中学では事あるごとに規制を加え、しかもいつも学校側の独断だった。僕はたまたまそれがいやだった。僕は公の場でも発言をし、下らないこ

とで教師とも口論した。僕がいやだったのは教師が僕らを固定化し、管理するのに都合のいいように同一化することだった。だがその結果生れたものは何だったろう。言わずとしれた落ちこぼれ、非行である。

僕は浅いつきあいだが、番長のようなやつのことをよく知っている。実にいいやつである。他の生徒とかわらない内面を持っていた。彼らにも何か熱中できる生きがいみたいなものがあるはずであった。しかし教師たちはそういうところを決して見ずに冷たい態度で接していた。それが彼らの心をかたくなにし、それは非行へとつながる。彼はオートバイに乗り、シンナーを吸った。彼らに教師は言った。「そんなことはやめろ。おまえたちのためぞぞ」と。やつら(教師)は心配なんかしらいなかったのさ。ただ彼らがじゃまだったけど、世間がうるさいからそんなことばでごまかしていたのさ。その証拠に彼らが卒業してしまえば、もう無関心、無関係、勝手にしやがれた。やつらはゲスだ、偽善者だ。僕が尊敬するただ一人の小学校の先生は、中学の教師が見捨てた不良たちを卒業後も面倒を見た。

ところで僕はこんなことを言える義理ではなかったのだ。

これからは僕のざんげである。

最近、僕は、自分がどんなにくだらな人間であるかをさとした。僕は理想を目指していたのは前に言ったとおりです。それが信念だったのです。ところがどうだったでしょう。僕のやったことは。あれは中3の受験期です。そう、あの頃はみんなが狂っていた時期で、僕も例外ではありませんでした。僕は高校に入りたかった。22群を受けたかった。そのためには高い内申が必要だった。そして教師から悪く見られるのは不利だったのです。僕は知らず知らずのうちにあらぬ方向へ進んでしまっていたのです。ただでさえみんなが必死になる時期です。僕もそれに乗ってしまったのです。内申かせぎのためにできるだけのことをしました。教師の心証を害さないために素直にしていました。おかげで僕は高い内申をとり、高校に入れました。ああ、しかし、僕は挫して、信念を捨ててしまったのです。そ

こにあったのは打算、裏切り、偽善、僕が一番きらっていたものだったのです。

高校に入ってからいろいろなことに挫折して、一時、すごく気がめいている時期がありました。こんなことを考える余裕もない空虚な時期でした。最近、事実ですが倫社を通じて何か色々人生について考えるようになり自信も湧いてきました。しかし、昔の理想主義を再び提唱することはできません。それを僕の心が受け入れなくなってしまっています。

僕は完璧に甘かったのです。現実にはぶつかってみてわかりました。だから僕は提唱します。理想を現実の中より見つけると。現実にはばかりとらわれれば僕のように後悔します。理想を追い続ければ、現実にはぶつかり挫折します。もちろん挫折は尊いことですが、挫折を繰り返せば精神的に弱くなり理想を追えなくなります。だから現実の中で可能な限りの理想を追究することが最もよいと思ひわけです。(後略)』

生徒の心は感じやすく純粋であると頭では知っています。具体的にそれが今日のこの生徒の中で、どう揺れ動いているかを知る機会が少ない。とても「近頃の高校生は三無主義で無感動だ」などと言えないこの文を書いた生徒の、過去2年間ほどの心の悩みは、倫社ノートのような表現の場がなければ、なかなか外に出てこないのではあるまいか。倫社ノートは生徒にとって「心のサロン」なのである。

〔最近考えること 11月11日 I.T.女子〕の冒頭部分

まず……この倫社ノートを読んで、とっても感激しました。2Fの皆ってとてもいい人ばかりだなんて思いました。だって皆、一つのことにも真剣に悩んでいるから……

私戸山の人間って勉強ばかりで、他の悩みなんか持ってないんじゃないかな？ なんて思ってたんです。だから、ホッとしました。本当に……私、

2 Fのふんい気が好きなんです。なんとなく……。」

最近は友と語り合う場を持っている生徒は少ない。運動部の合宿などを体験すれば別だが、駄弁る機会は極めて少ない。多くの問題を意識し、戦いながら挫折し、ノイローゼになっていく例もある。去年のことだったが、ノイローゼがひどく欠席しがらの生徒がいた。倫社ノートも欠席のため順番がとばされていた。HR担任も対策と指導に手を焼いていたが、廊下で呼びとめ、冴でゆっくり読むように倫社ノートを手渡したところ、それから、めきめきと様子が快方に向ったことがある。倫社ノートの一つの効用かも知れぬ。

成長するということは、過去がこわれていくことでもある。

〔最近思ひこと、11月24日 E・H 女子〕より一部分引用

また大きくなるにつれて、本当の自分が現われてくると同時に、自分の夢がどんどんこわれていく。小さいときには大きくなったら〇〇になるんだとか、〇〇するんだとかいう夢は、最近では自分の能力を痛切に知って、あれもだめ、これもだめと、だんだん夢が破れてくる。なぜか、とても寂しい気がしてくる。だから小さいときは早く大人になって好きなことをしたいと考えていたのだが、今では大人になりたくないと思っている。これからは、なるべく小さいときもっていたものを失わないようにしていきたいと思う。」

一 生徒にとって夢は生きがいである。どんな夢にも美しさと善さがある。それがアイデアのように超現実的でなく、現実から連結する彼方に在ってほしい。アリストテレスを学んだことは有意義であったであろうか。

2. 帰属感から連帯感へ

一般的に生徒の意識を分析して、最近、帰属感や連帯感がうすれ、利己的になり、全体のために役立とうという気持がなく、HRの運営に困難を来しているということは認める。だが、社会や学校がそうならばなるほど、

それに反発したい気持が生徒の中に芽生えてくるのも自然といえないだろうか。クラスマッチや文化祭は、受験競争に悩む生徒たちにとって大事なオアシスの役割を果す。昨年度全国高校の8ミリ大賞は3Fの「ジーンズをはいたコンピューター」であったが、このクラスが2Fの時からクラスの和に心がけ、全員で文化祭のときにつくりあげた映画をたまたま出品してこの大賞を得たものであって、連帯感がなければとてもできる作品ではなかった。だから、高校生には連帯感や帰属感がないというのは間違いで、それを求めている姿の方がより一般ではないかと思われる。倫社ノートを読んでいると、そういう意見に多く出会う。もちろん少数のエゴイストがいることは、昔も今も変りないが、意欲的なクラス創造的な授業を意図するとき、生徒の状況判断を誤ってはならない。

〔最近思うこと 11月17日 I・Y 女子〕の文末より

……ただ今、戸山祭のこと（はRで）ちよっと行きづまっているよりだけど私はぜひ女の子が主役のものをやってみたい。

戸山の映画ってどれみても男子が主役で（戸山は男子対女子の割合が2対1で女子が少ない）女の子はつけたしみたいに出てくるのが多いみたい。「真由子」（昨年度校内映画部門一位作品）にしてみても結局相手の男子がけっこうクローズアップされていたみたいだし……。

まあこれは私の意見ですが、とにかく、やるのだったら、みんなで協力してやろうよ。

私、この2Fというクラスとっても好きだし、3Fになってからも、まとまりのあるすてきなクラスであってほしい。

勉強面でも、行事面でも、みんな協力してやろう！

本校の場合、クラスは1年から2年になる時、クラス分けをするが、2年と3年にはそれがない。少くともはR経営は、2年間は連続したいものである。少数派の女子の発言が自由に行われて、しかもそれが全体に反映するようなクラスでありたい。とにかくはっきり自分の意見が言えること

はすばらしいことである。

〔近頃考えること〕 11月30日 O.S 男子〕より要約

戸山高校に入って自分の性格が変わったようだ。はっきりいって、この学校の生徒はまわりの人ばかり気にして、他人への体裁をつくり、プライドが高く、劣等感に堪えられず、優越感を味わうことに喜びを覚え、陰険で、他人の不幸や失敗を喜び、顔に偽りの同情を浮かべる。そのことを誰もが自覚しているのに直したり改善したりすることをせず、やはりもとのから閉じ込もって大きく羽ばたこうとしない。私はそれをみてとても悲しくなり自分だけはそうなりたくないと思う。……(中略)……私がいみんなに望むことは、もっと自分の全てをさらけ出して人間味あふれるつき合いがしたい。ある時は妥協することなく、けんかになっても良い。ある時は完全に妥協して結果を見つめ合う、それもいい。このままでは、2年間つき合っても、本当にどんな人間なのかわからない。私としても冷たい悪い印象しか残らない。せこせこしないで、目の前のことばかりじゃなく、視野を広げて、遠くのものや、自分のまわりの全てに目を向けてほしい……………(後略)……。」

他に訴え、自分にも言いかせるこの方法は、旧制高校の寮生活でもよく使われた手段だ。声を大きくすることによって自己のモラールは高まり、全体も活気づく。

〔最近考えること 1月26日 K.Y 男子〕より抜粋

年が明けてから、まったく勉強が手につかない。

自分というものを悲観的に見ると、果てしなく、どこまでも、とどまるところを知らずに落ち込みます。なぜもっと、自分について楽観的に考えられないのか。日本人の美しい(?)習慣で、自分のことをよく思おうとしないのか。自分のことをよく言うやつに、ろくなやつはいないと思ってるのか。

これはまさしく悪です。自分に対して正しい評価ができなくなります。

もっと自分に対して自信がもらいたいと思います。

私は、自分でもいやになるくらいに、みえぼろで、すぐに他人の目が気になってしまうのです。なにをするにも、こんなことすると笑われるんじゃないかとか、バカあつかいされるんじゃないか、とか……。

多くの人が、自分の心をもっと表に出そう、皮をかぶるのはやめようと言っているのですが、私はそういう人その考えにまったくそぐわない人間なのです。私はガンコな人間に多少のあこがれをいただきます。他人が何とのおうと自分の信念をまげないそういう人間には、なにか魅力を感じます。しかしよく考えると、人間関係がうまくいくということは、お互多少のゆずり合い妥協がなければと思います。

こう考えると、一大問題にぶら当るのです。つまり、まとまりのある和気あいあいのふんい気は、実は、このような適当人間、妥協人間の集まりではないかということ。任意に集められた人間の性格がそう簡単に一致するか？という問題です。

本当の友だち、真友はいったいどこから生れてくるか？（中略）

真の友だちというのは必ずしも趣味が一致するとか考えが同じというだけでなく、互いに正反対の性格でも、くくまれ口をたたき合っているうちに、なにか身近かになってくるのでしょ。

和気あいあいのぬるま湯関係でなく、必死になって対抗意識をもやすーその中から一生つきあえる腹の底から話し合える友だちができるんじゃないかと思います。（後略）」

4月以来10ヶ月を経過したこのクラスは、適当人間の集まりではもはや満足できない人間関係がのぞまれている。2年から3年になる時前任校では、文科コースと理科コースに分けるクラス編成があったが、本校ではそれが無い。これは、生徒にとってどれ程幸せであろうかと思ふ。

3. 未知の世界への誘い

教育とはまさに永遠のアイデアを想起させることだといわれることがある。

その意味は人間の存在の根源を問うのが人間本来の姿であり、その根源は現実の時空間を超えたところに思いをはずることになるということである。人間は右左の根源を知りえて、はじめて、はじめて人間となり、安堵することができる。その神秘のヴェールは、間に自らの体験によって取り払われるが、多くの場合は、家庭や友人との語らいの中で、あるいは教師の話によって取り除かれるのである。たとえば生徒がプラトンのイデアや、アリストテレスのエンエルゲアを教えられずに体験から推論できることは極めて稀であろう。同様に、キリスト教や仏教の根本思想も教えられてはじめて開眼できることが多い。それまで生徒の体験の中で断片的に記憶にあった事柄が、倫社の時間に少しでも系統化され、無意味とされたものが突然意味をもってくることがあるのは、何とすばらしいことではないか。数多くの神秘の扉の前に立つ生徒に、扉を開ける手助けができれば幸いである。

〔授業の感想 11月17日 I.Y 女子〕から抜粋

旧約聖書というのは読んだことがなかった。新約聖書は少しみたが、アブラハムから始めて、えんえんと子孫がつづくのがおもしろくて読んだにすぎない。今日、旧約聖書(創世記)を読んで、なかなかこじつけがましくておもしろかった。又、蛇が出てくる所もよい。アダムとイブの子、カインの末裔すなわち旧約の人間観については、わかったようなわからないような。とにかく人類は悪を犯す可能性があるものということだけに理解できる。

しかし、結局キリスト教というものは、根本的には理解できそうもない。物語みたいを感じて。カインはアベルを殺して1人になったけど、そのあとどうやって子孫ができるんだらう?(後略)

私はその時「経験がないとやはり無理かな」という感想を書いた。「自分の青春感情や、不消化の不快さや、社会感情は考えることができても、独自の宗教感情を考え得ない人には、宗教研究は困難である」とオットー

は「聖なるもの」(岩波文庫P.18)で言っている。

〔授業感想11月24日 E.H 女子〕から抜すい

教科書の「神の国」というところからやった。この部分を読んで第一に思ったことは「神の国」とはいったいどこにあるのだろうかということだ。地球上だろうか、いやらがう。宇宙……いやらがう。もしかしたら四次元のような私たちと次元のちがう世界にあるのでは、などとばかなことを考えたりした。しかしなんのことはない。ちゃんと教科書に書いてあり「あなたがたのただ中にゐるのだ」とあった。つまり私たちの心の中にある、といっているのだろうか。しかし私は納得いかない。神の国なんていうとすばらしい天国のようなところで美しい神々が自由に生きているというように風景を想像するからだ。また神というと私はすぐギリシヤ神話の神々を想像するからだ。神々の中で一番えらいのは大神ゼウスだと考えてしまう私にとって、キリスト教の神はよくわからない。

次に「神の愛」という項目がある。そして神の愛への信仰が、イエスの教義の中心であると書いてある。私には神というその人自身について全然わからないので、その人に対しての愛への信仰などはわからうはずがない。そもそも神とはどういうものだろうか。また神の愛とはどういうものであるだろうか。教科書を見ると、じぶんにそむいたものがあれば探し求めてその罪を許そうとすると書いてある。それがなぜ神の愛なのか私にはよくわからない。キリスト教を知ろうという気がないでもないが、あまりないようである。それはなぜか？やはり、うちは無神論者だし、ある宗教を信じることに無意識的な抵抗をもっているためだと思ふ。しかし、こんなことではいけないと思ふ。私たちの生活にかなりの影響を及ぼしている欧米人はキリスト教を信仰しているためだ。彼らの根底に根強くはびこっているキリスト教を解さないで、どうして彼らを理解することができようか。

私は、中学のとき新約の方をほんの少し読んだことがある。心の中では、キリスト教を尊敬なんかしてはいたくなんとも思っていなかったが、さし絵

がきれいだったので、つい目を通してみたくなったのだ。読み終ってわかったのだが、なぜ心がおらつくのを感じられた。宗教って、こんなのかなあと初めて私は知ったような気がした。

また、教科書の「マタイによる福音書」の引用部分を読んでもなるほどなあと思われるところもある。だからキリスト教だからといって避けることなく、教科書だけではよくわからないので、他の本も参考にしながら、キリスト教について学んでいきたいと思う。」

大宜教師ならともかく、1-2時間ほどで宗教を理解させるよう感銘深い説話をすることはできない。自己の体験を折り混ぜて、何回も存在の不思議さにせまっていくなかはないと思う。いつの日か存在の彼方に神がいることがわかることを期待しつつ。なぜなら、それが倭米人の世界観であり、人間観なのだから。

〔近頃考えること 12月1日 O.Y 男子〕より抜粋

最近キリスト教について授業で学んでいるせい、よく“神”の存在について考える。たゞ神といっても人それぞれいろいろな神があると思う。一つの信仰の対象も神であろうし、心のすみかに宿っている自分のなにかになっているものも神であると思う。

だから、神とは何であるかと聞かれたとき、こんなものだと定義することはできない。日頃の生活において、たまたま一匹のクモの巣を見たとき、なぜあのように複雑かつ幾可学的な巣をクモが作ることができるのかと考えるとき、あれは習性であると言ってしまえばそれまでであるが、それでは説明しきれない何かがあるのではないかと思う。小さな一匹の青虫が美しい蝶になるまでの変化をテレビで見たことがある。あのみにくい形の青虫が、自分を外敵から守り、そして産卵し、次の世代を残して死んでいく中に、誰から教えられたわけではないが見事な頭脳の働きを単に習性という言葉や当り前と片づけてしまえないものがある。また一匹の玉虫が木の葉に切り込みを入れ、半ばしなわせてから、人間にたとえれば十畳敷もあ

るようなじゅうたんを一人で巻き込み、その中に大切な卵をうみつける。そしてそのゆれはしを落ちないように葉の中に切り込みを入れて巻き込む所作は驚くばかりである。

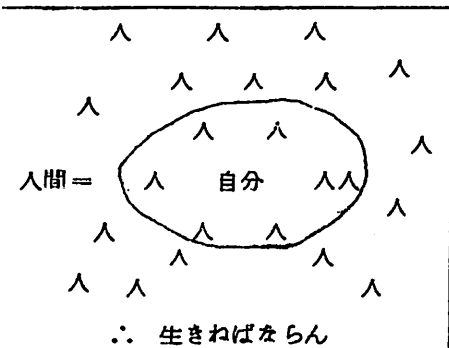
頭脳などないように見えるこの小さな虫けらの中にも生きるためにさずけられたすばらしい力がある。そしてこれを説明することができないのは不思議である。

科学が進歩し、核融合にまで進んできても、それでもなお解明できないものを科学者たちは第〇次元の世界という言葉をを用いている。科学で究明されたものが真理であっても、真理は科学で究明されるものではないという所に、神の存在があるように思える。」

倫社ノートには、このようにすばらしい生徒の着想を発見できることが多い。それを互いに眺み耽ることによって、生徒の魂に次第に大きく成長することであろう。教室の購読だけで倫社の内容をこなすことは不可能だとしても、こうした方法によって少しずつ、問題の核心に近づくことは可能であろう。

4. 結 び

そのほか、おもしろい倫理、鋭い論理に出合うこともある。たとえば11月5日「不良化の原因は女子だ」「大人はまらがいだらけだ」などは、なるほどと首肯させる論旨の展開がすばらしい。紹介できないのが残念である。



最後に10月15日にAさん(女子)が「近頃考えること」として、大文字で「人間はなぜ生きなければならないのか」という問だけが書かれていた。彼女はある苦しみに悩んでいることを知っていた私は下の図で答

えた。3ヶ月後の今年の1月28日、Kさんが〔近頃考えること〕に書いている。「先生のAさんに対して答えた図はよくわかった。私も前に死にたいなんて思ったことがあったけど、もし私が死んだら涙を流してくれる人が1人でもいると思ったから絶対に死ななかつた。今はやりたいこと、人にはできない自分だけにできる何かを[●]生をかけてやりたいと思う。最近そう思いはじめた。」

倫社ノートは本当に心の交流の場になってきたようだ。

才 2 分科会 現代と人間

研究経過報告

今年の第 2 分科会は、まず活発だったといってよいだろう。2 月に予定された第 7 回の会合で一年間の幕が閉じられることになるが、これは夏休みを除いて月 1 回のペースで会が開かれたということだ。それでこの会の特長を上げて会が盛会になった原因を採る代わりとしたい。

- ① 尻込みせずに論争する人が何人か居たこと。
- ② 若い人が多かったこと。
- ③ ほとんどの人がレポーターになったこと。
- ④ 紀要の事や研究部の方針を意識して金縛りにならなかったこと。
- ⑤ 日曜日(注)に会合を持つことが原則であったこと。そのためやむをえぬ用事で欠席する人が少なくなったこと。
- ⑥ 会合の度に場所を考えて学校訪問を兼ねたこと。
- ⑦ 世話人が 3 人いて、打ち合わせがしやすく、事務の仕事が多くできたこと。
- ⑧ 機関紙“坩堝”が発行されたこと。
- ⑨ 有名校偏重にならず市広い学力程度の学校の現場に立脚できたこと。
- ⑩ はほぼ同じ顔ぶれが毎回集まったこと。

以上のような特長があったが、欠点と言えば、継続的な討論ができず一貫性に欠けていて深みのある会にならなかったことだろう。学級肌の人には内容の点で不満が多く残ったのではあるまいか。

さてそれでは一回一回、会を追ってみようと思う。

- ① 7 日 8 日(金) 新宮高校にて

清瀬高校では、世話人が決定されただけで会の運営方針にまで立ち入ることができなかった。それで第 1 回例会は、運営方針をめぐって話し合わ

れた。世話人一任の声もあったが、各教科書の重要事項を整理してみようということ、一学期にやったことを互いに持ちようということに落ち着いた。また世話人の方で事前に整理して、ともかく夏休み明けの次回には、ある程度絞った話題が提供できる見通しができた。この日はしたがって、「現代と人間」の内容にまで立ち入ることがほとんどできなかった。また研究例会を日曜日に置くことが話された。出席者10名。

② 9月4日(日) 北高校にて

この日の前回の方針に添って、アンケート結果に基づき「大衆社会論」について討論することにした。だが、この問題設定、この用語そのものに批判的意見が出て、しばし会は混乱。

A: 大衆社会論は心理学的視点に力点を置いて人間を捉え過ぎているように思ふ。人間の意識は社会構造との関連で捉えることが基本でなければならぬと思ふが……。

B: 大衆社会論の歴史的な位置づけを明確にすべきだろう。

C: どうしてこのようなテーマを取り上げたのか。「大衆社会論」自体、特定の立場によるイデオロギーである。現代社会を「大衆社会」と規定することは問題である。

D: 是非はともかく、「大衆社会論」というコトバは、半ば市民権を得ていると思ふがどうか。

さてしばらくこうした議論がされた後、「音楽に現代社会について喋りましょう」というほっとする意見に助けられて、各自、「現代と人間」の章で、実際どんな具合に授業を展開してきたのか紹介し合った。

中で、注目されたのは「公害」を教えるために、田中正造の地を訪ねたというY先生。生徒にスライドを見せ身近なことから出発しようとする先生。また自殺の問題に時間を割いたというT先生など。

関根先生の方からレジュメが配布され、それについてしばらく話されたが、時間がないので再度次回にお願いすることになった。テーマも「現代

社会の諸問題」—その一つの側面としての『大衆社会化状況について』
—という長ったらしいものになった。出席者12名。延々四時間に互
る討論であった。

③ 10月9日(日) 杉並高校にて

今回からレポーターが2名を原則として定められているので、会の運営
は大分スムーズに行くようになった。すぐに内容に入って討論。

〔関根レポートと討論〕

民衆社刊行の『非行』よりシンナーに関する文章、及び毎日新聞社刊行
の『宗教を現代に問う』より靈友会の中高校生修行場面の文章。この二つの文
文章を使って、生徒に感想を求め、生徒—工業高校生—の現状を問い
直す作業にしたという。生徒の身近な問題、あるいは生徒とほぼ同質にあ
るだろうと思われる前記二つの文章を投げ処にして、現代という社会に気
付かせること、これがねらいだという。

生徒に感想を求めた時の課題文の中に、「信仰は現代社会における孤独
からの逃避である」という箇所があった。その言葉にひっかかって、しば
らく討論が続く。

- A: 孤独からの逃避として断定してよいのか。
- B: 素直な子は、先生の孤独からの逃避という考え方を受け入れて書いて
いるが、そうでない子はその考えに疑問を提示している。
- C: この生徒は孤独からの逃避でなくて、現実からの逃避だと反論してい
るね。
- D: 一つの社会現象を考えるために宗教の問題を取り扱ったのであって、
ここでは宗教教団や信仰の意味・当否といった本質的な問題には触れな
いのだろう。
- E: 靈友会の修業については、逃避というより、娯楽性が強いから行くの
ではないだろうか。
- それからしばらく工業高校の現状についても話が弾んだ。

〔市川レポートと討論〕

現代社会の状況分析をさせるために、一時間目は、生徒に現代の状況を現わすコトバを書き出させる。二時間目にそれらのコトバを自然構造・生産構造・社会構造・生活構造・意識構造・ぼくのなやみの欄のいずれかに組み入れさせて、かつ相互関係を矢印で関連づけるようにしてみたという。

この試みの背景には、真木悠介氏の『人間解放の理論のために』（筑摩書房刊）があるというので、この問題に移った。

真木氏には、目的理論・情況理論・実践理論の三つに分かれた全体理論がある。今の状況がそのまま敷された場合の予測と、実践の意味けされた後の目的との三者関係について論じられたものである。

しばらくこの問題につき質疑応答があったが、会員相互の間に十分な理解が満たなかったとみえ、深まらない。それよりも、実際に書かれた生徒の状況分析のプリントを見て、おもしろい試みだが、難しく困っている生徒もいる。これは指導が大変だと感想が洩らされた。市川先生も書かせた後に生徒に還元してないという。それは今後の課題だと正直に述べられた。ただ、この試みには多くの可能性が見い出されると感じられた人は多かった。発想の転換的衝撃を感じた人もいたのではないか。出席者8名。

④ 11月13日（日） 駒大附属にて

〔松永レポートと討論〕

まず、具体的なレポートに入る前に、社会科教師としての「課題」ないし「使命」といったことについて私見が述べられた。——「未来社会の形成者としての生徒を前にして、我々社会科教師に課せられていることは何か」という真摯な問いを自己に課し、「あるべき社会への予見性を絶えず保持し、指導していかなければならない。そのためには、我々が生きている現代社会のトータルな状況把握が必要であること」と述べられた。

それからレポートに入った。松永先生は中学校でも教えているので、中・高の教科書の中から「現代社会の特質」に相当する部分について、いく

つかの大項目を抽出し、分析を試みた訳だ。また、「政治・経済」の授業で生徒に作文させたものを私見を交えて分析され、現代社会の問題点を広範に述べられた。

A：小・中・高の、特に中学と高校の社会科の学習の内容の一貫性ということが大事であると感じた。

B：総花的な感じで、論点に明確さを欠くように思う。全体を「資本の論理」—— 例外—— という視点から把握できないだろうか？

C：生徒の書いた作文について、もう少し具体的な松永先生の分析があってよい。例えば、「ファシズムの恐れ」について書いた生徒の作文について、何を以てそのように生徒が考えているのかの具体的な根拠がほしい。

D：生徒の作文についての分類、分析の資料と松永先生の私見を述べられたレポートの部分が内容水準の上から、あまりにかけ離れている。

E：生徒の意見が生活過程を欠落している以上、情報（マスコミ）中心になるのは仕方がないかもしれない。

〔津田レポートと討論〕

「現代日本の差別問題」というテーマで話された。問題は「被差別部落問題」である。約1時間、「部落差別の実態」と「差別の歴史」について、授業で学習したこと、それについての生徒の反応など具体的な説明がなされた。

生徒の感想の中では、「実態をはじめて知って驚いた」というのが圧倒的に多い。また「差別しないように自覚を持とう」という「個人の自覚待ら論」や「差別意識は人間の本性に根ざしたもの」というような「本性論」などの意見が多くて「ウンザリ」させられるという。「知識として差別を知ることは簡単でも、差別に敏感で、差別を許さない人間になることはわずかしい。この授業を通して僕自身も問われている」と述べられた。討論の中では、次のような疑問が出された。

A：倫社の学習指導計画の中での位置づけ，時間配当などが適切といえるかどうか。

B：政経の授業との兼ね合い，特に法の下の平等という人権上の問題として把握する視点について，どう対処しているのか。

他，種々の意見が出されて，討論はつきなかつた。出席者9名。

⑤ 12月10日(土) 学芸大附属にて

今年の都倫研のテーマは，「教材内容をどうしぼり，深めていくか」というのだそうだ。考えてみると，第二分科会は，今まで各自がレポートをたんでにやってきて，それについて討論することが多かった。今日の会合は，それではいけないと反省されたベテランの両先生が改めて本年度の研究方針に真向から取り組まれたものだ。

細かいことは，次ページ以降の秋元・井川両先生の研究報告を待つことにして，会の雰囲気をお伝えしたい。

〔秋元レポートと討論〕

一学期の後半から三学期の前半までグループ別の研究発表がある。みな先哲研究である。授業の中心が，ここに置かれるので先生の方で講義するのは，まず一学期の前半といったところになろう。そこで「現代と人間」の章がとをされる。

一通り，重要語句は説明する。できなければ，プリントを流すという。精選の点では，「職場集団と人間関係」「地域社会と人間関係」を省くといわれたのは，次の井川レポートと好対照であった。山の手の住宅街に住む生徒と川向こうに住む生徒との対照が鮮かであった。

〔井川レポートと討論〕

いくつかの感想，意見のみ書いておこう。

「グループ学習は，クラス替え直後の一学期の始めがいい。親しみを持ついいチャンスだし，緊張感もある」「現代っ子は，習わなければ知らないと平然という傾向にある。」来年は，『現代と人間』は最後にやる

うかと思う。世界史の進度により歴史的背景がわかるから。「また是非、『公害』『民主主義と人権』の二項目を設けたい」など、出席者9名

⑥ 1月15日(日) 府中工業にて

物凄く議論の沸騰した日だった。それは特に評価問題につき、津田レポートに反撃することから出ていた。次の野村レポートの工業高校の現状にも考えさせられた。もう授業以前だから、こんな研究会どころではないと会員の間にも考えさせられたのだ。ただ、この事を報告するには、あまりに都倫研の紀要とはかけ離れているので、ここでは割愛させてもらおう。両先生御了解下さい。出席者11名。

(矢島記)

現代の家族 「核家族化と教育問題」

都立東高等学校 井川 哲夫

1. はじめに

今年度一学期に家族集団と人間関係で「現代家族の問題点」というテーマについてグループ学習を実施した。グループ学習は共同の思索を深めることが目的であり、その意味で各人が意見を述べなければならず、質疑討論のプロセスで、常に問題意識をもたせる重要な学習活動でもある。学習指導の展開道程で特に問題となった事項を整理してみると、①家庭生活と経済的条件（共働き、パートタイム）②老人問題と社会福祉（老人の一人暮らし、老人ホームの現状）③核家族化と教育問題④世代の違いからくる社会的価値観の問題⑤核家族化と住宅問題（以下略）などである。特に老人問題と社会福祉、核家族化と教育問題は、積極的に活発な意見や討論がされた。ここでは核家族化による家族集団と人間関係、教育問題を中心に若干の考察をしてみたい。

2. 核家族化の進行

昭和30年代の日本は経済の高度成長、産業社会化の進行にともない、あらゆる意味で社会構造上の変化が生じた。その中で特に社会の構成単位である「家族」の変化、「核家族」の増加という社会的現象であろう。

1920年直系家族的世帯が30.2%、夫婦家族的世帯60.0%あったものが、1964年直系家族的世帯25.2%、夫婦家族的世帯69.0%、1975年直系家族的世帯22.0%、夫婦家族的世帯75.6%で今後も核家族化が進行していくであろう。核家族化ないし世帯細分化の傾向は、夫婦家族的世帯であったものが、その子女の結婚によっても直系家族的世帯に転化しなくなったことを意味する。また一世帯（普通世帯）の平均家族員数の推移をみると、1920年の第一回の国勢調査では4.89人、1930年4.98人、1940年5.00人、1955年4.97人、1965年4.08人、1975年3.5人と変化して

いる。このことは、世帯当りの子供の数、特に出産児数が全体的に減少していることである。戦前のように「家」を継ぐという伝統的家族主義の觀念がなくなり、「家族」は夫婦中心主義の生活単位に機能的な面に変化した。

3. 教育問題

核家族化の進行とマイホーム主義の生活態度の普及が、一方では進学率の向上と学歴社会という社会的状況と関連し、家庭における教育の異常なまでの現象を生みだしている。幼稚園に入る前からの英才教育、小中学生の有名校への進学を目指しての塾通い、高校生の有名大学進学への予備校通いなど、日曜もない事柄は子供にとって過重なものとなっている。

高学歴社会が進む過程で、家庭の経済的条件、教育費用の増大が家族構成員に影響を与えている事実を考えなければならぬ。高校へ受験希望する学校数は平均2校、大学進学では平均では4.0校で入学時納入金の平均は56万程度になるといわれる。大学進学のための学資についての国民世論調査によると、充分ゆとりがある8.4%、貯金をする4.45%、土地や証券などの財産を処分する3.8%、家計をきりつめる24.2%、家族の他のものが働きにでる3.3%、アルバイトなど子供の力で行かせる9.5%まだ考えていない、わからない6.3%、となっている。大衆教育時代に入って教育費の増大は家計の支出項目を変え、大学へ進学している家庭の過半数が経済的困難をどうか克服している現状を認識しなければならぬ。

生徒の父兄に対して調査(88人)のデータによると、普通家庭32人、留守家庭22人、準留守家庭34人で、共働き、あるいは母親がパートタイムなどによって一定時間労働する家庭は、半数以上の56人である。どのような目的で働くのですかという質問に、子供を大学へ進学させたい、51人、家庭生活の安定5人、父母共に教育に対する熱意や期待の大きいことがわかる。

次に家庭教育における父親の役割が、現代の家族集団の中で機能的であるか、どうかという視点で数値の面から考えてみたい、「あなたのご家庭

ではお子さんのしつけや教育を豊かにする努力などが、十分できているとお考えでしょうか、それともあまり十分ではないとお考えでしょうか」の間に対し、「あまり十分ではない」と答えた人は72.5%で、実に4分の

(第一表 家庭教育)

職業 回答	総 合	専 門 的 職 業 者	経 営 者	自 営 業 者	的 事 務 職 業 者	熟 練 労 働 者	労 務 従 事 者	従 事 者	サ ー ビ ス	農 業 従 事 者	家 庭 婦 人	無 職	職 業 の そ の 他
計	1,093	60	113	105	47	132	89	161	161	11	6		
十分できている	11.3%	20.0	10.6	11.4	6.4	13.6	9.0	5.6	13.1	9.1	16.7		
あまり十分ではない	72.5	65.0	72.6	75.2	72.3	68.2	71.9	90.1	70.8	81.8	83.3		
どちらともいえない	14.5	13.3	16.8	12.4	21.3	15.2	14.6	14.3	14.2	0.0	0.0		
わからない、無回答	1.6	1.7	0.0	1.0	0.0	3.0	4.5	0.0	1.9	9.1	0.0		

(第二表 家庭生活問題に関する調査)

	この頃の方がうまく行っている	「昔」の方がうまく行っていた	同じ	一概に いえない	わから ない	計
Q1. 家庭のしつけ						
夫	32	38	7	17	6	100%
妻	36	35	8	15	6	100
全 体	34	36	8	16	6	100
Q2. 夫婦の間柄						
夫	51	12	15	14	8	100
妻	53	9	15	14	9	100
全 体	52	10	15	14	9	100
Q3. 家庭のまとまり						
夫	44	24	14	13	5	100
妻	46	19	12	15	8	100
全 体	45	21	13	14	7	100
Q4. 父親の役割						
夫	38	21	18	16	7	100
妻	39	19	17	16	9	100
全 体	38	20	18	16	8	100
Q5. 母親の役割						
夫	36	22	21	15	6	100
妻	36	21	19	15	9	100
全 体	36	22	20	15	7	100
Q6. 家庭生活全般						
夫	63	14	9	12	2	100
妻	64	11	8	13	4	100
全 体	64	12	9	12	3	100

3の数値である。「十分できている」と答えた自信のある家庭は11.7%と少ない。(第一表 家庭教育)「忙しくて、なかなか子供の面倒が見られない」という理由をあげている。子供を塾や予備校に通わせている熱心な父親母親は家庭教育をどう考えているのだろうか。家庭教育も学校教育も調和のとれた方向へ転換させる努力が必要であろう。

さて核家族化が、家庭生活全体にどのような意識変化を与えたか、総理府審議室一家庭生活問題審議会の資料「家庭生活問題に関する調査」(第2表)を参考にしてみたい。家庭生活について昔と今とを比較してどう思いますかという質問のうち、家庭生活全般に関しては「この頃の方がうまくいっている。」と判断する人は64%に達し、「昔の方がうまくいっていた」とする人は14%にすぎない。夫婦の間柄、家庭のまとまりにしても、比率は下がるが、父親・母親の役割にしても、「昔」よりは、「この頃」の方が「うまくいっている」と人々は考えている。ところが、家庭のしつけに関してだけは「昔」の方が36%「この頃」の方が34%と比率で逆転している。家庭生活全般で「この頃の方がうまくいっている」と思う人が高いことは、戦後の民主主義教育の普及、基本的人権尊重と精神、個人の尊厳と男女平等の原理、伝統的家族主義の廃止など、国民の間に広く自由と平等の理念が浸透したことのあらわれである。

4. ま と め

核家族の進行と、教育問題についてふれてみた。現代社会は情報化時代で、大量の情報を家庭に送くり込む。核家族の営む家庭生活が一体どれだけの情報処理能力をもつのか、まさに教育の根本理念が追求されなければならない時代といえよう。現在の日本の核家族化は過渡的段階で家族生活の問題も山積されている。やがてアメリカ、イギリスのようになっていくであろう。核家族化による問題をどう解決し、克服していくのか、未来社会の展望にたって果たさなければならない教育的責任は大きい。

現代社会の病理 — ギャンブル —

東京都立志村高等学校 木村正雄

1. とりあげた理田、学習のねらい

生徒の身近かなものを取りあげることが学習意欲を培養させる契機にもなる。トランプ遊びが日常化し、文化祭に占いを催し、グループ編成や座席を決めるにもクジを好み、校外ではパチンコ、マージャンに接しやすく、競馬や宝くじの情報にも耳を傾ける。ラジオやテレビ、雑誌等のクイズにかかわることも多い。ギャンブルは他教科では直接取扱うことはなく、ホームルームでも表面的になりやすい。しかし、ギャンブルは生徒の関心は高く、しかも生活指導上の問題にもなりかねない。

社会病理として取扱われるものとしては、自殺、非行、家出、売春等があるが、ここではギャンブルを取りあげたい。できるだけ多くの資料、情報の収集の仕方、それを科学的に分析し考察していく学習態度を学ばせるとともに、ギャンブルの本質、現状、問題を通して現代社会の病理現象に気づかせ、現代社会の問題点を理解させたい。

2. 指導内容

(1) アンケートをとる。「ギャンブルについての意識と行動」

アンケートの目的に合せて調査項目が構造化されるように生徒に十分練らせる。次に調査対象を明確にし、効果的な調査方法をとらせる。調査結果の分析も必ずクロス集計し、有意差を検討させる。そこから考察できることとできにくいことを明確にする。一方、すでに調査した資料や情報をできるだけ収集、活用させる(通商産業調査会：余暇ハンドブック、中央競馬会：競馬ファン実態調査、NHK：国民生活時間調査、その他)

(2) ギャンブルとは

定義：一定のルールに基づく，結果の予測不可能な財，金銭等の価値あるもののやりとりである（細井洋子）。また「あらかじめ明確に予測できない不確定のある事象の結果に基づいて少なくとも二人以上の人々が価値あるものをやりとりする行為である」（高橋勇悦）

名称：gamble→game=gamanはga（とも）とnan（人）の合成語。人間—社会性—遊戯—賭博の深い結びつきを暗示。

形態：政治や宗教と結びつく，致く，投げる，博戯から派生。バクチが神社仏閣の大祭に行なわれ「寺浅」が奉納，「くじ」と「占い」は占星術，競輪，競馬，オートレース，競艇，宝くじ，トトカルチ，花札，マージャン，カード，ルーレット，パチンコなど，刑法185条～187条。

意義：形式的には政治に依存，実質的には社会的文化的状況に規定経済的恩恵を与えるというより精神的いこの場（遊戯と冒険）の提供

(3) ギャンブルの大衆化

ギャンブル人口の上昇（競馬1970年3,287万人→1975年3,946万人，パチンコ，1,571,226万人→1,917,292万人，マージャン，135,311万人→242,611万人）入場者数，売上げ額の急増，年令層の変化（若年，老人も），中流階層の台頭，種類と場の増加，賞金の大型化，気安く参加，余暇の増大と退廃ムード，公営ギャンブルの廃止論（政治的モラルの問題，民営論，大衆悪税）廃止反対論（地方自治体の財源，大衆娯楽，非公開の賭博の阻止）

(4) ギャンブルの本質

「現代人のギャンブル心理を考える場合に欠くことのできない特徴の一つに常軌性がある。つまり，人生の設計が大巾に計画化され，ある程度将来の方向が予想できることである。人類の生活の知恵として自然現象および社会現象に対する制御可能の原理，すなわち予測可能の原理が生まれた。つまり，科学の発達である。」「よく現代人の一生がオートメーション工程のベルト・コンベアーにたとえられることがある。その上にのりこむこ

とさえすれば、一定の時間の後に、期待通りの目的地にたどりつくのである。現代社会におけるギャンブルの魅力を考えるとき、何かこの辺に大きな鍵があるように思われる。つまり、〈結果がよめること〉に対する〈結果がよめないこと〉の魅力である。〈技能のゲーム〉—科学的思考と〈偶然のゲーム〉—ギャンブル的思考の二つのゲームが共存し、一方は社会に対し知識および経験を発展させ応用することによって偶然性を統制し、その効力を減らすことにその機能をもつのに対し、他方は偶然性の介入をむしろ切望させることにその機能がみいだされるのである。この二つのゲームの二面価値を巧みに操作する主体的意志こそギャンブルが現代社会においてなお存在し続きる重大な社会的背景であるかもしれない。」(岩井弘融編, 社会病理学, P. 189~190, 東大出版)

(5) 都市化とギャンブル

「都会人の社会心理の特徴は第一に社会的地位の不安定性と高度に分化した社会的役割から生ずる不安であり、第二はパーソナルを孤立とインパーソナルを接触から結果する情緒的肌皸であり、第三は大規模組織と大衆社会によってうえつけられた外面化の過程と皮相性であり、第四は都市的刺激の多様性への抵抗としての飽きの態度やその他の防衛的心理装置、すなわら神経症的無気力である。」(高橋勇悦: 都市化の社会心理, P197 川島書店)「ギャンブルは社会悪の温床であるというギャンブル観は依然として強いが、大都市を頂点にギャンブルを是認する傾向も強い。この傾向は生活の中心が労働よりも余暇であるという価値観の台頭と無関係ではないはずである。ともあれ、今日のギャンブルの盛況は大都市を軸とする都市化社会の形成とともに現われた現象である。」(同上, P. 193)

「都市化社会における現実の世界は人々を同調過剰や自己喪失に追いやるのに対し、ギャンブルのフィクショナルな世界は人々に自由と平等を与え主体性を期待し、生々しい感情の起伏や交錯をよび飛躍の可能性を約束する。」(同上, P. 201)

「余暇活動がいかにか活発化してもそこに創造性が得られなければく生のあかしは求められない。レジャーブームはギャンブル的風潮だけを生む。」

(同上, P. 190)

(6) ギャンブルの社会病理

「① 近代社会は独占資本主義であり、富裕層による消費のみせびらかしは他層の欲求を刺激し、虚栄と羨望と怨恨の感情をつらかり一方、物質的価値が快楽と幸福を獲得する手段とみなされる。②他方、資本の集中による巨大企業と官僚制は役割の細分と労働の単調化と没主体化をともなり、余暇時間の増大にともないレジャー産業と大衆文化を発展させ、無力感と倦怠感が拡がり、気ばらし的快楽と遊びによる擬似的主体回復への志向が強まりギャンブル情報メディアの発展がさらに欲求を刺激する。③公営は一種の間接税に近い形で勤労者から吸いあげ、稀少な巨額賞金獲得者が華々しく報道され、ギャンブル幻想を肥大させ、中層的耽溺による麻薬的效果を日常化し、大衆の不満と反抗の潜在的エネルギーを拡散、抑制し精神的退行現象へと退嬰せしめる効果をともなり。④法的規制外で職業的病理集団が寄生し、詐欺的手段をともなってさえ莫大な利潤を獲得し、寄生的レジャー産業に投資され、他方、暴力団の維持・拡大と抗争のための資金や組織売春の監視や麻薬密売、各種犯罪や風俗営業への恐かつの寄生を行う者の生活資金に流用されている。」(大橋薫他, 現代社会病理学, P. 58 川島書店)

「ギャンブルを社会病理の視点からみると、ギャンブル行為が個人解体や社会解体につながる潜在的可能性をもちうるということ、多くの人々がそれに強く求めていること事態、都市の病理の問題である。」(5)と同じ P. 195)

3. ま と め

ギャンブルも現代社会の問題から生ずるといふ視点を失わないこと。それはあくまで現代社会の理解におく。これから自殺、家出、売春等のテー

マ学習にはグループ学習，発表が望ましい。その際，各グループの学習状況を細部にわたって指導する。私は本稿にとりかかり，競馬，パチンコ等のギャンブル場に足を運んだ。二度と行きたくないムードだった。ソ連を旅して，宝くじ（賞品のみ）があり体制との結びつきに疑問をもった。

「現代社会をどうとらえるか」

横須賀学院 松 永 豊

1. 学習のねらい

今(時間)、ここで(空間)生きるという限定された存在である我々は状況に押し流されないためにも、「現代社会とは何か」と常にとらえ返しの作業を怠ってはならないし、又我々の認識、価値感などは、人間が環境の中で培われるものだから、意識すると否とにかかわらず、我々は現代社会の諸理念について、吟味してみるべきだろう。自分や状況を客観的にとらえようと思えば思うほど、我々の方法は「批判」ということになる。さまざまな問題が、さまざまなところで起こっており、この原因究明を一つに帰結できるほどことは簡単ではない。さすれば現代社会をとらえるには膨大なことばが必要だろう。それも多方面からの。それだけの余裕は少ない。そこで、ここでは、大まかに問題点を2つにしぼり追求してみたい。その2つとは、経済構造の面から資本主義の高度な段階として、もう1つは、観念的な思想構造の面から、近代合理主義の流れとして。

2. 展開の柱

(1) 高度資本主義国家として

資本の論理、もうけ第一主義がのさばり歩いている。資本の論理と近代合理主義は密接不可分に結びついていて、これを切り離した考察は適当でないかもしれない。が一応ここでは、資本の論理で、現代社会を切り、どのような問題がその延長上にあるかということを考えてみると、特に倫理上、「金」「至上主義、物質万能主義が挙げられるだろう。いろいろのものが商品化され、売られる。極端には人間までもが……。否、資本制社会とは、人間も労働力商品として売らなければ食っていけない人々を生み出す。金や物志向は、現に大半の親がそうだから、家庭生活の中で身にま

とわりついているから、教室の教時間でこれをひっくり返すことは、全体的な実践、情熱の闘いということになる。

(2)近代合理主義の流れとして

近代は、西欧の場合キリスト教の世界観からの離脱ということで可能であった。絶対的な神の目から離れることによって自然科学は少しずつ発展していった。従って近代合理主義は理性の方法であり、論理が優先する。と当然その追求の方向は分析であり又、細分化である。このことが、著しい科学技術の発展を促したことは事実であるが、トータルな認識が欠けたために、それらは人類存亡の危機を招いている。

公害、核兵器、原子力等々は(1)と(2)のマイナスの面が重ね合わさって起こったものといってもそうまちがってはいないだろう。従って、(2)においては、理性万能の人間観をとらえ返す必要がある。人間の理くつ通りにはいかない感情の面、むしろそこにこそ人間の豊かさがあふれていると思われるのだけれども、その再考こそ、これから迎えるであろう社会に不可欠の要件だと思う。科学者が、科学という名でもって没価値に徹するあまり、自分の営為の全体的位置づけがわからなくなり、自分の研究の運用に関して無責任の態度をとるならば、ますますこれからの社会は諸問題の累積として時を重ねるのみであろう。

さて、私は、私の学校の授業が80分ということから、そして現在の高校生の感性と自分を照らし合わせるという意味からも、終わりの10分間を、新聞記事の中から自分の関心を引いたことをとり挙げ、それに自分の感想や意見を言わせるようにしている。そのことによって、現代高校生の問題意識なり生活態度がわかったり、又、友人関係の希薄化が見られる今日、友達の意見や関心を知るよい場ともなる。ここ数年続けてきて特徴として言えることは、女子に社会福祉や社会保障に関したことが多く、男子にはマリファナの件などハッとさせられることもしばしばである。

たびたび現われたのは、ロックードに関する事、そして暴走族や自殺

などの青少年に關したこと、そして当然ながら教育制度への批判も強い。

肝心なことは、これらの生徒から出された諸問題を(1)と(2)によって切ってみせることだろう。又、強引に切りきれない時は、關係を説いてやるだけでも生徒の認識には役立つはずだ。

シンナーや青少年の自殺は、私達青少年を相手としてメシを食っている者として、ただ事では済まない重たい課題性を感じる。更に社会科教師としても、社会構造の何が、彼らをしてそうさせるのか、疑問は深まるばかりだ。マスコミではさまざまに因を報じているし、いろいろの説が言われているが、私も、(1)と(2)を手がかりに追求してみたい。物は金につながり、豊かな生活が豊かな収入へと短絡し、学歴社会が、教育の適当競争を促がし、学校教育が、他人をけ落してでもということになるから、当然学校での真の友情は芽生え難くなる。かといって、親は自分の子供の指導に自信がない。青少年はたぶんに孤独だと思う。僕達の時代よりはるかに。遊び場はないし、テレビは彼らの時間を奪いとる。マンガは彼らの思考を皮相化する。私は、極めて主観的に断裁すれば、現代っ子になればなるほど、「生」や生きることの重みを感じぬますますして来た世代がだんだん増えてきているのではないかと思う。その一つとして日常化した交通事故による大量の死、あるいは公害による生命尊重等の無視は、この社会状況総体が、そのような認識に子供をはぐくんだと言ってもいいだろう。

だからこそ、青少年は簡単に、理由もなく、旅行でもするかのようにある世へ飛び立つのだろう。生の重みなり、世界の広さなりは、それこそ我々教師が先輩として、自分の生き様をさらすなかで子供達に明らかにしていかなければならない。シンナーに關しても、やや強引に言及すれば、合理主義の行きつく先きは管理社会である。それは、自分が社会機構にからめとられ、先々まで眺めてしまう。この、根深い選別体制としての学校教育が、青少年の中に深い劣等意識を植えつけ、将来に大いなる希望を持

たせえない。だからこそ彼らは、現実では満たされぬものを、一時の幻の中で、身をゆだねるのであろう。まじめに考えていては、バカバカしくなってやり切れないのだろう。そういう所から、宗教の世界へ入りこむ者もいよう。現代が、にっちもさっちもいかない様相を呈している今、宗教が少しずつ、見返えされていくのではないかと私には予見される。

3. まとめ

この原稿は授業の形式にのっとっていない。私が中学校教師であり、中学社会科全部と高校の「政経」を担当している今、私にとって「現代社会をどうとらえるか」というのは毎日の課題であり、ことあるごとに展開されているからだ。そして、具体的に息づいている生徒を前にそのことを毎日問わない教師はダメだと思う。そしてそのことは、ことばのみならず自分の生き方総体が問われてくる。子供達はちゃんと見ている。ことばだけでは納得しない。「現代社会をどうとらえるか」ということは、実は人間として、当然の問いなのだ。それは、あるべき社会像が自分のイメージの中にあつてこそ、真に批判的にとらえ得るのだから。そういうわけで、学びの途にある私ながら今少しく展開してみたい。(1)と(2)を止揚する生き方を実践することがまず核となろう。そして又、(1)と(2)という問題意識は自己対象化でもあるのだろうから。(1)は社会主義というアンチテーゼがある。しかし、既存の社会主義国家に問題は多く我々は様々の改革を積み重ねる要があるだろう。(2)に関しては、新しい、ドグマに陥らない排他的でない宗教、全体哲学を生み出すか、又は、文学や芸術が新しい解の糸口を提示すべきだろう。現代社会にいかにしてロマン(夢)を復活させるかだ。そのことは、一人一人の教師の生き方そのものに関わってくる。まず、自らが、生き生きと、前向きで豊かな生き方を生きてみせなくてはならない。理論の極を尽くし、感性の完璧な開花を通して呈示してみなければならぬ。そしてそのことは常に瞬間、瞬間が、ある方向への漸進過程としてあるだろう。(1978・1・19)

「現代と人間」の学習において、生徒と かみ合う授業。教材をいかにつくるか

都立府中工業高校 関根 荒正

1. はじめに

教員になりたての頃、生徒のレベルにあわせながら若干の肉づけはしたものの、「教科書で教える」方針のもと教科書にそった授業展開にしかなかった。昨年度あたりから、そうした網羅的な方法では本当に生徒に訴え、考えさせることにはならないのではないだろうかという疑問を感じ、教科書の枠にとらわれないテーマ選定とそれにあつた教材・資料づくりをしようと思がけている。それは次の理由による。(1)、教科書的発想にとらわれてやっていると、その総花的内容のためかえって現代社会の基本的認識にいたりにくい。(2)、教科書の状況認識が比較的長く、急激に変化している現在とのずれを感じる。(3)、教科書の問題提起は教訓的で、考えさせるより通り一遍の建前が多い。(4)、教科書では、生徒のいわば小状況的なところを考える視点に欠ける。現代社会は、生活状況からみると多様かつ複雑でとらえにくい。しかし、生徒の生活状況に根ざした実践をしない限り、我々の側の一方的な押しつけになる危険性を含む。とはいえ、生活状況の問題を通しながらその社会の本質についてとらえさせる視角をもたないと、小状況だけにふりまわされて物事の重要なことを失ってしまう。そのため、生徒の生活状況・問題意識をふまえながら、私の力量も考えて現代を考え、とらえさせるテーマを5つ決めた。そして、具体的な資料として、生徒の興味をひく内容を提示するため、最近の新聞、本などをコピーして配布した。以下、表題について概略を報告する。

2. 生徒の悩みについて 生徒の状況把握の一つとして、

生徒とかみ合うという場合、技術的に話しが通じる必要があるが、我々の出すものが、少しでも生徒のもっている意識・環境などと共通している

必要がある。そのため、我々の側としては、過去との比較で現在の生徒を
なげくより、少くとも生徒のおかれている状況・生徒のかかえている問題
を認識していないと充実した授業展開はむずかしい。その意味で、生徒の
状況、生の声を知っておく必要があるし、生徒のかかえている問題を引き
出しておく必要がある。あるクラスで生徒の悩みを出させたところ、次の
ような結果をえた。進路関係—26名、授業・成績・卒業—18名、物欲
—18名、自分の性格—11名、交友関係—9名、家庭・生活状況—7名、
男女交際—2名、その他—8名。これはあくまで1つの統計調査にすぎない
が、学校に関する悩みが多いことに気づく。進路、特に就職に關した不
安（倫社は3年に配当）、学業がつづくかどうか、特定の教師が気にいら
ないといったものがかなりある。又本校の特色として、母子・父子家庭の
多さ、平均2DKという家の広さがあげられ、それらに關連した家族・家
庭環境の問題も多い。その他、生徒は、現代社会からの影響で根深い問題
をかかえている。これに關した事柄を列挙すれば次のようになる。シラケ、
カッターなどの無気力現象、非行化—シンナー吸引、暴走族、集団抗争
など、差別—就職、学校、家庭内、民族、被差別部落、家庭状況—離婚、
貧困、公害、自殺、男女交際など。こうしたことが、学校内にあらわれ、
生徒に影響を与えているので、それらを何らかの形でかかえるものでなけ
れば、生徒と「かみ合う」ことはむずかしい。

3. 比較的充実してやれた資料について

私は、30数名の生徒を相手に授業している。生徒のもっている個別の
問題は多様であるが、多数の生徒を対象としている以上、共通性をもつも
のをとり上げる必要があると考えている。そのため、各々のテーマで、生
徒の多くの者がかかえている問題、或いは生徒と同世代のものもつ問題
を具体的な資料の形で示し考えさせることにした。そして、生徒各々が、
資料と自分自身を比較しながら、自分のかかえている問題の社会的因果関
係をつかみ、かつ自分にとって問題克服に何が一番必要なのか考えること

ろにもっていこうとした。次に、今年、充実してやれた授業での資料を上げる。

(1)、公害

スライド、「環境汚染と生体」(東京都公害教材スライド)

ねらい……四大公害裁判のような深刻な公害とは別に、我々の生活状況にあるいろいろな公害の事実をとらえさせ、自らが公害の被害者であると同時に加害者であることを理解させ、かつ公害克服に何が必要か考えさせる。(スライドの主な内容は、大気汚染・河川汚濁である。)

反省……自分の身のまわりにある公害の事実については、よく指摘できている。しかし、公害への対処の仕方が「あなたまかせ」であり、それを自らの生活変更などの運動でかえていく姿勢をうまく引き出せなかった。又水俣病のような大きな公害発生メカニズムについての理解は示されたように思うが、公害病の実態についてももっともっと暴露する必要があった。

(2)、大衆社会化状況における孤独からの逃避

資料……「シンナー・トルエンの吸引」(民衆性、「非行」より)

「宗教」～盃友会の中高生修行(毎日新聞、「宗教を現代に問う」(1巻)より)

ねらい……現代社会は中産階級的存在が増加して、表面的には非常に豊かな社会である。しかし、その反面、状況に流されていく傾向、社会的連帯の喪失現象、教育体制や複雑な組織の中でのいら立ちなど根の深い問題がある。そうした問題のうち、現代社会の孤独からの逃避について(後の反省でこの観点があいまいであることを感じたが)、生徒のもっているまた生徒と同世代のものがもつ具体的な問題を提示し、それとそれをうまくまとめている社会について考えさせる。

反省……生徒に出させた作文の感想をみると、資料で出した問題についての当否の意見が多く、社会との関連で充分とらえられていない。

2つ共、興味をひく題ではあるが、資料の問題が出てくる社会背景をもつ

とていねいに説明する必要があったように思う。

他に、職業高校生に対する就職差別の現実についても、今年は話しかけであったが「このどうにもならぬ現実」（朝日新聞・論壇、S50年8月20日）の内容を出した。これにも、生徒は関心をもって聞いてくれた。

4. おわりに

「新しい」資料は、教科書のように教訓的でなく、本当に考えさせるといって格好のものである。なぜなら、ジャーナリストックで興味をもつ者が多いから。「このような資料をもっと出して下さい」という要望も多く聞いたし、例年になく本の紹介をしてくれという者もあらわれた。しかし、各々の学習において課題として作文をかし自分の意見をかかせて区切りをつけたのだが、何らかの方法で（たとえば作文のフィードバックにもとづく討論など）あるべき方向を集団で探らせる作業が必要であったように思う。又、我々の側で、進むべき方向をどのようにして示してやれるのか、という点で、いつも私は力量不足を感じてならない。具体的な生活状況に関する資料を使っていると、ともすれば小状況のことばかりで、大状況のメカニズムの把握にいたらないという可能性を多分にもつ。常に小状況に関したものを資料として出す場合、それに関した大状況についていろいろな角度から解明できる用意が必要である。まだ、テーマ・資料の選定に不十分な点が多いので、常に自己教育をつんで、更に内容のあるものにしていきたい。

ゼミ「甘えの構造」

育英工専 木戸能史

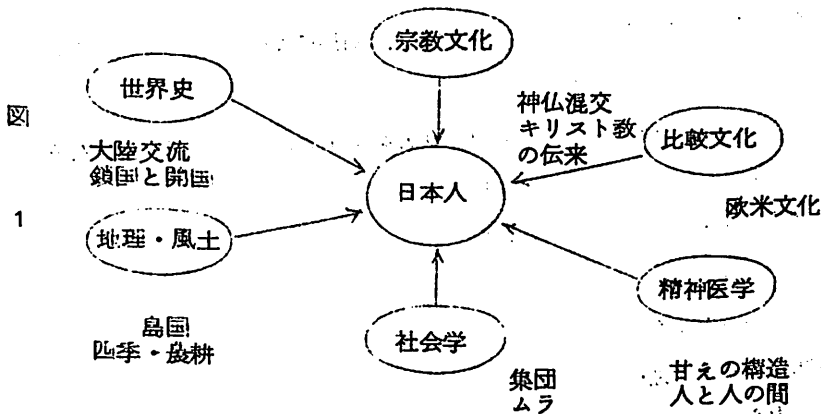
まえがき

このゼミは高専第四学年に配属されている倫理・哲学の講座の一つであり学生の程度は工業系職業校であるから専門的分野には優れていても一般教養面では大学生相当というわけではない。大体工業高校卒程度であろう。

以上のような環境を前提として本年度は土居健郎著の「甘えの構造」を前期のテキストとして採用した。その理由は星の教程ある日本人の中で名著といわれしかも比較的平易でもあるので適当と思えたからである。これを輪読しながら互いに自分達の考えを交え、発表しレポートとしてまとめる形式を採用した。

導入

日本人論における日本人の捉え方は1図に示す通り実に様々な角度から視ることができる。今日、実に多種多様の日本人論が提起されているのはこのようなそれぞれの視点からその立場を強調しつつ主張されるところに由来している。



理工系の学生にとっては一つのテーマをこの様に多様な視点から見ることは不得手であり、常に $y = f(x)$ のように x が定まれば y は一義的に定まるといような発想と思考を訓練されている彼らにとってはこのような導入は驚異でもある。

甘えの着想

テキストに入って最初に我々の日常生活においてあまりにも「甘え」が普遍的存在であることに気付かされる。

学生A¹⁾ 今まで「甘え」ということをこれ程意識したことはなかった。「甘え」は言語としても行動としても存在するが人間の本能的感情のようなものだから我々が意識しようとしまいと働いているものと思われる。²⁾

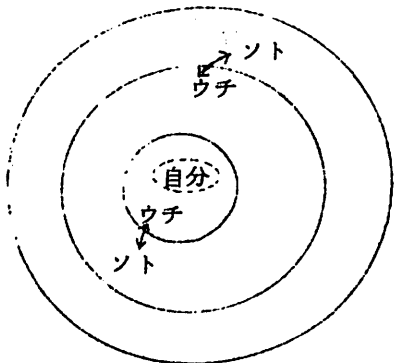
学生B²⁾ 「甘えの構造」とは日本人を特徴づけるのに最も適した言葉であると思う。³⁾

学生C³⁾ 私はこのテキストを通じて日本人の思想あるいは行動、社会、その他すべてに「甘え」が潜在している事を知った。⁴⁾

学生のレポートの抜粋であるが今までまったく見えなかったものを見出したという感じを持ち且つ強い共感を示している。しかし、この様に単純に本に述べられていることを受入れているのは日頃、電気工学の理論や現象を客観的事実として無批判に受入れ記憶する事を強要されているせいもある。一般に理工系学生は事物を批判的、複眼的に捉える事に苦手である。

義理と人情

日本の社会における対人関係のあり方を示すものとして「義理と人情」という鍵概念がある。土居は「甘え」を依存性 *dependance* という言葉に置換えて、人情は依存性を希求し、義理は人々を依存的関係に縛ることを意味することを述べている。それは自分を中心にしてウチとソトという同心円的



関係を成立させることになる。自分との間に境を必要としない人情の世界、それに対して義務を生じるソトの世界、またそれがウチに取込まれることによってさらにその外側がソトとなる。この問題でも学生Dは「欧米においてはウチは個人の内側でありそれ以外はすべて外」であるのに対して我国では家族全対がウチ（＝家）として一体となっていたり、親密な関係をもつ集団（クラブ、企業、暴力団 etc）の内側がウチとなったりする。ここでは日本人の対人関係のあり方に独特なものを認識させた様である。特に欧米の個人主義が彼らの幼い時からの個室主義的生育歴から来るものであり、日本人の一室共用主義の生活様式とは著しく異なることが理解できる。もちろんここで欧米が良く、我国が悪いというような価値の判断を求めている事を強調した。

罪と罰

比較文化の立場から学生Eはルース・ベネディクトの菊と刀から表1のようにまとめている。

表1 アメリカ 日本

行動規範	内面的	外面的
判断基準	良心	世間体
規範原理	神	他人
文化形態	罪の文化	恥の文化

この罪と恥の対比については土居も批判的な見解を述べているにも係らず重視されるのは罪と恥というような何に対して罪を意図しているのかという点がキーポイントとなる。欧米特に

キリスト教圏では唯一、絶対、普遍の神がその規範原理となっており、日本では多数、相対、特定の他人がそれとなるわけで、その事から他人（ウチ・ソトでいうソトの）が見ていないところでは平気でルール違反する傾向が説明できる。また罪と犯した後の対処の仕方にも極立って違いが認められる。欧米では罪に罰が付随し、この罰を受けてそれを償うことが必須条件となっているのに対し、我国では罪をどの程度恥じているかが重要であり、さらに世間（他人）に対してどう詫びるかが問題となる。時として、

罪の軽重よりは詫び方がどうかという点が重視されることになる。土居もこの点について「日本人の罪悪感」は自分の属する集団を裏切るという自覚において最も尖鋭に現われることが特徴である。従って日本人は裏切りが関係の断絶に導き易い義理的な関係の中で最も罪悪感を経験することになる。……このように日本人の罪悪感「は裏切りに出発して、謝罪に終わるという構造を極めて鮮明に示している」と述べている。

「気がすまない」と「甘え」

土居は日本人の勤勉さは働かずにはいられない囲りからの刺激、自分自身に対する規制から来るとしているが学生Fは次のように述べている。

学生F「日本人が勤勉だといっても戦前・戦中に生まれた人が勤勉で良く働くといわれているのであって現代の日本人の約半分を占める戦後生まれの我々はその通りであるとは私自身考えていない。しかも戦後派は遊び方も上手になり、仕事によってストレスを生じる傾向も少なくなっているのではないかと思う。例えば学生である我々の場合必死に勉強しなくても親や囲りがどうかしてくれるという甘えがあるからだと思う。近頃は過保護であるから子供が何か困難にあつて途方にくれるとすぐに親の力を期待する。そして自分自身で解決しようとする気持ちが少なくなっている。つまり周囲に対して「気がすまない」という感情をもたず、甘えるだけ甘えようという感情が強くなっている。それが現代の「甘え」だと思う。」

「甘え」と言語

土居の論旨の一つに「国語はその国民の魂に内在する全てを反映しておりそれ故にその国にとって最上の投影法なのである。」というのがあるが英語と日本語の比較からも次のような結論を導くことができる。

学生G「態度決定を必要とする質問に対して答えは英語においては「Yes, I do.」あるいは「No, I don't.」の二通りがよく用いられる。そこにはYesあるいはNo というはっきりした態度決定が明示され且つIという主語、即ちその主体が明らかにされている。一方日本語

111

ではそのような場合「まあ、そうですね」、「そういうことになりますか」、「そのように善処します」、「前向きに検討します」、「御期待に添いたい」etc いろいろな肯定、否定いずれにもとれる応答の仕方がなされ、しかも主語も明確ではない。これは常に相手と自分との関係を考慮してはつきりと態度を示すことを保留する傾向をもっていることを示す。しかし外国との約束などでは日本のこのようなあいまいな表現は後に大きな誤解と不信を生じることになる。

あとがき

紙数の都合もありゼミの経過を抜粋して述べることはこれで終わるが、大体の流れは御理解頂けると思う。ゼミはさらに対人恐怖など精神病理の立場からも考察、発表、検討を続けた。まとめとして彼らに原稿用紙5枚～10枚程度のレポートを提出させた。

日頃、このような問題になじんでいない学生を相手に悪戦苦闘した結果の一部が以上であり「日本人」という正体不明の対象をゼミで扱った事自体が誤りだったかも知れない。しかしこのゼミを通じて電気工学を専攻している彼らとその専攻する分野とまったく別の思考法の世界もあるのだという事を認識してもらえたら私としても幸いである。

視点設定の試み

駒大高校 市川 仏 乗

倫・社のもつ問題 倫・社は多くの問題をかかえている。かつて強い反対をおしきって、倫・社を科目として独立させた文部省が、こんどは、「むずかしい」という定かならぬ理由によって、大方への十分な説得性のないままに、倫・社を廃止しようとしたことなどにも、問題の複雑性が推測できる。問題は科目の編成といった操作だけで解けるものではない。ことは「世界一人間一自分」の総合的な認識に関わる事柄だからだ。たしかに「むずかしい」科目ではある。理由はいくつかあげられるだろうが、そのひとつとして、言われているように、学問的領域の異なるものによって構成されていることがある。青年期、現代社会、人生観・世界観などである。それらは、発達心理、臨床心理、文明論、社会学、哲学、宗教、倫理・社会科学などの混成物となっている。第二点は、たとえば数学などのばあい、教師の思想・信条・興味・関心などは、直接的な影響が授業に及ばないと原則的にはいえよう。しかし倫・社のばあいには、相当程度ひびくのではなからうか。また思案に限定させているとはいえ、「いかに生きるか」という実践的・具体的な課題をになった科目であるだけに問題の重みが相乗的に加わっている。現行指導要領では考え方の基本的主題として7つの考え方を例示しているが、これはただ列挙してあるのにすぎない。根拠が明確性を欠いたままで分類しても意味がない、ただそれだけのものだ。また、民主々義の精神、人間尊重、道徳教育などを科目の中心におくといっただけでも解決しないだろう。新指導要領の構想「現代社会」なる科目の新設によって、総合社会的性格をもたせ、平易化をはかっても解決しないだろう。問題のねもとは、そんなところにはないからだ。問題はもっと基本的なところにある。

視点の必要性 問題は視点の設定にかかわっている。教師・教材の多様性と異質性というアポリアを打開するためには、客観的で、たしかな根拠をもった視点の設定による以外にはないだろう。たとえば長さをはかる尺度としてメートルが、重さにはグラムがといった客観的で単一の基準がつかわれている。それらは現実の中に客観的な根拠をもっているし、対象と主体の如何に関係なく、一義的に決定される。それと同じように客観的・普遍的で単一の尺度が要請されるのだ。思想家の膨大な全集を読むコツは、問題意識をもつことだとか、勉強するには問題意識をもてといわれているのは、対象にきりこむときには、素手ではなく、道具の必要性があるということだろう。こうした視点は、教師が意識的にか無意識的にか、何らかの形でもっていて授業に生かしているはずである。もともと視点がない限り、扱えるはずはないのだから。たとえば、社会構造論の視点や、哲学の領域による視点とか、その他もろもろの視点がありうるだろう。しかしながら、それらのどれもが倫・社の全領域を十分にカバーしきれないている。

視点の要件 以上から視点の要件は、おおよそ次の条件をみたさなければならない。(1) 青年期、現代社会、思想をひとつの視点から扱えること。(2) 教師がそれぞれもつ思想・信条とは関係なく扱えること。(3) 価値中立的な操作概念であること。(4) 当然、生徒にも扱えること。(5) 教師や生徒の生活に根拠をもっていること。(6) 硬直した閉じた視点ではなく、教材をつぎつぎとくぐることによって、豊富になり、質的に高められていくような柔軟でひらかれたものであること。要約すれば、教師自身・生徒を含めた人間・世界・思想を全体としてはあくでき、価値剝奪的で純粹に操作的道具としての視点であること。

視点—行動の構造 社会をなしていとなむ人間の生活は、一日を単位としても、一生を単位としても、時間の流れにそった行動の連続である。具体的には、財の生産・交換・消費といった経済行動から、その労働とおしてのんびりとの交流、それらをつらねく頭脳活動を軸に多様な行動と

なっている。人びとの具体的・個別的な行動は、人びとの数だけ多くの特徴をもっておこなわれているが、その具体的・個別的な性格を捨象してあとに残る抽象的行動は、目標を実現すべく、状況の中で、行動している人間ということになるのか。こうして人間の行動は、目標 — 状況 (状況認識) — 実践の三要因から構成されていることが知られる。これをさしあたって行動の構造と規定するならば、この構造は個人レベルの日常の生活行動から、国家間レベルでの政治行動にまで共通にみられる構造である。家庭での家事へのあれこれの配慮から、専門的な研究活動にまで共通な構造である。こうした構造をもっている人間の行動を他の動物の行動から区別して、目的意識的と規定しているわけである。つぎに要因のそれぞれについて、ややくわしく検討してみよう。ある目標の実現をめざしている人にとっては、その目標は当面、彼にとっては、望ましいもの・よいもの・価値のあるものだ。ところで、目標の実現は空中楼阁というわけにはいかない。状況のなかで、状況にさからって実現されるものなのだから、当然、状況認識がおこなわれる。状況認識は、そこにあるもの (s e i n) についての認識なのだから、主観的要因その他によって、認識がゆがめられることがあつては客観的認識とはなりえないし、現実からのしっぺがえしを免れないだろう。マルクスは革命家だったから、彼の理論的仕事は評価できないといった偏見があるが、革命的情熱にもえていたからこそ、状況の認識もまた透徹していた、という関係を見おとしてはならない。歴史的現実に対する責任を負担しようとする評論家の態度からは、客観的な現実認識ですら生まれないことを知るべきだろう。s e i n についての認識というたのだが、認識は人間と対象との相互関係による産物である以上、s e i n そのものの認識は不可能である。超越者としてのイエスの現実認識とポリサイ人のもつ現実認識とは、当然質的な径庭があつた。認識的作業をとおして目標との関連で、状況のなかであることは利用してよいが、あれは避けなければならない。あるいは無視してよい、というような分析評価がなされ、

目標と状況との距離をうめるために、時間的順序による作業の手順などを
含めた計画がたてられる。これらの手続きを経たうえで、目標実現へ方向
づけられた行動開始ということになる。この行動を倫理的側面からみると
目標実現へ方向づけられた行動は、彼にとって善であり、障害になるよう
な行動は、彼にとっては悪として排除される。行動のこの局面をsollen
の場面といえるだろう。sein と sollen は、当然のことながら、目
標（価値）との関連でとらえられるべきことが明白だ。価値 — 状況 —
当為を行動という統一的関連を含む視点において、倫・社をとらえようと
するのが本稿のねらいである。

「いかに生きるか」を学習主題とする倫・社は、人間行動の¹⁰¹三要因の統
一として、とらえられることによって、全体が同じウエイトで、また矛盾
なく扱うことができる。それだけではなく、理論上・生活上の難点も解明
できる。たとえば、信仰をもつ人は、一般に政治的思考のパターンが保守
的であり、政治的進歩的な人が、多くは宗教を無視しようとする傾向があ
ることなどが、行動の構造をとおして検討することによって解明される。

この具体的検証は、別の機会による以外にないが、きわめて簡学な素描
を試みよう。青年期の問題としては、価値にウエイトがかかりすぎて、
行動が心情ラジカルに傾くといった扱い方が可能だろうし、現代社会では
教科書記載の現代社会論を書いた価値視座が問題となりうる。またいちい
ちの思想家については、彼らは、どこの価値を設定して、そこから現実を
どのように認識し、何を実現すべく生きたのか、といった比較思想論的方
向で扱うことができよう。

以上、今のところは、単なる作業可説でしかない。新年度から教材をひ
とつずつこなしていく過程で、豊かにしていきたいと期している次第であ
る。

第3分科会 「先哲の教え」

研究経過報告

第3分科会は最初、日本の思想（第3分科会）、東洋の思想（第4分科会）、西洋の思想（第5分科会）と分かれていたのであるが、集まった方が少数だったので、これら3分科会は合同することにした。幹事は十文字高の岡田春生先生、池袋商の池上裕先生と私の三人。

研究会場は、5回とも、神楽坂の東京都教育会館を利用。毎回集まった先生方は、10名位の少数であったが、常に全員が発言し、午後4時半に開会したのであるが、7時過ぎまで熱心に意見をたたかわせ、8時近くに及んだことがある。雰囲気はいたってなごやかで、終わりにはいつも、わずかなものをつまみながら、ビールで喉をうるおした。

第一分科会（52年7月5日）

出席者全員の先生方から、現在、倫社の授業をどのように教えているかを語っていただく。教科書全体を教えておられるのはO先生一人、外の先生方は、或る個所に重点をしぼって教えていられることがわかった。

A先生は、現代思想を中心に、B先生は、源流思想を中心に、C先生は西洋の思想を中心に、D先生は、各時代の思想家の中から、数人づつをえらんで教えておられた。

生徒に充分教材を理解させるためには、時間がかかるという方、教師が充分理解していない個所を省くという方など、相当思いきって教材を精選されている。

第二回分科会（52年9月6日）

本年の研究テーマを「花伝書」（世阿弥作）にしぼり、花伝書の研究をされている都立白鷺高の坂本清治先生に解説をお願いした。

最初に「花伝書」をよんだ感想を各人語り合い、世阿弥の説く花とは何か、真の花とは何かが問題になる。

坂本先生から、後期のような資料によって、「時分の花」(子供の時に示す花)、「当座の花」(青年期に示す架)に対比して「真の花」の探求の過程を聞く。その真の花は、老骨になっても残るまことの花なのだと、世阿弥の生涯の歴史を語りながら、「真の花」をといてくださった。

〔資料A〕

年来稽古における「花」

○「時分の花」=「真の花にあらず」

童形なれば何としたるも幽玄なり。声も立つ頃なり

——花めく年令(12, 3歳)

○「当座の花」=「真の花にあらず」

声も直り体も定まる時分(2つの果報)の、見る人の一旦の心の珍らしき花なり——初心(24, 5歳)

○「真の花」

この条々の究め悟りて堪能になれば、天下に許され、名望を得べし。——能の極め(34, 5歳)

もし究めずば、四十より能は下るべし。それ、のちの証掬なるべし。

※「究め悟りて堪能す」=過ぎし方をも覚え、また行く先の手立てをも覚る。」

「五十近くまで失せざらん花」とそ「まことの花にてはあるべけれ。」

◎「老木になる花」=真の花

物数は皆々失せて、善悪見所は少なくとも、花は残るべし。

老骨に残りし花(50有余)

↓
(物学条々)

「老人の物まね、この道の奥儀なり。能の位、やがては他目に現は

ることなれば、これ第一の大事なり。」

「花なくて面白き所あるまじ。」 「花ありて年寄と見ゆる
公案、習ふふし。」

「老木に花の咲かんがごとし。」

花伝第七別紙口伝

「能の花を知ること」方法

○まず、仮令、花の咲くを見て、万に花と壁へ始めし理を辨ふべし
……四季折節に咲くものなれば、その時を得て珍らしきゆえに翫
ふなり。

申樂も人の心に珍らしきと知る所、すなはち面白き心なり。
花と面白きと、珍らしきと、これ三つは同じ心なり。

何れの花か散らで残るべき、散るゆえによりて、咲く頃あ
れば珍らしきなり。

能も住する所なきを、まず花と知るべし。住せずして余の
風体に移れば、珍らしきなり。

花とを別にはなきものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍
らしき感を心得るが花なり。

「花は心、種は態」

○老人の花はありて年寄りと見ゆる口伝というは、まず失態、老ひ
たる風情をば心に懸けまじきなり。

ただ世の常に、いかにもいかにも花やかにすべし。まず、仮
令も、年寄りの心には、何事をも若くしたがるものなり。

第三回分科会（52年10月18日）

今回も、都立白鷗高の坂本先生から「花とわざ」について解説してい
ただく。

〔資料B〕

花伝書における思想「花」と「わざ」

1. 能は「花」によって存在する。（「花」—舞台における表現的効果）
2. 「花」を得るには、「能を知る」心の動きとその種としての「わざ」が肝要。

「花を知らんと思はば、まず 種を知るべし

花は心、種は熊なるべし。」（問答）

3. 「能を知る」とは次のことを体得すること。

①花は目新しさを契機とする「おもしろみ」。

演ずる時機の工夫。

意図を秘した演技—「秘すれば花なり。」（奥儀）

①花の持続には「場」に適應した工夫による「おもしろみ」

観客の好みに対応。

基本原理を守りながら状況に対応。

「なりゆき」に逆わない。

「老木に咲し花」「巖に咲く花」「花の酒れたる」

4. 「花」の維持

①自己の芸位を正しく知る→「時々の初心忘るべからず。」

①老境での「せぬ」工夫→「わざ」によらず「心」。

消極的→積極的意味。

①永遠の花のため子孫への芸の伝達。

5. 「わざ」の修得

①豊富な曲目の用意（作能）—知られた典拠から素朴、幽玄
（優秀さ）。基本は音曲。

①多種の芸の研修を尽す一縦（4.の①①と関連）

横（3.の①①と関連）

⑦「わざ」は写実でなく「それらしさ」—幽玄を失わぬこと。

「賤しげなる態を似すべからず。」

(物学条々)

⑧年令に応じた稽古 —「幽玄は生得のものか」。(問答条々)

「花」の変化

＜能には、「花」が、絶対なければならない＞

1. 初期の「花」—舞台での表現的効果としての「おもしろみ」
= 感覚的。

— 観客に与える「目新しさ」= 新鮮さ。

2. 中期の「花」— 感覚的なものより内面的なもの。

単なる「目新しさ」でなく幽玄。

「幽玄なるをもって上果とせり」

「わざ」でない「空白美」の尊重。

『花境』の「動十分心 動七分身」

「面白き位より上に心に覚えず 『あっ』という重あるべし。これ感なり。これは心にも覚えねば、面白しとだに思わぬ感なり。」

「妙所のあらん為手は、無上のその者なるべし。(妙は形なき姿、妙体なり)

妙所は関けたる位の安き所に入りふして なす所の態に少しもかかはらで、無心無風の位に至る風……」

「花」は無の境地。

第四回分科会(52年11月15日)

- テーマ
1. 花伝書の花についてどう理解したか。
 2. 花伝書から何を学びえたか。
 3. 花伝書を教材化する場合、どこをどう生徒に教えるか。

以上三点について語り合った。

都立葛飾商の浅香育弘先生から次のような発表があり、それを中心に語り合った。

1. 花伝書から何を学びえたか。—— 浅香先生より

花伝書は15世紀初頭、自ら能の演技者、演出家、作家、評論家である世阿弥によって書かれた。子々孫々への直伝、秘伝として、そして、それは演劇論、芸術論、芸道論としてすぐれたものであると同時に、教育論、人生論、求道の書としてもすぐれたものであると思う。

なかでも「年来稽古」等は、すぐれた生涯教育論であり、「問答条々」は、すぐれた教育方法論であると思う。われわれは教師として、身に引きくらべて、そこから多くの示唆をうける。

浅香先生は、なお花伝書の中から多くの個所を引用されて説明、また「花伝書でいう花について」も、説明された。

第五回分科会は1月10日、別記のように「先哲の思想」の精選試案を語り合った。

(世話人内田)

第3分科会「先哲の教え」精選試案

第1回の分科会において、出席者各人が今までどのように精選して教えてきたかを語り合ったのであるが、53年1月10日の第5回分科会において、次のような浅香育弘先生（葛飾商）の試案を踏台として、教材の精選化について語り合った。

<先哲の教え>の精選試案（浅香先生案）

<日本の思想>

①古代日本人のころ

（神話の神々、清明心、祭、罪悪観について）

②聖徳太子

（和を以て貴しと為す、共に是れ風夫、世間虚仮唯物是真）

③道元（親鸞、日蓮）の教え

（只管打坐、発心、慈悲の実践）

④藤樹（仁斎、徂徠、尊徳、梅岩、松蔭）の教え

（致良知（知行合一）、孝について）

⑤本居宣長

（まごころ、ものあわれについて）

⑥夏目漱石（福沢諭吉、内村鑑三）

（エゴイズムの追求、則天去私）

⑦世阿弥（兼好）

（「風姿花伝」における花とは、「年来稽古」の心構え）

<東洋の思想>

①仏陀の教え

（正覚、四諦、三法印、縁起、智慧、慈悲、自由、平等、実践）

②孔子の教え

(学、君子、知、仁、勇、芸術観、政治観)

③ 老子の教え

(道への帰順、無為自然、無欲、柔弱謙下)

<西洋の思想>

① ソクラテスの教え

(問答法、無知の知、幸福感、哲学とは、エロス、死について)

② キリスト

(神の愛、罪悪観、隣人愛、平等観、神の国、十字架の死)

③ ロック)ルソー

(自然に帰れ、社会契約論、教育論)

④ (カント)ゲーテ

(自然、人間、愛と美、学問、政治のあり方について)

⑤ J. S. ミル(ベンサム)

(功利主義、自由論、幸福論)

⑥ マルクス

(人間観、歴史観、新しい社会への展望)

⑦ サルトル

(無神論的実存主義、実存的な自由)

○ 日本の思想

① 古代日本人のころ

A. 日本人の思想の根源は、神話にあると思う。

① 清き心 ② 罪けがれ ③ 古代人の祭など扱ってみてはどうだろう。

B. 大抜詞を中心に日本人の心の原点を探ったらどうか。

C. 西洋の神と日本の神との区別をはっきりさせる必要があるのでは

ないか。日本では、上にあるものを、おかみとする。上(かみ)は、神に通じ、祖先崇拜が神信仰につながる。

広瀬武夫が軍神、菅原道実が天満天神になる。西洋の絶対神との違いをはっきりさせる必要がある。

D. 造物主が神という感覚は、日本人にはない。

A. 罪けがれの説明のとき、学生間で使われる言葉、「汚ねえ」やり方などという時の「汚ねえ」が、けがれ、罪であり、不道德と説明するとよくわかる。

日本人は、現実的、楽天的で、理屈をいわぬ、(言挙げせぬ)ことが、日本人の心であると説明したい。

② 聖徳太子

A. 十七条の憲法の第一条、和を以て貴としとなす、「和」を中心に考えたい。

○ 空海

D. 空海の話には、生徒が興味を示す。是非とりあげたい。

B. 私は、いろは歌—空海の作ではないが—を使って説明する。

③ 道元、親鸞、日蓮のうち一人

C. 道元では、学道篇を利用するとよい。只管打坐が中心。

B. 私は、授業の始めに三分間の正座をさせる。体得で行くべきだ。私のしゃべる説明は「かす」だと生徒に言っている。

C. 親鸞では、南無阿弥陀仏の絶対他力の信仰、その極地としての「悪人正機」の説。

B. 日蓮の強い意志力にひかれる。小企業主、商工業者に信者が多い。

○ 世阿弥

A. 花伝書の年来稽古の条をとりあげたい。日本人の美意識を「花」

として追求。

B. 体から業、業から心えと、芸道を追求する態度をこそ問題とすべきだ。

④藤樹、仁斎などより一人

B. 朱子学、陽明学の二つの流れとして説明したい。

⑤本居宣長

B. 古道、まごころ、素直な読み方も大切。

○安藤昌益

C. 明治以前の合理性の追求者として、安藤昌益などどうか。ほんとうの人間は武士ではなく、農民なのだと言き、自らも農民生活の実践に踏切った人間。

④夏目漱石、福沢諭吉、内村鑑三のうち一人

A. 漱石では「心」、「行人」などにあらわれた、エゴイズムの追求を、現代人の根本問題として、また、明暗、道草にあらわれた則天去私の生き方。

○石川琢木、宮沢賢治など

E. 郷土の思想家として扱ったらどうだろう。

F. 山崎正和の「不機嫌の時代」、評伝「私の個人主義」など。

E. 西田幾多郎の禅の哲学、無の哲学。

F. 勝海舟の「氷川清話」、中江兆民の「TN君の記」など。

E. 田中正造などとりあげたら。

映画「人間とは何か」の授業風景。宮城教育大の林武先生の授

業風景を見てから生徒と討論するとよい。(宮城教育委員会編)

○ 東洋の思想

① 仏陀の教え

F. 四諦説を中心に説明したらどうか。それから、八正道、諸法無我、解脱、涅槃、縁起説まで。

② 孔子の教え

E. 孔子の仁による徳知主義から孟子の仁義礼智へ。
孟子の性善説をいったら、荀子の性悪説にもふれたい。

③ 老子の教え

D. やはり、老子に対し荘子も教えたい。

道への帰順、無為自然の道、荘子の真心説など。

G. 東洋の思想でも、現代人を扱うべきだ。ガンジー、タゴール、孫文、毛沢東などどうだろう。

○ 西洋の思想

① ソクラテスの教え

A. ソクラテスでは、無知の知を中心に、プラトンのイデア論、エロス、哲人政治も取扱うべきだ。悪妻クサンチッペについてもふれたい。

② キリスト

C. アガペーを中心に、ユダヤ教の契約思想を出発点として扱ったら罪悪縛では、sinとcrimeの区別をはっきりさせねばならない。

③ ルソー

ルソーの自然に帰れの文化論を。

④ カント、ゲーテ

C. カントは、むずかしいので、人格主義を中心に取扱ったら。

ゲーテについては、「ゲーテの言葉」「ゲーテの生涯」。(関泰祐訳)
など参考になる。「ゲーテとの対話」「詩と真実」なども。

A. カントよりゲーテの方が生徒には理解しにくい。

⑤ J. S. ミル

W

E. 功利主義とベンサムと共に扱ったら。

⑥ マルクス

C. ヘーゲルの弁証法と関連して話したら。

マルクスは、現代の思想では必須のものだ。

C. 近代人の原型はペーコンではないか、コンピューターの基としての
暗号の発明、二頭を迫る現代人のような俗物。汚職で失脚などして
いる男。

⑦ サルトル

C. 実存主義者として扱うときは、キエルケゴールから話したい。彼の
有神論的実存主義から、サルトルの無神論的実存主義へ。ボーボワ
ールの第二の性など、女子には関心があるのではないか。

F. ハイデッカー、ヤスパーズは、避けた方がよい。

なお、シュバイツァーなどを扱ったらどうか。

(世話人 内田)

高校生と論語

(儒教は現代の青年にどのように受けとめられているか)

十文字高校 岡田 春生

はじめに

論語は四書として儒学を中心であり、今から60余年前、清朝が倒れるまで約2,000年にわたり中国の国教であった。日本でも江戸時代の約300年間の官学であり、その影響は大であった。

中国では辛亥革命以後、旧体制を攻撃する意味で魯迅等によって攻撃せられ、最近では中国の162であった杯びようを攻撃するために、非の打ちどころのない人という意味で批林批孔と孔子にからませて攻撃されている。

しかしながら、これらは皆一時的現象であって孔子や論語のもつ価値を少しでも損ずるものではない。人類の偉大な教師としての孔子と、日常生活に含蓄の多い教訓を盛った人生の書としての論語の価値は少しでも変わるものではないのである。

今回、夏休の宿題として出した古典の一節を読んで感想を書くという課題の中に、論語があり、その感想を読むと実に瑞々しく鮮明な感動があり感嘆させられる感想を高校2年生が書いているのである。学力も家庭も平均的な女高生である。

自分はそれを読んで、論語の古典的価値は少しも変っていないことを今更のように確認し、また現代青年のうける感激も昔と少しも変らぬことを知って、目のさめるような印象を受け、また大いに鼓舞されたのである。

以下はその記録である。

夏休の宿題 本と読むべき箇所 そのねない

1. ギリシ+思想 ソクラテスの弁明 饗宴(西欧の合理的考えの始まり)
2. 新約聖書 マタイ伝(3章~4章)(5~7章) 山上の垂訓)

(一神教の真髓 信仰と隣人愛)

3. 論語の一節 (日常生活の実践的教訓)

4. 般若心経、法華経普門品、寿量品の偈文の中どれか一つ

(大乘仏教の真髓、宇宙の真理)

5. 神道の大祓の祝詞(日本民族の発想の原点)

提出されたレポート(407名)

- | | | | |
|-----------|------|------|-----------------|
| 1. 論語の一節 | 243名 | 60% | 論語が最も多かったのは漢文の教 |
| 2. ギリシ+思想 | 101名 | 25% | 科書で習っていたためであろう。 |
| 3. マタイ伝 | 51名 | 13% | |
| 4. 般若心経 | 9名 | 2% | |
| 5. 大祓祝詞 | 3名 | 0.7% | |

感想の抜粋

1. 孔子の人となりについて

完璧の理想像、素晴らしい人間、本当にいたのか、偉大さをつくづく思う。頭がよいだけでなく心の豊かな人。きびしくて学問好き。ズバズバ言うがやさしい人。こんな人が今時いるだろうか。今こういう先生がいたらなあ。

彼の言ったことが全部実行できたら人間ではない。彼はきっと自分に言いかかせていたのだろう。そしてその時その時を必死で生きたのだろう。

2. 論語について

中国の古典であると共に日本の古典。紀元前の人間の言葉が現代にあてはまるのは不思議。2500年の時代のへだたりが感じられない。人間は本質的には変わっていないのだろう。時代が変わっても変わらずにあるものがここにある。とても新鮮だ。私たちに適用できる言葉だ。普遍的人間性に立脚した教。人間にとっていちばん大切な心がまえ。完全な人への努力をす

すめている。永年の人生経験から出た教えだろう。人間の原点に返った気がする。素直な心を感じる。

3. 学問について

ここでいう学とは学理だけでなく、すべてであり広い意味の学問であり人格を高めるもの。一生学ばなければならないものなのだ。

学問のきびしさ。心がまえを教えられた。少しでも取り入れたい。不勉強の私には頭の痛いことばかりである。もっと真剣になるべきだと思った。

学問は好むべきだが、私には一生わからないだろう。孔子の時代にはテレビもステレオもなかったので学問に熱中できたのだろう。今は忙しい。

4 読後感

したしみやすさとキリッとしたものがある。短い文章で意味が深い。心にガンとくる。全部考えさせられることばかりだ。私たちの足りないところを一々指摘され、生活や学習に対して考え方が変わった。日常生活のありふれたこと、密着したことばかりだ。今まで忘れていたことを取り返した気がする。私共は孔子の言は一つも実行できない。実行できなくても心だけは近づきたい。読んで本当によかった。読む前と人が変わった。この教を守り次の代へつたえるべきだ。

5. 感銘をうけた言葉（引用された頻度の多いものより）

1) 学ビテ時ニ之ヲ習フ。亦説シカラズヤ（学而） 引用 112名

孔子の一生の要約か。勉強はつき重ねた。復習してものにした時の満足感を思う。（以上生徒の感想）

2) 之を知ルヲ之ヲ知ルトナシ、知ラザルヲ知ラストナセ、是レ知ルナリト（為政） 引用 106名

3) 学ビテ思ハザレバ則チクラシ（為政） 引用 102名

4) 故キヲ淵メテ新シキヲ知レバ以テ師タルベシ（為政） 101名

（感想） 古典の中から真理の泉を新しく汲みとろう。

おばあちゃんの話もこれから聞こう。

古いものから現代を発見しよう。

倫理社会を学ぶのも同じ目的である。

レコードを聞いても昔のナツメロによさを感じる。

- 5) 一隅ヲ挙グルニ三隅ヲ以テ反サザレバ則チ後ビセザルナリ (述而)
引用 91名。(感想) 学問のきびしさを教えられた。頭が痛い。今までは先生に押しつけられて受身でやっていた。もっと自主的にやらなければならないと感じた。
- 6) 父ハ子ノ為ニ隣シ子ハ父ノ為ニ隣ス。直キコト其ノ中ニアリ (子路)
引用 86名(感想) 正直とは己の心に対してである。心に素直になること。人情の自然に従うことが大切だと思った。
- 7) 不勞ニシテ宮ミ且ツ賚キハ我ニ於テ浮雲ノ如シ (述而) 85名
- 8) 己ノ欲セザル所ハ人ニ施スコトナカレ (衛靈公) 73名
- 9) 哀公問フ、弟子タレカ学ヲ好ムトナス、孔子コタエテ曰ク、顔回トイフ者アリ (雍也) 71名
- 10) 子顔淵ニイテ曰ク、之ヲ用フレバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ戚ル、タダ我トナンジトノミ是有ルカト (述而) 67名

心・技・体 術から道へ 東洋の心

十文字高校 岡田春生

先ず若さや美声や優姿からくる花は、永つゞきしない。やがて散る時のある花で、「時分の花」といわれる。しかしその花も「けいこ」技術的修練によって永つゞきする。年令段階に応ずるけいこ（年来けいこ）が必要である。しかしこのけいこは心の深まりによる理解へと進まなければならぬ。その工夫を世阿弥は公案と呼んでいる。

「いづれの花が散らで舞るべき。散る故によりて、咲くころあれば珍しきなり。能も住する（同じ姿に止まる）所なきを、花と知るべし」と言つて、禪の極意である、住する所なき心、を説いている。

「されど花として別には（自性をもったものでは）なきものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり」とものべている。

前者は花の無常性を、後者は花の無対性を説き、その上で「咲く道理も散る道理も心のまま」として「誠の花」の境地に安住する。

これは言わば、仏教の三法印（諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜）にあたるとも言えよう。

花伝書のみならず、我国ではすべての芸術が、体一技一心という方向に進むようである。容姿、体、力から技へ、そして心へである。心とは結局人の道や安心立命の境を目指している。室町時代から発達した刀による殺傷の技術は剣道となった。茶を喫するという日常のことも深められて茶道となり、また生花をいけることも花道となった。

このように体や技から深めて心になり、宗教的境地に入るのが、東洋の心と言いたい。

「風姿花伝」に学ぶ

都立葛飾商業高校 浅香育弘

はじめに

日本の思想を学習するに当たって、どのような対象を教材として扱ったらいいかは、各自それぞれに工夫があることと思う。いままで私は①古代日本人のころ、②聖徳太子、③釈尊・道元・日蓮の中から1人、④本居宣長、⑤夏目漱石などを重視し、取扱ってきた。今年度都倫研の分科会で、世阿弥の「風姿花伝」を学習し、今後はぜひ取上げたいと思うようになった。

風姿花伝は、約550年間も一子相伝・師資相承の秘伝として扱われてきた。それは流派としての組織的・戦術的意義も勿論あったろう。しかしそれ以外にも、仏教における真言秘密の法なり、禅家の公案工夫・印可が示したように、一定の理解力に達しえない者にいくら法を説いても、言語道断・不可思議で、到底理解しえず、誤って伝わるだけだという配慮もあったのではないか。子々孫々に真の「花」を伝えんとしたのがこの書的主旨であろうと思う。

このような点にも吾々は教師として、現在の話込み主義的な教育のあり方を反省させられる。そして能楽者としての経験に裏打ちされて、子弟にその心得をのべたこの書を読み、吾々も理屈で理解しようとせず、自らの経験を反省し、そのあり方を求めていく工夫がなければと思う。

まだ全体を通じて読みこなしているとはいえず、部分しか読みえないが、いま当座感じとっている一部を紹介したい。

1. 「花伝」書に学ぶ「教師論」・「人間論」

風姿花伝は15世紀初頭、自ら能の演技者・作者・座主である世阿弥によって書かれた。それは演劇論・芸術論・芸道論としてすぐれたものであ

ると共に、教育論、人生論、求道書としてもすぐれたものであると思う。なかでも「年来稽古」「問答条々」等はすぐれた生涯教育論・教育方法論になっていると思うが、能者の心得をのべたこの書から、吾々は身にひきくらべて教師のあり方・人間のあり方を、以下に学びたい。

○我が位のほどをよくよく心得ぬれば、それ程の花は一期失せず

(岩波文庫17頁)

彼は年代に応じて「初心忘るべからず」(同101頁、「花鏡」に一層くわしい)と諭したが、年代毎の自分の実力を反省し、工夫向上に励めば、「花」はなくなるとした。中高年になると、兎角「花の失するをも知らず、本の名望ばかりを頼」み(同46頁)、慢心しがちである(同50頁)が、老いても「花なくば、面白き所あるまじ」(同27頁)であるから、「上手も下手も、互ひに人に尋」れる(同49頁)ことが必要である。その為

○得たる上手にて、工夫あらん為手ならば、また目利かずの眼にも面白しと見るように、能をすべし(同73頁)

生徒は年々質も考えも変っていく。教材も授業方法も常に工夫し改善ししかも生徒の翠線にふれるもの(花)を与えていくようにしないと、マンネリ化を避けえず、生徒はついてこない。生徒にだけ責任を転嫁することは、甘やかすことと同様に絶対にさげたい。

○能をせんほどの者の和才あらば、申樂を作らん事やすかるべし(44頁)

教師もまた、カリキュラムや教材の自主編成をする位の意気込みと努力が、当然あるべきだと思う。また

○芸能とは……寿福増長の基……極めきはめては、諸道悉く寿福延長ならん(75頁)

芸能も教育も、政治・経済も、その他この世の営み一切(諸道)はつまるところ、それぞれの生命を生き生きとさせ、生命を伸ばすための営みに他ならぬ。それは自行化他の菩薩道・仏道に通じる。教師を含め、現代人に欠けているのは生きることの根底にあるべきこの発心ではあるまいか。

2. 花伝でいう「花」とはなにか

花とは、まず彼自身が美しさをどう感じ、求め、表現しようとしたかの喩えではあるまいか。

○もしこの比まで失せざらん花こそ、誠の花にてはあるべけれ(20頁)

彼は若い頃の、一時的な美しさである「時分の花」は、咲いても、すぐ散っていく性質のものであるのに対し、稽古と工夫を極めた所に成立した花は44～5過ぎてもなくならないから、これこそ「誠の花」であるとし、そのような花を生涯求めたのだと思う。そして

○花は心、種は態(わざ)なるべし(59頁)

そのためには、能者の心の働きと、わざの両方が大切だとし、

○花は見る人の心に珍しきが花なり(94頁)

舞台でまた見る人が新鮮な感動や、面白さを感じる所に花が感じられるとした。しかしそれは能者の技術がすぐれているからだけではない。彼は心の働きが大切なことを強調して、

○花のしをれたらんこそ面白けれ(57頁)

と、外見的な美しさを起え、内面的な美しさ・心の中にとらえられる美しさを重んじたのである。彼は50を過ぎて、初心に譲り、自らは「せぬ」工夫をした父・観阿弥に(21～22頁)、技によらず心で演ずる芸、老木に残る花を見たのである。

○能も住する所なきを、先づ花と知るべし(92頁)

一つ所に止まり、執する心がなくなつてこそ、自在をえ、芸においてそのものになりきれる。従つて花といつても特別のものがあるわけではなくその時・その場に合った効果があるのが花だ(109頁)として、花に執すること自体も払つたのである。更に

○芸は衆人愛教をもて、一座建立の寿福(75頁)

とした彼は、貴人と庶民の両方に愛されることを願い花を求めた。吾々も一方で真実を求めつゝ、一方でわかりやすい授業を心掛けたい。

3. 生徒に何を伝えたいか(まとめ)

(1)世阿弥は能本を作るに当たって、上古古典に出てくる登場人物を多く題材とし、仏教特に中世文化全体の根拠となった禅思想の影響を強くうけた。やがて近世俳諧の古典として影響を与えていく。従って観世父子によって大成された能の脚本は、ある意味で日本人の美意識の結晶・象徴である。吾々は世阿弥を通し、日本の伝統的美意識なり、彼自身の美意識(花)がどのようなものであったか学習し、求めさせたい。

(2)彼の波乱にとんだ生涯から、学ぶべきことは多いが、特に彼が40前後にまとめた「花伝」は、彼(1363~1443)が22才で失った父・観阿弥(1333-1384)の教えを根底にし、自ら成長するに従って親の教えの意味や偉大さがわかってきて、忠実に祖述したものといえよう。(その点60前後に書かれた「花傳」その他が自らの経験を基とし、自らの考えを深めていったのと対比させられる。)

このように、伝統をまず忠実に学び、その上で独自性を発揮していくことが、日本の師弟間で伝統的にみられるが、観世父子にも典型的にみられる。現代では親子共に伝え、学ぶことを疎かにしているが、それは伝え・学ぶに足る価値あるものがないと思っているからだろうか。

(3)「年来稽古」はすぐれた生涯教育論になっていると思う。(特に17~8の項は今の高校生にもびったりの教えである)これらを読んで、年々「初心忘るべからず」の本来の意義を学ばせ、生涯学習への意欲をもたせたい。「人、人にあらず、知るをもて人とす」(110頁)は、道元の「人間本来道中=アリ」の教えに通じ、寿福延長の願いと共に、道を求め、道を知った人間になることが肝要であることを強調していると思う。

(4)日本の先哲を学習するねらいとして、①日本の思想的伝統(独自性)を問い、②それを検討し尊重していくことで、現代に生きる課題にとりくみ、③日本人の考えや生き方に反省と、自覚を深めていくこと等が考えられる。とにかく敬遠するのではなく、その価値を見直していきたい。

「風姿花伝」の花について

京橋高校 飯岡 祐保

能も知らないし、日本の中世の芸術についても知らないし、足利氏についても知らないし、ともかく、徹底して何も知らない私は、知らないものの強みで、知る権利があるとばかりに、ただ、素手で、花伝書を読むことに立ちむかった。第一回目は、ただ、ただ、圧倒されて、やられっぱなし、世阿弥の天才ぶりに、目をみはり、息もつけなかったありさま。しかし、第二回目あたりになると、やおら、気をとりなおし、頭をもたげはじめた。数々の疑問を拾い上げた。

会で、皆さんのお話から出たものも、ひっくるめて、書きとめてみる。

- 禅との関係は どうか？
- なぜ ほろんだか ? パトロンの将軍とのシットとアコガレ？
- 花伝書と他の（花鏡、至花道）との関係は？
- 一流のものわかる観賞眼は どうやって育ったのか？
- 貴族文化をうけついだのが室町ではないのか、江戸時代の権力者は何も育ててはいない。
- 申楽と田楽や雅楽、元曲、白拍子などとのつながりは？
- 物狂いや老人や女などを演ずるむずかしさと意義についてふれているのは、物狂いや老人、女が社会の中で弱者の典型であり、それを演じることで 人間の本質を出そうとしたのではないか？
- 仮面と真面とは どう違うか？ 化粧もしないで男が女を演ずる等はムリだから 仮面をつけたのか？

ともかく、次から次へ 疑問は つきない。そこで 能の入門書を読み、中世の精神史の書かれたものをみたり、間口を広げてみる。地図なしで、ヤブ知らずに踏みこんだようだ。それにしてもこんな昔によくもまあ

これほど徹底した人間観にもとづく芝居が出来たもの。だが、まてよ、ギリシヤには、ギリシヤ悲劇があった。別に不思議はないかも知れない。では、現代の日本に能にかわるあるいはそれをこえる新しい劇があるだろうか？あるとすれば、それは何か？ないとすれば、どうしたら、この伝統の上に新しいものがうみ出されるか？結局また疑問にぶつかってしまう。

結局のところ 疑問はさておいて 花を求めてみようと思った。年来稽古によれば、私たちは誰でも うまれながら花をもっていて、ほっておいてもみえてくる。だが、それは「ただ、時分の花なり。」それをみがいと「誠の花」となるという。若さのさかりには、それは何者にもまさって、人を引きつけるけれども、慢心しないで、けいこをつけみがいと、真実の花となるという。たいていの人には、この、時分の花を真実の花と とりちがえて、花を失ってしまう。これは、初心なのだ。いつも、自分の花の位を知っていれば、花は失わないけれども、位よりも上手だと思ったりすれば、もともともっていた花も失うのだと。

人は誰でも花をもつ。しかし、それを失わない為には、きびしいけいこがある。ことに若さの頂点で。

でも、今、若さの頂点の中で、きびしいけいこにあたることが行われているだろうか。私自身をふりかえる。今の子どもたちは、戦争も知らないし、がまんしてきたこともない、だから、せめて、きびしさにふれるには受験こそ最上という論をきいたことがある。

でも、あれは、合格すればそれでおしまいのものだ。きびしいけいこなどとはいえそうもない。何が 一体 きびしいけいこなのだろう。いうまでもなく毎日の生活の中に、それはあるはずなのだ。だが、それをみつけられないだけのことのような気がする。

たとえば、例の光化学スモッグ。大都市にいるかぎりには、さけられない。電光標示板までできたし、プールはさけよとか、自動車を出すなとか、う

るさく 対策らしいものが立てられ、勤務中にその被害にあった人が、労災を申請しても、受けつけてくれなかったときいたことがある。こんなに命のおびやかされそうな状況の中でも、平和で、無事で等と感じてしまう心、痛みのない心には、きびしいけいこは望めそうもない。

昔の仙人は、かすみを食って生きたそうだが、私たちには、もはや、かすみさえ、うかつに食へはしない。それでも、ふと、これでいいのだと思ってしまう。すると、世阿弥のいう花は、やがて失われるのだろう。

こわい。これは、本当に こわい毒物だ。

では 誠の花とは何なのか。

人の、三十四、五のころ盛りの極め。四十四、五のころになっても失しなわなない花。脇に花をもたせ、あまりこまかいことに心をくだかない。外目の花は、もうない。内面の花なのだ。しかし、これは、どんなに年をとっても残るのだ。それは、かえって外形がおとろえているだけに、きわ立つ。老木になっても、散らない花なのだ。若者ばんざいではなくて年寄りばんざいなのだ。

私は、今まで、自分の年とった姿など、あまり深く 心に思ったことはなかった。ただ、せめて、そのころには、「四十路にて死なんこそめやすかるべけれ」ではなくて、なにか、若いころよりは、ましな、なかみで身につけたいものだと 漠然と考えてはいた。でも、現実には きびしくてどうも そうはなりそうにもない。それは、流されているからなのだと思います。

その老いを「年寄りの心は何事をも若くしたがるものなり。一中略一心はゆけども、振舞いの叶はぬなり。」と見ぬく。それでも、おもしろいように見せる力が花なのだと。

とくに 現代は平均寿命が延びて、世阿弥のころより、20年は確実に人は長く生きる。老いは、現代の大問題だ、なのに、それは若さのさかりの中では、少しも問題にされてはいない。

私はよく 女子の生徒たちにいう。週間誌やテレビであおりたてているはなやかな女の生涯と現実とを、とりちがえなさんなど。今の、住宅、人口、平均賃金などすべての面から、子どもの数は、1〜3人におさえられ急激に、家族数がへっている。子どもが成人した 後の女の生涯を考えてみよう。それは今までの、あなたたちの生きてきた時間よりもはるかに長く、しかも、女の晩年の大半は、結婚年齢の差と平均寿命の差から、未亡人一ひとりよりのこされる一運命にあるのだと。そのとき、何をするのか、今から考えておいても、決しておそくはないと。

私は、今までは仕事をしていれば、すべての問題が解決するような錯覚にとらわれていた。でも、いく人かの第一線で活躍している先輩たちの話をきくうちに、そうではないんだと気がついた。ある人は、もう定年後にそなえて ありあまる時間をいかにつかうか考えていた。計画をたて、実行もしていた。これはすべて、仕事をもち、子供を育て、老人をみとり 社会活動もしてきた女の人たちの姿だった。

これに ひきかえ 男の晩年はどうなのだろう。よく おばあさんはまだしも、おじいさんは使いものにならないという。孫の子守りができるわけではなし、家事も急にはできない。妻に死なれた ひとりぐらしの男はどうしているのだろう。いつか、中村武志という人の 中村式下着せんたく法なるものをよんだことがある。下着をつけたまま入浴して それで、身体をゴシゴシやって、いっしょに洗うのだそうだ。いくら 何でも おばあさんは こうはしないだろう。働くことはできても生活できない晩年も大変だ。だから、着たり、食べたり、寝たりする人間は、自分のことは自分でできるようにしときなさいよ、自分が困まるんだからと男子の生徒たちにいう。

誠の花の咲く晩年は、いかに得られるか。若さだけがねうちなのではない。誠の花の咲く老いこそが、最上とは、いかにも、東洋らしい考え方だ。もし今の人としてあげるなら、市川房枝や柳兼子を思いうかべる私だ。

教育論としての風姿花伝

京橋高 飯 岡 祐 保

日本の古典にこんな合理性に根ざした教育論があったとは。一番最初に本書（岩波文庫本）を手にしたときの驚き。これではルソーも顔まけた。「エミール」を読んだときの引きこまれるような魅力を思い出す。それよりも、もっと簡潔に、しっかりと各年齢の人間をとらえている。年来稽古のくんだりで、そう思った。七歳がけいこの始め。かぞえどしとはいえ、今の就学年齢とさほどの差はない。「心のままにせさすべし。」「よき、あしきとは教ふべからず。」なぜなら、ムリじいをするとならば「やがて能は止まるなり。」今はやりの何でも教えこもう方式は人間をダメにしてしまう^{WV}という世阿弥の1400年（応永7年）の昔の警告の耳の痛さ。十二、三のところ（今の中学生か）だんだんと「物教をも教ふべし。」しかし「細かなる物まねなどは、せさすべからず。」けいこは「すべてすべてやすきなり」「大事にしてけいこすべし。」ムリにでもつめこんで高校進学にそなえさせられる今の中学生の大半のあわれさ。さて、私たちの領分である高校へと彼らは、すでに勉強嫌いとなってトコロテン式に送り込まれてくるが、十七、八よりと世阿弥はいう。「このころは、また、あまりの大事にて、けいこ多からず。」しかし「一期の堺ここなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、けいこあるべからず、ここに捨てれば、そのまま能は止まるべし。」なのだ。私たちがしなければならないことは、彼らに「一期の堺ここなり」という自覚をもたせることに違いない。なのに、手とり足とり何とか教えようおぼえさせようとムダ骨を折っているありさまなのだ。これでは月給ドロボーだ。むしろ、何もしない方がましというものだ。私は、このくんだりでつくづくと我身のふがいなさ、働きかけすぎ、やらせすぎをくやんだ。では、どうしたら、「一期の堺ここなり。」と彼らに自覚させられるのか。世阿弥は、何も書いていない。それは、あなたの力量なのですよという声が、かすかに耳もとで聞こえる気はするが。

1 この試みのねらい

無我というのは、ただ口で説明してわかる等という単純なものではない。かといってこれを避けては、仏教の考え方にもふれられない。どうしてものかと考えた末、以下の問題をプリントして出し、書かれた意見を集めてみて、それをまた生徒に返し（全部プリントした—主なもの—）これを読んで、一つのことにも、こんなに、さまざまな意見があるのだと、興味をもたせるようにした。

2 問題と意見

問題 次のことについてあなたの意見を書いて下さい。

「いつまでも存続するものはなく、同一にとどまるものもない。いづこにも確固たる点はない。自我は、無常な、たえず変わりゆく、あるものの錯覚である。このあるものが、あやまって、自我とみなされているにすぎない。」ヤスペース「仏陀と龍樹」理想社P29より。

意見

(イ) 自分で虚像をつくり、そのような生活を送ってゆくほどばかげたこととはない。いったい自分は、どこから来て、どこへ行くのだろうかという疑問に出会う。

(ロ) その瞬間を見て見ると、私は私である。しかし、長い目を通してみると、私は大人になり、そして年老いてゆく、やはり無常である。私の人生で同じ時間は二度ともつことはできない。今まで、私は人生は長い等と考えていたが、この無常を考えると、その時、その時は大切であり、人生の短さを感じないではいられない。

(ハ) しかし、シャカのいった天上天下唯我独尊ということとはもしかりである。これは、私という人間、一人一人は唯一であり、他には絶対にない個性体であるので、誰もが同じくらい尊い存在であり、一人一人が唯一の個性的価値をもっているということだと思ふ。ただ人間はそういう自分の

本来あるべき本当の「個性真理体」ともいうべき姿がわからなくなっているから、こういうことを考えないといけなくなったのではないだろうか。

(二) 人間が移りゆくものであるということはもちろんうなずけることであるが、錯覚であるということに納得できない。自我というものは人間の肉体が存在している限り、そこにまきらかに存在するものであると思う。

(三) 自我が錯覚であるとは、自分がなぜ生きてゆくのかよくわからなくなってくる。いつも、そのままのままでいたいとは思わないが、今、自分がここにいてという何かほしい。

(四) 変わってゆくからこそ新しくなってゆき、またなやむことができる。かわらないで一定であればなやむこともなく、日々平凡な世界だけにな^{vv}てしまう。だから生きてゆけるのかも知れない。

(五) ただ、今を悔いのないように生きぬいていくしかないと思う。私が次の瞬間生きているとは限らないから。

(六) 自我などは苦の原因になるのです。た方がよい。

(七) 人間がみんな悟りをひらいたらきもちわるいと思う。そうしたら、警察も国会もましてや国境もいらなくなるし、何のために生きているのかさえもわからなくなる。適当なところで自我とみなしているのなら、それはそれで人間らしくてよいと思う。

(八) 悟りきるまでが楽しいのではないか？自分はどんなことについても悟りきりたくないと思うので、今生きることに楽しみたい。

(九) 人は何度も危機にぶつかり、のり越えながら生きてゆく。その中で自分を見つめ、めざめてゆくのである。人生は常に無常のかたまりであるのかと思う。

(十) 「錯覚だ」といわれても 私にしてみれば現実である。いつまでも存続するものはなくても、何に対してもくいつくのが人間だと思うので、続く続かないは問題ではないと思う。

(十一) 人間は、姿、形、考えなどいつまでも同じということは絶対がない

と思う。自分という存在は死ぬまでかわらないが、まわりは絶えず変動している。つまり変動と停滞が同時に行われていることにもなる。

(カ) たしかに、現世は仏教のとくとおり、無常の仮の世かも知れない。しかし、自我のめざめとは、はたしてこれらを感じることにあるのだろうか。いや、そうではない。この世に今生きている我々は、今この時をどのように対処して生きてゆくのか、生きぬいていくかを見つけなければならぬくり返しの必要性の中にこそ存在するのである。

(コ) こんな考えをもっていると働く意欲などもなくなる。欲をもたない人間がこの世の中で生活できるか。この世の中に無欲な人間が本当にいるのか。欲には本能的な欲があるが、それまでも否定されるのか。

3 まとめ

質問してきた生徒には、仏教にも、その後、如来蔵とか、唯識とか考える派が出たことは伝えたが、混乱するといけなないので、授業の中ではあくまでも、「無我」で通した。わかりやすいたとえ話として、「ミリンダ王の問い」(東洋文庫)の 車のたとえと、ローソクのたとえを引いた。一晩中もえる ローソクの炎の、もえはじめ、真夜中ごろ、あけ方ごろの炎と一本のローソクとの関係をとって、連続はしているが、実体はないという説明は、生徒にとってわかりやすかったようだ。ただ、原始仏教の説明に、いきなり「ミリンダ王の問い」を使うのは、学問上の問題はあるだろうけれども、ギリシャ人とインド人の対話の中から、合理的な考え方になっている生徒には、くみとるものがあるのだろうと思ったまでだ。

実際のプリントには、生徒の実名を入れたので、これは誰の意見だ等と興味をもって、読むのを楽しんでいただろう。ただ、何も審けなかったのも、かなりいたので、それらの生徒には、考える上での参考としての役割もはたしたようだ。以後は、わりといろんなことを書いてくるようになった。それでもやはり、苦手なのは、考えることを審くことで、お手あげな者に、その力をつける課題が残されている。

世阿弥 「風姿花伝」を読んで

都立 本所高等学校 勝 田 泰 次

1. 「花」について

世阿弥の花伝書は、難解である。その花についての議論は、実に数限りなく多い。読書会でも、読んでいくうちに、花の概念の解釈に混乱を生じ、その定義は、はっきりしなかった。

別紙口伝冒頭の、「花とは何か。まず花を見て、なぜすべて花とたとえたかと考えよ。すべての花は四季それぞれの時期に咲くからめずらしく人の興味をひくのだ。能もめずらしいと感じる所がおもしろいのだ。」「花と面白きと、珍しきと、これ三つは同じ心なり。」にはじまって、主にめずらしさの要素を中心に述べている。すなわち花とは、能が観客にあたえる、観客をあっと言わせる効果、または観客の能に対する積極的かつ良い反応である。つまり、役者の成功は、見物人がその芸をおもしろく、賞すべきだと感じることだ。ということをや喩えているのである。世阿弥自身が言っているように、本当に能の花をきわめた役者の能であるならば、だれが見てもおもしろいと観ずるのと同じことだ。「物数を尽くし工夫を究はめて後、花の失せぬ所を知るべし。」は、まさに役者自身の不断の努力と、観客の心理を察致し、これを制御し利用する手段の工夫が要約されている。

「花とて別に無きものなり」と世阿弥は結論する。無技巧の技巧とでも言うのだろうか。しかもこの途はおのずから教育にも、人生にも通ずるだろう。学習者の煮つまりと、教えるものの発する火花の相関関係の中にだけ秘伝というものの秘技がある。この花伝書は、今日の変転きわまりない時世に真価を発揮する人生論・教育論でもある。

2. 花伝書から何を学びえたか。

この数年来、花伝書や世阿弥に関する研究がにわかに高まってきた。こ

のような機運の中で、ようやく勉強するようになった私は、観阿弥・世阿弥の生き方が強い衝撃をうけた。その出会いの遅きが、今さらながらくやまれてならない。あらためて、人間関係についての日本人の意識というもの、伝統的日本の芸能の意味も、広く深い層でとらえなおさねばならないこと。ここにも世界に誇るべき日本のモラリスト・文化的巨人がいること。人間のやることと考えることは今も昔も変わらないことを痛感した

3. 花伝書を教材とする場合、どこをどう教えたらいいか。

「年来稽古条々」は、すぐれた学問論・教育論として宣長の「うひ山ふみ」と比肩できる。その修業の方法は段階的に、「七才」から「五十有余」と七つのライフ・サイクルに分かって述べられている。

「うち任せて、心のままにせさすべし」——自然の持ち味をうまく伸ばすこと、手のこんだ教育には先ばしつてはいけないということである。塾に通わせていれば、他人に遅れはとらじという、あなたまかせのゆとりのなさにみる、昨今の乱塾ブームときわめて対照的である。

「時分の花と真の花」——「時分の花」というのは、自然が生んでくれた、青春の一時期の人間の美しさなのである。この時期の勉強法として基礎的なことを確実にやれ、と教えている。一時の花を初心と思い悟り、自分よりすぐれ、その道を会得した人に教えを乞うたりして、さらに一層の自己鍛錬を積んだ結果、生まれてくる美しさが「まことの花」である。まさに、わが一生の境目として、不断に精進しぬくほかにない。慢心せず、勉強にひたむきに没入していったこそ成果もあがる。あたりまえといえはあたりまえだが、人間の自己実現の段階についての世阿弥の考え方は、幼年・青少年の場合はゆるやかで、年とるほどきびしくなる。

「物学条々」総説——写実の限界、「問答条々」(四)——技術的の上手と心の上手の差、「別紙口伝」——「秘する花を知ること 秘すれば花なり、秘せずば花なるべからずとなり。」「花鏡」——(舞者為根声より目前心後、離見の見)・(批判之事より見・聞・心)、(奥の段より初心不可忘)

親

鸞——絶望故の歓喜

都立池袋商業高校 池上 裕

意識が増せば増すほど、それだけ絶望の度も強くなる（キルケゴール）
宗教がブームであるという。だが宗教一般があるわけではない。私達の
出会うのは各宗教の特色を捨象したところでのエッセンスではない。仏陀
に会う、イエスに会う、親鸞に会う中で、私達は、泣き、喜び、理
解しうるのである。私達一人一人の実存の関わり方によってこそ、出会え
るのは違う。私にとって誰の教えが根拠としてあるのか、私の体験、^W経験を通
して、我一流の関係を結べるのは誰なのか。そういう問題意識にたつて、
私が出会えた（それは独りよがりかもしれないが）人について語ることし
かできない。何故親鸞か、は、それだけだ。（「客観的」な知識は教えら
れないのだから）

☆何故信じるのか

一般に日本の宗教は「現世利益」にたつことが多い。信ずればこうい
いことがある。信じてたからこれですんだ。信じないとウマくいかない。
だが親鸞は言う、信じたからどうこういうことはない。しかし私は信ずる
しかない。それは私が信ずるからではなく、阿弥陀仏が信じさせてくだ
さったからだ。

「阿弥陀さまの不可思議きわまる願いにたすけられてきつと極楽往生
することができると信じて、念仏したいという気がわれらの心に芽ば
え始めるとき、そのときすぐに、かの阿弥陀仏は、この罪深いわれら
をあの輝かしき無限の光の中におさめとり、しっかりとわれらを離さ
ないのであります。その時以来、われらの心は信心の喜びでいっぱい
になり、われらはそこから無限の信仰の利益を受けるのであります」

(第一条)

「念仏は、これを唱える行者のためには、善でもなく行でもないの
あります。念仏は自分のはからいではなく、阿弥陀さまのお召しによ
ってさせられるのですから、行ではないというのです。念仏は自分の
はからいではなく、阿弥陀さまからさせられるのでありますから、善
ではないというわけです。すべてが阿弥陀さまのほうからの働きかけ
でされることであります」

(第八条)

だから、親鸞にとっては、念仏をした結果がどうであろうと関係ない。
ほんとうに何か功德のあることだと分ってするのでもない。地獄を一定す
みかとして生きるしかない人間にとっては、ただ信ずるしか他にすべはな
いのである。

「私は、ただ念仏すれば、阿弥陀さまにたすけられて必ず極楽往生が
できるという、あの法然聖人のおっしゃいましたお言葉を、ばか正直
に信じている以外に、別の理由は何もないのであります。念仏をすれ
ば本当に極楽浄土に生まれる種をよくということになるのでしょうか
それとも、それはほうそ偽りで、念仏すればかえって地獄におちるとい
う結果になるのでしょうか。残念ながらそういうことは私はとんと知
ってはいないのであります。たとえ法然聖人がおっしゃったことがで
たらめであり、私は法然聖人にだまされて念仏をしたために地獄にお
ちたとしてもちっとも後悔しません」

(第二条)

☆何故悪人正機なのか

仏教は、すでに仏陀の時代から、エリートの宗教であった。仏陀自身も
クシャトリヤの出であり、弟子達も、ほとんどが、クシャトリヤ階級であ
った。漢訳仏典に出てくる「善男子」とは、クラブッタ (Kulaputta)
即ち、貴族の子の謂である。その影を仏教はず一とひきずっていく。その
中で、仏教を大衆 (在家) に解放したのは、大乘仏教である。だが、大乘

11
仏教も、日本においては当初、天皇や貴族のもの（鎮護国家）でしかなく、大衆は除外されていたのである。寺院を造り、仏像をつくり、寺に寄進できる者のみが救われる二善人であるとされていたのである。農民、漁師などは、殺生する、救われない存在であったのである。だが、そのようなものこそ救われるのだ、親鸞はそう主張する。

「全く悪は往生の障害になるというわけではありません。戒律を保つことよってのみ本願を信ずることができるならば、われわれはどうして生死を離れることができますでしょうか。海や川に網を引き、釣りをして魚をとって世を渡る人々も、野や山に獣を追い、鳥を殺して命をつなく人々も、商いをしたり田畑を耕やして生活をしている人々もみんな同じ人間であります」

（第十三条）

戒律をやぶらざるをえない人々、悪を犯さざるをえない人々、そういう人々をきりすてて、そこにはどんな宗教が残るといふのか。

「作りおく罪が須弥ほどあるならば、エンマの帳につけどころなし」
一休もまた、罪を犯さざるをえない人々に涙をながしたのであった。戒律をやぶり、悪をなし、罪を犯す人間の復権を。

「善人ですら極楽往生へ行くことができる、まして悪人は、極楽浄土へ行くのは当然ではないか、私はそう思います……みずから善を励み、自分のつくった善によって極楽往生しようとする人は、おのれの善にほこって、阿弥陀さまにひたすらおすがりしようとする心が欠けていますので、阿弥陀さまの救済の本来の対象ではないのであります。ところが、われらのごとき心の中にさまざまなどす黒い欲望をいっぱい持つ者が、どういふ行によってもこの苦惱の世界を逃れることができないのを阿弥陀さまはあわれんで、あの不可思議な願いを起こされたわけですから、もともと阿弥陀さまの願いを起されるほんとうの意思は、この悪人を成仏させようとするためでありましょうから、自分の中に何らの善も見出さない、ひたすら他力をおたのみするわれ

らのごとき悪人のほうが、かえってこの救済にあずかるのに最もふさわしい人間なのであります。だから、善人ですら極楽へ行くことができる、まして悪人は極楽へ行くのは当然ではないかと、なくなった法然聖人が仰せられたのも、深い理由があつてのことです。

(第三条)

梅原猛 校注、現代語訳「歎異抄」(聯談社文庫)より引用

私が親鸞に出会えたとしても、生徒が出会えるわけではない。私の思いによって、親鸞を、授業の中で学んだとしても、欲求が断ちきられているところでは、知識としても定着しないであろう。親鸞のものの考え方は、生徒にとっては、まわりくどいという反応でしかなかったように思う。

ただ私にとって、それこそ親鸞しかないのであるから、しつこくやるしかないであろう。

現在、東本願寺では、管長と総長派との間の紛争がどろ沼の中で続いている。「親鸞は弟子一人ももたずさふらう」という精神とは全く無縁な宗派独占(私物化)を狙う管長側に非があることは自明である。そしてこのような真宗の体質こそ、被差別部落の成立に手を貸し、部落差別を温存してきたことと無関係ではない。

「宗教はアヘンである」(マルクス)という批判を押えつつ、宗教が、社会や時代と無縁ではありえないことを認識した上で——これは肝要なことだ——親鸞に出会えるきっかけになればいいと思う。

(注)商業高校では古典を二年でやるので、授業(倫社は二年)では現代語訳でやっているため、その方を引用した。

人は努力する限り迷う—倫理社会—私の反省と意見

東京都立駒場高校 細谷 斉

1. Es irrt der Mensch; solange er strebt<人間は努力する限り迷うものだ>どなたも御存知の通り、「フアウスト」の冒頭で主がメフイストに向かつて言う科白の一つである。高校から学生時代にかけて愛読した「三太郎の日記」の扇にこの文章を見つけて以来、私の意識の奥底に刻みこまれ、私の人生観の一部となった。倫理・社会を担当してすでに十年を越えた現在でも、この言葉はいろいろな場合に思い返され、私を支え励ましてくれる。私の貧しく力弱い倫社の授業ではあるが、努力する精神だけは保ち続け、生徒にもそれを理解させ置ませたいと思っている。毎年倫理社会を担当し、様々な悩みや迷いを感じ考えさせられているわけであるが、その中から二、三の点について述べさせて頂くことにする。

WV

2. ある生徒からの手紙 倫理社会の教師であるということが、生徒にとっていかなる意味を持つのかはわからないし、特別の意味など何も無いのとも思うが、また反面、倫社の教師であるが故に、生徒とある交わりを持つことが出来ることもある。時々、在校生や卒業生から予期せぬ手紙などをもらうことがある。次に紹介するのは昨年の夏ある浪人中の教え児からもらった便りの一部である。「二週間ほど前、思いがけなくも駒場高校の三年生から電話がありました。彼女はクラブの後輩でした。彼女曰く「私は五月の初め頃渋谷の駅を歩いていたら、女の人が歩みより聖書についてのアンケートをとられたのですけれど、それがきっかけで、彼女達の信じている統一原理とかいうものを教えてもらったのです。それで今度大きな会を開くのですけれども先輩なら、こういうものに興味があるのではないかとお電話しました」私は彼女もひっかかったのか、と思いました。これは良い表現ではありませんが、そう思わずにはいられなかったのです。統一原理——時新聞でさかんに批判され、街頭でのおしつけ

がましい勧誘も姿を消したかと思われましたが、最近再び高校生、地方から出てきた大学生を中心に狙って、あの彼ら特有の巧みな手法で、仲間引き入れようとしているようです。私が駒場高校在学中にも、朝、よく彼らは正門前でピラを配っていたものでした。それも東大学舎で楽しい映画を見せるがらいらっしゃいというような内容のもので、けっして統一原理研究会というようなことは明らかにしません。しかし、たとえ、それをはっきり書いたところで、四無主義等といわれている高校生には統一原理協会なるものが、いかなる組織で何をしているのか、ということは皆目わからないのではないかと思います。しかし幸いにも、今の高校生は受験のことで頭がいっぱいで宗教だのにこだわってられないのでしょうか、あのようなピラをもらっても、見ようともせず、捨てる人がほとんどのため、電話をくれた彼女のように興味を持たない限り、ひっかかる人は少ないのではないかと思います。とにかく彼女は話しにすっかりのせられ、「統一原理」に魅せられたようでした。そして、あの渋谷でのことがあった日以来、毎日のように、彼らの集団宿舍へ通って話を聞いているとのことでした。彼女は受験勉強に疑問を感じ、何かもっと本当のもの、本当にささえるものを求めていたといいます。しかし、駒場高校には、人生だとか、哲学だとかを一緒にあって語る友が見い出せないと言いました。そこへいくと、統一原理教会の宿舍に集う若者たちとは、大変意見が合い、まさに理想の友といった気がしたといいます。各大学で、特に東大を中心として「統一原理」に魅せられる大学生が増え、その伝道が広がっているという一つの理由には、今の若者があの彼女のように本当に支えになる思想、信じあえる友を求めているからだだと思います。以下略」 長くなつて恐縮だが、最初一読した時、私は少なからぬ衝撃を受けた。先生（細谷）の倫社の授業が駄目だから彼女は統一原理に走ったのだ、という詰問を投げかけてきたのではないかと思ったのである。それは確かにそうであろう。彼女への返事に私が何と書いたかは別として、この手紙を読み、私は改めて、

自分の倫社教育が如何にあればよいかという根本問題を再三再四させられたのである。この手紙の主や原理へ走った子を特殊な生徒と見ることは出来ないし、自己の人生を考えている点において素晴らしいと言える。それなら私は「倫社」で何をどう教え励ませばよいのか、考えずにはいられないのである。

3. 遠山 啓氏の「術」・「学」・「観」

この手紙の問題が脳裏を去らずにいた私にとって、次の各氏の指摘は大変参考になった。昨年12月号の「展望」誌上で、数学者の遠山啓氏は「大学論議への異見—教育と競争原理の絶縁を—」という文をものさされている。その中で次のように述べられている。「我流の用語だが、私は教育内容を大まかに分類するために、術、学、観という三つの言葉を使うことにしている。(中略)三番目の観とは人生観・世界観というときの観であり、この観の教育に至っては今日の学校では皆無であるといってよい。かつての修身教育はある意味での観の教育であったが、それは生徒たち自身が自力で自己の観を形成することをいささかも許さない、上からの強引な注入教育であった。だがここで言う観の教育とは修身とは正反対に観の自己形成のことである。高校生位の年代になると、人間は内心の要求として観を求めはじめるのであるが、今の高校は生徒たちをわざとそういうものから遠ざけようとしている。たとえば生徒がぼくはなんのために勉強しなければならないのか、と質問しても、大学受験のためだとしか答えることができないのが偽りのない実状であろう。そのために、ぼう大な知識を暗記してはいるが、観はもっていない、「有学無観」の大学生が大量につくり出されている。大学生のあいだではほとんど原始宗教に等しいような幼稚な宗教が爆発的な流行を見せたりするのは、そのことを証拠立てているように思われる」と。先程紹介した手紙と共通する内容ではないかと思う。「有学無観」は高校生では更にひどくなっているし、「有学」とも言えないであろう。「無学無観」が真実の状況ではないのか。このようなことを考

える時、思い出されるのがフランスのリセーの「哲学教育」である。

4. リセーの「公民の倫理」に習いたい

自分の考えがまとまらぬままに書くのは勝手すぎるが、倫理社会の問題点やあるべき方向を考える時、現在私が興味と関心を引きつけられているものにリセーの「哲学(=公民)教育」がある。岩波書店から発行されている小冊子「図書」の昨年10月号に、串田孫一氏が「子供の風景」という素晴らしい文章を書いておられる。この文を読み踏まえて、哲学者の中村雄二郎氏が、「子供の風景・周辺」という文を寄稿されている。(毎日新聞夕刊10月25日)中村氏は、先ず串田氏の子供を見る目の確かさに讃辞と共感を示された後で、子供のしつけあるいは訓育について述べられ、この点について日本は非常に欠けているが、最近翻訳が出たフランスのリセー前期(日本での中学)の道徳・公民の教科書(ポール・フルキエ「公民の倫理」入門哲学講義、久重忠夫訳筑摩書房)は市民社会の伝統をふまえたものとして、参考になると指摘されている。私も求めて一読したが、内容の体系性・濃度・具体性などにおいて、倫理や公民の教科書に数等まさると感じた。細かく紹介できないのは残念だが例えば次のような一節にもその具体性をみることができる。「人の中で成功するためには、なによりも知識を得なければならないと思われるだろう。実際、人生の入口でのクラス分は、受験者の知識・知育を判断する試験によって行われる。しかし、人生においては、人を分類するのは知識であるよりは、人の倫理的価値、職業上の良心、人づき合いのよさ、礼儀正しき等の訓育による。」(同書P11)と。これなども私達の社会にとってもう耳を貸す必要のないことばであろうか。この本では、個人としての生き方、学校での生活、職業生活への準備、家庭生活、郷土に対する考え方、国家や人類についての考え方といった具合に、人生のほとんどすべての場面が扱われており、しかもそれが学校での勉強の仕方、友人とのつき合い方、食事のときの礼儀作法等々の実に具体的な内容に立ち入りながら、統一的な視点からとらえ

られている。(中村氏)と評価されている。今後の倫社や公民教育にはこのような構成や視点を真剣に探求すべきではないかと思う。

5. 真実の人間教育一北の国の基督教独立学園高校を訪ねて

さらにもうひとつ、現在の私の胸から去らない強烈な印象を語りたい。昨年11の秋、私は同僚と二人で、山形県の小国にある「基督教独立学園高校」を参観し、校長の鈴木弼美先生に面会する機会に恵まれた。そして大きな感銘を得た。真実の人間教育、人格教育、全人教育の徹底的な実践を見る思いがしたのである。以下同校の紹介の意味をこめて書いてみたい。

「基督教独立学園高校」は、無教会主義のキリスト者内村鑑三の晩年の直弟子の一人である鈴木弼美氏が昭和初期に一人でつくった学校である。生徒総数8名ほどの男女共学の全寮制の普通高校で、内村鑑三がやろうとして実現できなかった、学校を信仰の母体とする試みを続けておられるのである。師資相承の美しい一粒の種は、現在、規模は小さいが、見事な花を開いている。参観しお話しを伺って、私は自分の「倫理社会」教育の貧しさを思い知らされる感で一杯だった。勿論比較するのも愚かであるのは承知しているが、本物の倫理教育、人格教育とはこのようなものかと目から鱗が落ちる思いがしたのである。鈴木校長は述べられた。「内村先生はキリスト教と真理とどちらをとるかといえば真理をとる、とっておられた。真理なるがゆえに信ずるのである。ここに内村先生が純粹な信仰を最後まで守り通した秘訣がある。」「教育という英語 Education 独逸語 Erziehung であるが、共に「引き出す」という意味である。人間は誰でもその中に全世界ともかけがえのないもの、人格とか靈魂というべきものを持っている。それを引き出し、発展させるのが教育である。人間形成とはこのことである。学問を教えることによって教育をする。知育のみして徳育をしないから人間が悪くなって困る、とよく人は言うが、ほんとの学問を教えることが最良の徳育である。人は学問によって、人生は感ごまかしではやっていけないものだということを、身を以て悟る。ここに学問の

価値がある。学問の価値はその応用にあるのではない。学問は人間を真理を愛するようにし、真実にするから貴いのである。道徳教育といっていくら徳目を並べて教えても、道徳が行われるようにはならない。学問が人間を真実にする。それ故に学問を教えて教育をするのである」(小冊子「学問・教育・信仰」参照) どこまでも、真実の学問を寄ることが教育であるとおっしゃられた。わかりきったことかもしれないが、私達の現実の学校教育はあまりにも多くの、小手先の現象に引きづられているのが実際ではないか。勉強する目的といっても受験しか考えられない生徒のことは先にみた通りであるが、これは何もそのようにしか考えられない生徒の問題ではなく、教えている私達の方にこそ責はある。この学園では入試のための準備の勉強は一切やらないのだそうで、従って所謂有名校で試験が難しい大学へは入れないが、逆に入ってやらないのだそうである。生徒一人一人が自分なりの本物の勉強を身につけることが何より大事なのである。鈴木校長は、自ら英語・聖書・国語・読書を担当され指導に当たっておられるそうで、「とにかく、本が読めなくちゃだめだと読書の時間を設けております。本が読めるようになれば、教育はほとんど完成したといってもいいくらい」とおっしゃられた。まさに、「我が意を得た」御言葉であった。一年生には必ず内村鑑三の「後世への最大遺物」を、三年生には「ソクラテスの弁明」を読ませているとのことであり、私も毎年「弁明」を扱っており、この点で教材の「証明」を得たように思った。今日の日本にこのような真摯な学校があるとは私にとっては少なからぬ驚きであった。(紙面の制約上これにて紹介を終える。独立学園と鈴木校長については、稲垣真美著「内村鑑三の末裔たち」朝日選書、朝日新聞社に紹介がある。) 校舎正面に刻まれていた「神を恐るるは学問の始め」という言葉が印象的であった。(おわりに) 紀要用の研究レポートでなく作文で申し訳けないが、現在私が自らの倫社教育について考えていることの一端を率直に申し述べた次第である。

ギリシア悲劇における倫理思想 —『オイディプス王』を中心にして—

都立江戸川高等学校 泉谷まさ

1. 主題設定の理由とねらい

ギリシア思想の学習は、倫理社会の授業では一般にソクラテス、プラトン、アリストテレスの思想を中心に展開されている。たしかに「人間はいかに生きるべきか」、換言すれば「単に生きるのではなく、より善く生きる」(『クリトン』)べきだという倫理の問題は、ソクラテスによって初めて自覚的にとりあげられ、ここに倫理学が成立するに至った。ソクラテスは何ひとつ著作を残していないが、その教説と生き方により多大な影響を残した。しかしながら、倫理学はソクラテスの登場によって突然に生み出されたのではない。ギリシア人はポリスを形成し生活する中で倫理に対する自覚を徐々に深めていたのである。そのような社会背景をふまえてソクラテスの思想は形成されたといっても過言ではなからう。そのことは彼が生涯モットーとした「汝自身を知れ」という言葉が彼自身の造語ではなくデルフ¹の神託にかかげられたものであったということからも理解できよう。私たちはホメロス、ヘシオドス、七賢人、自然哲学者等の思想の中にギリシア人の倫理の自覚過程を見ることができるが、とりわけギリシア悲劇には「人間とは何か、人間はいかに生きるべきか」という倫理学の中心課題がとりあげられ、しかもそれが実に見事に深く掘り下げられているのを見出すことができる。それゆえギリシア悲劇はギリシア人の倫理思想を理解する上できわめて重要であるといえよう。ソクラテスが「汝自身を知れ」を「無知の知」と把握し、人間の知識の有限性と不完全さを自覚した上で「正しく生きる」ことを主張し、みずから実践したのも、あるいは対話を通して真の知識を想起させ、魂の浄化をはかろうとした方法も実は悲劇の中でくりかえし展開された主張や方法を背景としているからで

ある。私はソクラテスの思想を学習する前に、ギリシアのポリスについて説明し、その生活に一体化していた悲劇を取り上げて、当時の人々がどのような舞台に涙し、共感の拍手を送ったかを理解させ、次にギリシア悲劇の人間観のもつ現代的意義を考えさせたいと思った。そこでギリシア悲劇の中で最大の傑作といわれるソポクレスの『オイディプス王』を取り上げることとした。

2. ギリシア悲劇について

ギリシア悲劇(トラゴーディア)はディオニュソス神の祭礼から始まったといわれる。それはもともと酒と農耕の神ディオニュソスが苦悶と破滅により死の国ハデスに降った受難から再び生命を得て復活するよう祈願する呪術的儀式であつたらしい。人々は農耕の豊かな実りを祈願し、春の到来とともによみがえる万物の生命を祝ってディオニュソスの事跡や神威を讃えながら歌い踊った。そのうち舞唱団(コロス)の歌舞の間に身ぶりや物真似によって神の所行を再現するものが加えられ、やがて台詞のやりとりをする人(俳優)が仮面をかぶって登場し、舞唱団と共に舞台を進行させるという劇(ドラマ)としての形が出来上っていったらしい。こうしてギリシア悲劇は紀元前6世紀の半ば、アテナイにおいてディオニュソス神の祭礼の一催物として上演されるに至った。それ以後改良が加えられ、紀元前5世紀にはいわゆる三大悲劇作家、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスが輩出し、悲劇はアテナイ民主政の展開と共にその完成をみた。その題材は神話や英雄伝説に多く求められた。市民たちは悲劇を行っているうちに舞台と一体化し、自分自身はその登場人物になったような気分ひきこまれ、人間をとりまく運命の不可思議やその転変に翻弄される人間のあり方に気づき、観劇のあとカタルシス(浄化)を体験したといわれる。ディオニュソス神の祭礼は国家の行事であり、これに参加することは市民の義務であつたから、ギリシア悲劇はアテナイ市民の倫理についての自觉を深め、社会的、政治的問題への関心を深めるのに大きな影響を与えた。

こうして観劇は世論の形成、市民教育の場でもあった。

3. 『オイディプス王』—— あらすじ ——

舞台は王国の人々を苦しめる疫病や早ばつに心を痛めるテーバイの王オイディプスと神官との対話で始まる。疫病や天災の原因は先王ライオスの殺害者が罰せられずにいるけがれであるとの神託を受け、オイディプスは実は自分がその殺害者であるとは知らずに直ちにその探索に乗り出す。王は盲目の予言者ティレシアスを召して殺害者を教えることを乞うが、すべてを知る予言者は語らない。オイディプスは怒って予言者を罵倒する。あまりの無礼に憤った予言者は「目あきにして盲であるとはあなたのこと」といい、オイディプスこそその人だと叫ぶ。この言葉にオイディプスは驚き、かつ陰謀だとして怒り狂う。妃イオカステはオイディプスの怒りを静めるためにライオスの死の状況や、彼がこどもの手にかかって死ぬという神託をうけたこと、こどもは生まれてすぐに捨てられたこと等を語る。こうして劇は進行し、オイディプスは自らの呪われた運命を自分の手で暴くことになる。オイディプスは「実父を殺し実母と結婚する」運命の下にテーバイ王ライオスと王妃イオカステの子として生まれる。生まれてはならない存在であった彼は生後すぐに捨てられ死すべきものとされたが拾われやがてコリント王の子として成長した。青年となったある日、「実父を殺し、実母と結婚する」という不吉な神託を聞き、この恐じい運命を回避するため実父母と信ずるコリント王夫妻の下を離れ流浪の旅に出る。そして何も知らずテーバイに至る。その途上、彼は自衛上傲慢な老人（実父ライオス）の主従を殺す。そのすぐれた知性と勇気により、テーバイを苦しめていたスフィンクスの謎をとき町を救ったオイディプスは、殺されたライオスに代って王となり未亡人となっていた王妃イオカステ（実母）と結婚し、こどもまでもうけたのであった。オイディプスはこの事実を知らぬままライオス殺しの犯人を探索しつづけ、ついにいまわしい自己の運命を知る。イオカステは縊首し、オイディプスは自らの手で両目を刺す。盲目のオイ

ディプスはテーバイを去り流浪の一生を送る。

4. 『オイディプス王』における倫理思想 人間のあり方

審客はオイディプス王の苛酷な運命に圧倒される。しかし、観客は人間として最も忌み嫌われる行為をしてしまったオイディプスにむしろ深く同情し、その誠実で雄々しい生き方に感動し、自己のあり方を省みたという。『オイディプス王』の悲劇は人間の運命は神々が定めたものであり、人間の知恵も努力も善意の行為もすべてむなしくこれをくつがえすことはできないことを語っている。人間はともすれば定められた運命から逃れられるかもしれないという希望に期待をかけ、あるいは逃れたいという欲望に動かされる。しかし運命（テューケー）は人間の知性を粉碎する非常の女神であり思いもかけない所に姿を現わすのである。人間は不測の運命に出会うときはじめて自己の無知と思い上りに気づき、人間とは死すべき有限な存在であることを知るのだ。では人間は運命に翻弄されるだけなのだろうか。先王殺しの犯人探索が進むにつれ次第に自己の恐しい運命に気づき始めながらもオイディプスは探索を止めない。「聞くのも恐しい」いまわしい事実と直面せざるを得なくなったとき、彼は破滅を覚悟して真実に身を委せていく。さらに両目を自分の手で突き刺す。こうしたオイディプスの行為は、人間の幸、不幸、利害等は神々あるいは運命によって支配されているものではあるが「正しく生きる」ことは人間の自発的、主体的精神にもとづくものであるというギリシア人の人生観を端的に示すものであろう。

ソクラテスは不正な「死」に対して他の不正（違法）でもってすることを拒絶した。彼にとって「善く生きる」ことは「正しく生きる」ことであったといわれる。私はソクラテスの生き方にオイディプスの生き方との多くの共通点を見出せるように思う。今日、利害打算で要領よく生きようとしがちなのが多数。幸、不幸、利害に関わりなく、正しく生きようとすることにこそ人間の主体的自由があることを、オイディプス王は実に生々しく私たちに語ってくれるのである。

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
 - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会長 (1名)
 - (2) 副会長 (若干名)
 - (3) 常任幹事 (若干名)
 - (4) 幹事 (若干名)
 - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
 - (1) 役員を選任
 - (2) 決算の承認、予算の議決

事務局組織内規

昭45.1.27

全倫研 共通
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく(都・全倫研とも規約改正の要あり)
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局長	原則として会長校に所属する
事務局顧問	歴代の事務局長があたる
事務局員	ア 事務局次長(1名)
	イ 研究部長・副部长(各1名)
	ウ 研究調査部(全倫研のみ6名)
	エ 広報係(全・都各1名)
	オ 会計(1名)
	カ 分科会世話人(都倫研のみ、分科会互選・分科会で2名)
	キ 大会役員(大会ごとに委嘱する)

3. 事務局分掌

事務局長	企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり会長を補佐する。
事務局顧問	同上の目的で事務局長を補佐し助言する。
事務局員	事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にするため局長を補佐する。
ア 事務局次長	事務局長を補佐する。
イ 研究部	会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる。分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する。

ウ 調査研究部	調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる。
エ 広報係	会の記録、広報活動、会報、名簿の作成にあたる。
オ 会計	会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる。
カ 大会役員	事務局長 企画・運営の最高責任をもつ。 庶務・連絡 局長を補佐する 受付・会計 文書配布物、名簿の作成、会計にあたる
司 会	総合司会、研究発表、研究討議、懇談会の司会
議 長	総会議長
記 録	会の広報部を中心に して組織、文書記録、 テープ、写真
接 待	来賓その他の接待

4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする。

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることにする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

事務局より

東京都立保谷高等学校

杉原 安

オイル・ショックの後、ここ数年世界は不況から抜け出せないでいる。円の価値は、急激に値上りしたが国、地方共大巾な赤字財政に悩んでいる。その影響をうけて本研究会に対する都の補助金は、各研究会共々一律に減額された。来年度以降もその方向にあると聞いている。こういう厳しい状況の中で、分科会における会員相互の研鑽の結晶として、紀要第16集が出来あがろうとしている。そこには"石の上にも三年"と言われるが、10余年にわたる研究会の活動の歴史の重みと同時に、わずか数千円の通信費で分科会活動を支えてこられた世話人の先生方のご苦勞がある。心から御礼申し上げます。分科会によっては、会員の参加の便を考へて日曜などの休みの日に活動を開いたと聞かれています。紀要の構成なども年々創意工夫が加えられ、また日常の実践活動をふまえた多くの貴重な原稿が盛られている。

しかし、これは氷山の一角に過ぎないのであって、紀要に載らない研究活動がある事を忘れてはいけません。私自身も昨年、今年と事務局の仕事に追われ、執筆の機会を失し大変申し訳なく思っています。

さて、5月末頃には教育課程の新しい指導要領が公にされるようである。本研究会の特別分科会に参加された先生方の御努力と、指導要領に携わられた先生方の御尽力で、不満の点はあっても本研究会の意向が汲み取られていることと思う。仮に必修「現代社会」選択「倫理」になったとしても本研究会の果すべき役割の重要性は変わらないと思う。

最後に事務局次長の小川輝之先生、この紀要をまとめられた研究部の浅香育弘、内田君夫、小河信国の諸先生、各分科会の世話人の先生方、会報を担当された宮崎宏一、葦名次夫の両先生、その他事務局の先生方に重ねて御礼申し上げます。

あ と が き

今年の研究部は内田・小河・浅香の3人がそれぞれ持ち味を発揮しつゝ研究活動の裏方・まとめ方として、任務を推し進めてきたと思う。勿論事務局長・次長をはじめ事務局の方や多くの先生方の大きな支えがあったればこそであることはいうまでもない。

まず、例年のことであるが新年度の主題設定や、研究体制特に分科会構成に至るまでの、活動方針と組織づくりが決定・承認をみるまでが一仕事である。原案は事務局や幹事会など数次の検討を経て総会で承認された。

それから会員の皆さんが新年度の方針に賛同し、理解して活発な研究活動を展開して下さるかが不安だった。しかし研究例会も西に東にと場所をかえ開いたが、問題山積の時代を迎え、先生方の悩み・関心も深いせいも、例年に劣らず多くの先生方が熱心にご参加下さった。分科会所属への呼掛けに対しても、3つの分科会に20名位ずつ集まり、しかも各分科会とも平均月1回位の割で、年間最低6回は開くことができた。

しかも第1・第2分科会は若い先生方の参加が多かったのが特色で、平日は多忙のため集まりにくいからと、日曜日や土曜日に昼から夕方まで数時間、時間をたっぷりとって開催したことが多く、経験豊かな先生をまじえて、熱気あふれる発表交換・討論を展開していたのには、世話人のご苦勞はもとよりであるが、その熱心さに頭がさがった。

その点、第3分科会はどこらかという年輩の先生が多く、2人の若い常連の女の生をまじえて、なごやかな雰囲気の中で「花伝書」という一つの対象に焦点をしばり研究会を続けたが、集まることが少しも苦にならない楽しい勉強会になったと思う。

本年度は公開授業や研究発表に女の先生も担当し、若い先生が積極的に参加したことと合わせ「新しい波」を感じた。新しい試みとして研究例会での講演要旨を載せることにした。今後の発展を祈ります。(浅香記)

昭和52年度 都倫研紀要 16

発行 昭和53年3月25日 [非売品]
著作者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会
代表 岡本武男

印刷 (株) 稲谷印刷所
東京都千代田区有楽町1-9-4
電話 (03) 212-8608~9

事務局 東京都保谷市住吉町5-8-23
東京都立保谷高等学校内
電話 (0424) 22-3223

発行者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会